
I・000・S インフィニット・オーズ・ストラトス

コントローラー・X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I・000・S インフィニット・オーズ・ストラトス

【Zコード】

Z6059X

【作者名】

コントローラー・X

【あらすじ】

女性にしか使えない世界最強の兵器、IS インフィニット・ストラトス。

しかし、世界で唯一ISを使える男がいた。

今、この世界に《誕生》した《王のIS》と男の物語が始まる。

プロローグ（前書き）

初投稿なので文章が目茶苦茶だと思いますが、暖かい眼差しで読んでくれると嬉しいです。

プロローグ

夜、とある高層ビルの会長室。そこには2人の青年と、椅子に座っている1人の男性がいた。

「明日がIIS学園へ転校だつたな、竜馬君」

椅子に座っている白髪混じりの男性の名は、黒木 白黒。日本に数多くのIIS開発企業の会長である。

「はい、白黒さん…」

そして、返事をした黒髪の青年……龍東 竜馬は元気に答えた。

「いや～もうすぐ俺の開発したIISが日の出るなんて、こっちも緊張してきたなあ……」

白衣を羽織った青年……黒木 影宮はそう言いながら右手を胸に当てながら緊張していた。

「息子よ。竜馬君のIISは…」

「これだよ」

そう言いながら影宮は、ポケットから直径3cm、厚さ6mmの銀色のメダルを取り出した。表に十字の模様、裏は三つ円が横に並んだ模様が描かれているメダルだった。

「待機状態になつてゐるが、呼び出せばすぐに展開できるからな」

影宮はメダルを竜馬に渡すと、竜馬はメダルにある小さな穴に赤い

リボンを通して首に掛けた。

「…？ そのリボンは…」

「あ、小2の転校する時に友達から貰ったんです。『いつまでも、私たちは友達だ！』って…」

竜馬は田を開けて思い出していった。転校する事が決まりこの学校での最後の授業、パーティーをした女の子に友達の証として貰ったリボンの事を…。

「影宮さん、白黒さん、今までお世話になりました」

そして田を開けて、影宮と白黒に感謝の言葉を述べた。8歳に両親を亡くし自分を引き取ってくれた白黒と、実の兄のように相談に乗ってくれた影宮だ。

「ハツハツハツ！ 竜馬君、長期休暇に入つたらまた戻つて来なさい。ここはもう、君の家なんだからな」

白黒は笑顔で言うと、竜馬は「はー！」と嬉しそうに言った。

「アレが完成したら届けるから、それまではセルで頑張ってくれ。期待してるぞ」

影宮は竜馬の肩に手を置きながら言った。

「はい。これからもドロイドや武器の開発、頑張って下さー

「ああ、そつちも《オーバーズ》を頼むぞ」

「はい！」

二人は固い握手を交わし、会長室を出てそれぞれの部屋に戻つてい
つた。

主人公設定（11／09訂正）（前書き）

主人公のプロフィールと設定です。

主人公設定（11／09訂正）

名前：龍東 竜馬 りゅうとうりゅうま

年齢：15歳

性別：男

所属：1年1組

好き：大切な人や友達の笑顔、麺料理（パスタもOK）

嫌い：大切な人や友達を傷つかせる存在、ゴーヤ

趣味：プラモデル、旅行

マイペースな性格だが、誰でも優しく接する事が出来る。
成績は中の上だが、なかなかの切れ者らしい。

身体能力は高く、天性の格闘センスを發揮させる。

千冬とは小さい頃よく遊んでもらっていた。

8歳の頃に両親を事故で亡くし、知り合いの「IS開発会社」「メルダ・ファウンデーション」会長、黒木 白黒くろきはくろに引き取られる。

引き取られると同時に、今いた小学校を転校してしまった。

篠とは同じクラスの友達だったが、転校当日に篠はリボンを『友達の証』として竜馬に渡した。

転校した学校では鈴、弾、蘭と出会い、親友になった。

中学校には通わず通信教育をしていた。そのため、白黒の仕事の邪魔にならないよつこ着いて行き、世界中回った。

13歳の時オーストラリアで束と出会い、「君にはEISを使える才能があるね やつたじやん、ブイブイ！」等と言われた。

世界中を回った時に鈴と再会、ある事件の後に千冬と再会している。

その後、会社にあるEISを起動することができ世間に発表された。

0-1話【黙ヒクラスマーテルヒの夢】（前編）

やっと1話の完成……のはずが、本文がめちゃくちゃな部分がありたので修正しました。

01話【男とクラスマートとHS学園】

メルダ・ファウンデーション 駐車場

「竜馬、準備ができたぞ」

「ありがとうございます、影宮さん」

影宮は、愛用の黒ベンツに竜馬を乗せていた。

「ゲート前でいいんだな」

「はい。そこから担任の方が案内に来てくれるから大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、出発だ！」

そして、一人を乗せたベンツは駐車場から出発した。

HS学園 ゲート前

「……まだかなあ」

影宮にゲート前まで送つてもらい別れて10分、竜馬は担任の到着を待つていた。

(HS学園の職員つて、全員が女性だったな。担任も美人なのかなあ……)

そう思つていると、こちらに近付く女性に気がついた。黒のスースにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。

「あつー！」

竜馬はその女性を知つていた。白黒の仕事でドイツへ行つた時に面識があつたのだ。

「すまない、遅くなつてしまつたな」

「千冬さんーお久しぶりですっーー！」

竜馬は女性…織斑 千冬に笑みを浮かべてお辞儀をした。

「ああ、ドイツで会つた以来だな竜馬。黒木会長は元気か？」

「はい。田黒さんも影宮さんも、相変わらず元気ですよ」

「ふつ、やうか」

千冬は軽く微笑むと、二人は歩き始めた。

「束に聞いたが、まさかお前がEHSを使えるとはなあ……」

「僕も最初は驚きました。2年前に束さんと会つて、『君にはEHSを使える才能があるね よかつたじゅん、ブイブイー』って、急に言いましたからねえ……」

竜馬は束との思ひ出をしみじみとするべ、千冬は小さく溜め息を吐いた。

「全く、束は相変わらずか。……その様子から見ると、基礎知識と訓練は十分そうだな」

千冬は改めて竜馬を見た。3年前の竜馬の体つきとは違い、がたいが良くなっていた。

「束さんの言葉から今に至るまでは、EHSの勉強を中心にしていましたからね。それにこれも」「

そつと、竜馬は首に掛けてあるメダルを千冬に見せた。

「これが、お前の……」

千冬は何か言おうとしたが、教室の前まで来てしまった。

「まあ、後で話す。今はここで待機しろよ」

「はい、ちふ……じゃなかつた。織斑先生」

竜馬は千冬を織斑先生と訂正して言つと、千冬は小さく微笑みをした。その後、千冬が教室に入りS H R Rが始まった。

(数分後)

1年1組

「それではＳＨＲを終了する…………と言いたいところだが、ここでも
まだ自己紹介をしていない奴がいる」

そう言い終わると、クラス全員がざわめいた。

(入学式早々に転校生? いつたい誰だ?)

その一人、ポニー・テールが特徴の女子……篠ノ之 篠は考えていた。

「入れ」

「はい、失礼します」

千冬は廊下で待たせている竜馬を呼ぶと、扉が開いた。
竜馬が入ると、まずクラス全員が固まった。

(え……? あい……つは……)

そして、筠は目を見開いていた。

「自己紹介をしてくれ」

「はい。えっと…、龍東 竜馬です。よろしくお願ひします」

竜馬はそつ言いつと微笑んで、軽く頭を下げる。

「…………」

「…………？」

だがクラスの反応が無く、竜馬は頭にハテナマークを浮かべたような顔をした。

だが次の瞬間……

「………… も」「」

「 もへ。」

「………… キヤアアアアアア…………」「」

「ほわっ…」

突然の黄色い叫びに竜馬は後ずさりし、所々声が聞こえた。
「やつたわー男子よ男子ー！」

「しかもウチのクラス…」

「…………」「ち向いてー！」「」

「凄くイケメンねー嫌いじゃないわっー！」「」

「あ、あははは……」

こんな場面に遭遇した竜馬も、流石に苦笑いするしかなかった。

「つるさいで馬鹿者共！……まったく。毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ……」

クラスを静めさせると、千冬は溜め息を吐いた。

「龍東、お前の席は篠ノ之の後ろだ」

千冬は窓際の席を見ながら言つて、竜馬は席に近づいた。そして筈と田が合つて、微笑んで言つた。

「8歳の時以来かな。久しぶり、筈」

「あ、ああ……。久しぶりだな、竜馬……」

一人は握手をしようとした瞬間……

バシツ！

「あ痛つ！」

「喜びの再会は後にしろ」

竜馬の頭に出席簿が叩き付けられ、握手が出来なかつた。

休み時間 屋上

1時間田の授業が終わり、龍馬と篠は屋上に来ていた。教室ではクラス全員だけではなく、2・3年の先輩も詰めかけていたため篠と話が出来ないので、篠を連れて屋上へと移ってきた。

「8年ぶりかな、最後に会ったのって……」

「あ、ああ……そうだな……」

「それにしても……」

「な、何だ」

龍馬は話しかけたが、篠は顔を赤らめて頷いた。

竜馬は篠を見つめると、篠は更に顔を赤らめた。

「うん、やつぱつ篠にはボーネールが似合つてゐるね。可愛いくて

「か、かわつ、可愛い…、體を重つなつ……」

「はまつ。嘘じやなこよ

「む、むわ……」

竜馬は微笑みながら言つと、筈は顔を真っ赤にして俯いた。

「あ。あとこれ……」

竜馬は首に掛けてるリボンを筈に見せると、筈は懐かしむように見ていた。

「懐かしいな。まだ持つてたのか……」

「ああ。友達の証を無くすなんて、出来ないよ」

「ふふつ、全くだ。無くしてたのなら、私の竹刀が黙つてないからな」

「おお怖い……」

一人はふざけながらも、久しづびりの再会を喜んでいた。

キーンコーンカーンコーン

「あ、もう時間か」

「そりだな」

授業開始のチャイムが鳴り響き一人は屋上の扉まで行くと、扉の前で竜馬は止まり、笑顔で筈に利き腕の拳を突き出した。

「いれからもよひしへ、 篠」

「あつー。」

篠も笑顔になり、竜馬の拳を自分の拳に突き出した。
これが、竜馬の親友の証である。

2時間目 教室

篠 Side

私は小学生の頃、道場に通うクラスの男子がいた。そいつの名前は

龍東 竜馬。

同年代と試合して負けなしの私が唯一、勝てなかつた奴だ。

最初は、「次は勝つ!」と、私が田標にする『気持ちぐら』しか思わなかつた。

でもある日、私が男子達に【男女】と言われて虚められた時に、竜馬が男子達に向かつて言つてくれた。

「なに男が女の子を虚めてるんだよー・そんな最低な事して、恥ずかしくないのかよー。」

それからだ。私が竜馬を田標としての気持ち以外に、あいつを意識

し始めた。

竜馬は強いだけじゃなく、老若男女誰にでも優しく、あいつの笑顔はみんなを優しい気持ちにしてくれること。

そして……誰よりも……かつこじいのだと……。

だけどあの日、道場で竜馬と稽古をしていた時に雪子叔母さんが息を乱して入つてくると、涙を浮かべて竜馬に言つていた。

「竜馬くんの……」両親が、交通事故で……っ……！」

私は目を見開いた。嘘だ！あの優しい童子さんと人柄の良い竜治さんが亡くなつたなんて。

その話を聞き終わる頃、竜馬は意識を失つてしまつた。

数日後、竜馬のご両親の葬式が終わった頃に白黒さんが尋ねてきた。白黒さんの息子、影富さんは姉さんの研究者仲間でたまに顔を合わせた程度だ。

尋ねてきた理由は、竜馬を引き取りに来て、今の学校を転校してしまふと言つていた。

それを聞いた夜、私は布団のなかで泣いた。

竜馬が引越す日、私はある決心をしていた。あいつに告白すると、決心していた。

だが、いざ言おうとした時…

「い、いつまでも、私たちは友達だ…！」

私は臆病だ……あれだけ決心したのに、竜馬を前にしただけで心臓が壊れそうだった。

「……。ありがとう」

だが、それを聞いた竜馬は目に涙を溜めながら、私の好きな笑顔をしてくれ、親友の証をしてくれた。

それを終えると、私は髪を結んでいたリボンを竜馬に渡し、そして別れた。

あれから8年、私は竜馬を忘れる事はなかった。

だが2年前、ISを使える男が現れたとニュースを見て驚いた。

竜馬だった。成長はしているが、あの笑顔を私は忘れなかった。

IS学園に入学し、姉さんの友達の千冬さんが担任で驚いたがさらに竜馬が転校てきて、更に驚いた。

休み時間にいろいろ話をしようとしたが、短すぎてあまり話せなかつた。でも、親友の証をして私は思つた。

私は今でも……竜馬が好きだ！

休み時間 教室

「へえー、りゅーくんってあのメルダに居候してたんだー」

「メルダって、あのメルダ・ファウンデーションでしょ？」

「やつぱりエスを使える男子ってスゴイなあー」

2時間目が終了すると、竜馬はクラスの女子に質問攻めにされたいた。上から、布仏 本音、相川 清香、谷本 癒子が喋つており、本音の言つ《りゅーくん》とは竜馬の事である。

「そうだなあ、あとは「ちょっと、よろしくて?」……ん?」

会話中、後ろから声をかけられた竜馬は振り向いた。話しかけてきた相手は、わずかにロールがかかった金髪のロングヘアの女子だった。

「まあ!なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがいるんではないかしら?」

「えつと……(何なんだこの人。いきなり突っ掛かってきて……ん?)この人は……」

突つ掛かってきた女子に竜馬は戸惑うが、ベンツ車内で読んでいた1組の生徒リストで同じ顔だったのを思い出した。

「たしか……、セシリア・オルコットさんだよね？イギリス代表候補生で、入学試験で教官を倒した……」

「あら、ご存知でしたのね？」

「まあ、クラスメートの名前くらいは覚えないと失礼だしね。まさか代表候補生と同じクラスになるとは、僕も最初は驚いたよ」

竜馬は右頬を搔きながら言つと、セシリアは人差し指をびしっと竜馬に向けた。

「そう！本来ならわたくしのよつな選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。それは分かつてますわよね？」

「まあ篳にも久しぶりに会えたし、たしかにラッキーかも……」

「そつ言つと、セシリアの田がややつり上がり竜馬に迫つていった。

「わたくしよりも友人と会えた方が幸運つて、どういう意味かしら！」

「え、えつと……まあ落ち着いて」

「！」これが落ち着いていられ

「

キーングーランカーンゴーン

セシリ亞の話に3時間目開始のチャイムが割つて入った。

「つ……一またあとで来ますわー逃げないことねーよくつてー」

セシリ亞は一方的に言つと、竜馬に背を向けて自分の席に戻つた。

一方、筈は……

(りり、竜馬が、わわわ私と会えて……らりらりら、ラッキーつて～
~~~~~)

……俯いて悶えていた。

3時間目 教室

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

3時間目、教壇には千冬が立っていた。尚、1・2時間目の授業を教えていたのは副担任の山田 真耶である。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め

ないといけないな」

思い出したように千冬が言ひ、クラスがざわざわと色々立つてい  
た。しかし、竜馬は冷静にしていた。

（代表者か……。対抗戦とか出れるから、データを取るには良い役  
所かな）

そう考へていると、女子の一人が手を挙げて言つた。

「はい。龍東くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は龍東 竜馬…………他にはいないか？自薦他薦は問わ  
ないぞ」

話が進むと、筈は竜馬に言つた。

「いいのか？竜馬」

「何が？」

「これではお前が代表者になるが……」

「んー……まあ良いけどね。男が乗る車なんて、いろいろと経験  
を積めそうだし。なにより……」

「なにより？」

「面白そうだ」

「カツ！」と笑みをした竜馬を見て、筈は微笑んで「まつたく…変わつてないな」と言つた瞬間、教室の後ろにバンッ！と音がした。

「待つてください！納得がいきませんわ！」

音の正体は、机を叩いて立ち上がったセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに……このセシリア・オルコットにそのような屈辱を1年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは怒涛の剣幕で言葉を荒げると、癪にさわったのか筈が言った。

「ひなせこども。少しば落ち着いたりどうだ」

「貴女はお黙りなさい！」エドワードの貴女に、Aのわたくし意見だなんて図々しいですわ！」

「なつ…！何だと」

セシリアの言葉に、筈は怒りの表情で立ち上がりとした瞬間、それは起こった。

「いい加減にしないか！！」

「「つ..」」

大声に驚いた筈とセシリアは、声がした方に目を向けた。そこには、

セシリ亞を少し睨むのみで見ている竜馬だった。

「黙つて聞いていれば……。僕を馬鹿にしたり、侮辱するなり良いよ。だけど、親友を侮辱だけはするな！」

「竜馬……」

竜馬は竜馬を見て驚きと嬉しさを感じていた。まるで、昔に馳められたところを助けてくれたようだ。

「な、なにかと思えば……。大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で

「イギリスだって大してお国自慢がないくせに。あるのは世界一まずい料理の連續覇者ぐらいだろ」「なつ…………！」？

竜馬が言つた一言で、怒髪天をつくと言わんばかりのセシリ亞が顔を真っ赤にして怒りを示していた。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますのー！？」

「先に侮辱したのは君だろー！？」

睨み合いのなか、セシリ亞はバンッ！と机を叩いて人差し指を竜馬に指した。

「決闘ですか！」

「ああ、いいよ

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……こえ、奴隸にしますわよ」

「真剣勝負に男も女も関係ないよ。手を抜くほど腐つてないよ」

「やう? 何にせよひょうじいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリ亞・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね!」

セシリ亞が言い終わると、竜馬はある事を言った。

「んじゃ、ハンデはどのくらいつけたらいいかな?」

「…………はい?」

竜馬が言つた一言にセシリ亞はア然としたが、その瞬間にクラスからドツと爆笑が巻き起こつた。

「り、竜馬くん、それ本気で言つてるの?」

「女尊男卑の今、男が女より強かつたのって大昔の話だよ?」

クラスの女子は話しかけるが竜馬は動じなかつた。

「ふふつ、日本の男子はジョークセンスがありますのね。むしろ、専用機を持つわたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ」

そう言つと、セシリ亞は左耳に付けてあるイヤーカフスを竜馬に見せた。どうやら、あれがセシリ亞のHSのよつだ。

「ハツハツハツハツ！」

だが、竜馬は気にせず笑っていた。

「……やつぱり、ハンデ付けた方がいいかな?」

「はあ!?.だからそれは、専用機を持つわたくしが専用機を持つてたらハンデを付けていいんでしょう?」 「え?」

竜馬の言葉に、セシリヤや幕を含むクラス全員が静まり返った。それをよそに、竜馬は首に掛けてあるリボンを外し、メダルをセシリヤに見せた。

「ま、まさかそれは…」

「ああ。僕の専用機だよ」

「ええええええ!…」「

クラス全員が驚き叫ぶと、コソコソと何か音が聞こえていた。

「あれ?何でしちゃうか…」

真耶は音のする方に目をやると固まつた。窓を見ると、黒い小さな鳥型ロボットが32インチ薄型テレビを持つて窓を突いていた。

『何やら面白そうな事が始まるみたいだな』

画面に映し出されたのは、影宮だった。

「影宮わざ。エ!」  
「それを……」

『細かい事は気にするなーそれより、専用機と闘えるなんていいいじゃないか。頑張れよー!』

「はい、頑張りますー!」

影富は親指を立てて健闘を祈ると、竜馬も親指を立てた。そして、鳥口ボットはテレビを持ちながら空に飛んでいった。

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。龍東とオルゴットはそれぞれ用意をしておへよ!」

ぱんつと手を打った千冬は話しを締めて、授業を再開した。

## 02話【回棱と代表決定戦と誕生のオーバース】（前書き）

2話ができました。

やつといらがでたよ……。 戦闘シーンが難しいです……。

## 02話【同棲と代表決定戦と誕生のオーバース】

放課後 学園内

授業が終わり、竜馬は一人で学園内を探索していた。

「それにしても、ものすごい視線だな……」

中庭を歩いているだけで、竜馬は女子の目線を集めていた。元々 I.S 学園は女しかいなかつたので無理もない。

「今日で全部回るのは無理だな……。ん？」

竜馬は立ち止まると、黒い自販機を見つけて近づいていった。

(+)にもベンダーがあるんだ。形状から見ると販売専用型か……。  
よしー)

そう思ふと、竜馬は意識を手に集中するとメダルが5枚現れた。首に掛けてあるメダルと同じ形だが、裏の模様は5枚全て違っていた。共通するなら、全て生き物が描かれていた。  
これが I.S 専用メダル…セルメダルである。

「…………」

竜馬は I.S のメダルを自販機にかざすと、硬貨投入口とは別の投入口が中央に現れた。同時に飲み物が全て、赤、緑、水色、黄と、色とりどりの缶に変わった。

「！」の場合は、タ力にするかな……」

言いながら全てのセルメダルを投入し、赤い缶を5本買った。

「そんじゃまあ……」

竜馬は、プシュッ！と缶を一本開けた。すると……

【TAKA KAN】

『キューイー！』

『キューイー！』『キューイー！』

赤い缶は鳥型ロボットに変型し、残りの缶も同時に変型した。

これが、メルダ・ファウンティーション製作の可変型缶ロボット《カンドロイド》と、カンドロイド販売機（ベンダー）である。

「学園の施設・設備の場所を調べてくれ。あと、学園にあと何台ベンダーがあるのかも頼むね」

『キューイー！』

そう言われたタカ・カンドロイド達は手分けして飛び立ち、竜馬を見届けたあと再び歩き始めた。

廊下 職員室前

日も暮れる頃、竜馬はタカ・カンドロイド達が集めた施設の場所をメモに記入しながら歩いていると、前から真耶が歩いて来た。

「あつ、龍東くん。何しているんですか？」

「さつき学園の施設等を調べてました。ここは広いから、迷わないよつこ一様……」

竜馬は書きかけのメモを見せると、真耶は頷いた。

「やつですか。実は寮の部屋の事ですが……個室の方が用意出来てなくて、1ヶ月程相部屋になつてもらいますね」

そう言つた真耶は部屋番号の書かれた紙と鍵を渡した。

「届いた荷物は部屋にありますから、時間を見て部屋に行つてください。それじゃあ私は会議があるので、これで」

「はい。さよなら、山田先生。また明日」

竜馬は頭を下げると、寮に向かつて歩きだした。

寮

「1025室……！」か

竜馬は紙に書かれた番号と見比べると、数回ノックした。

「…………いなかな？」

返事が無かつたのでドアに鍵を差し込むが、ドアは開いていた。

ガチャ

「失礼しまー……おおー！」

竜馬は部屋に入る驚いた。大きめのベッドが一つ並び、そこいらのビジネスホテルよりも遙かにいい部屋だった。

「荷物は……」れだな

竜馬は机の下に置いてあつた荷物を開け、中にあるものをチェック

した。

「えっと……着替えに携帯充電器、iP ad、セルメダルケース  
……ん？」

すると、箱の底にはオレンジ色の缶と黒の缶があった。

「新型カンドロイドか……。後で開けてみる「誰かいるのか?」  
つー!」

竜馬は突然、奥の方から声が聞こえて驚いていると扉が開いた。

「ああ、同室になつた者が、これから1年、よろしく頼むぞ」

出てきたのは、体をバスタオル1枚を巻いてタオルで長く髪を拭いていた、今日再会を果たした親友だつた。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使つていた。私は篠ノ一ほつ、第！？」之……えつ？」

自己紹介をしようとした筈は、聞き覚えのある声を聞いてきょとんとした。

「ニ、ニヤ、ハ、ア、リ、テ、」

「あつ、ああ……」

2人は顔を真っ赤になつた次の瞬間……

「ドゴオォン！」

「あべしつー！」

真っ赤な顔をした筈の強烈なアッパー・カットが、竜馬の額にクリーンヒットし、そして……

バタリ

「うつ、竜馬！？」しつかりしつかり、竜馬ー！」

そのまま竜馬は気絶をしてしまって、筈は慌ててしまった。

（十数分後）

「『めん…本ひ當に』めん！」

「いや、私の方こそすまない。もう頭をあげてくれ

田を覚ました竜馬は理由を筈に話し、ひたすら謝罪をしていた。尚、筈は竜馬の氣絶中に寝間着浴衣に着替えていた。

「と、とつあえず、同室になるのだから色々と決めておかなければならぬ……」「……」

「そ、そうだね……」

一人は顔を合わせるが、頬が赤かつた。あの場面を思い出すので無理もない。

「ま、まかシャワー室の使用時間だが……」

「ああ、篝が先でいいよ。剣道部に入ってるし、終わつたあとそつぱりしたいしね」

「や、そつか……」

「…………」

「な、何見ていろ……」

「ん？ やつぱり篝つて、浴衣とか似合つてるなーと思つてね」

「にあつ…………！」

不意に言つた竜馬の言葉に、篝は顔を真つ赤にして立ち上がつた。

「篝？ デリ……」「あ、ああそつだーそこのジユースを貰つがー……え？」

竜馬の言葉を遮った簞は、竜馬の机に置いてあつたオレンジ色の缶を手に取つた。

「ああ、それは…」

「ん…？」

止めようとした竜馬だが、簞は缶のフルタブを開けてしまった。すると……

## 【KUJAKU KAN】

『クジャク』

「やめ…」

突然の出来事に、簞は後ろに下がつた。目の前にいるのは、後ろでカッターを回転させて飛んでいるカンドロイド……クジャク・カンドロイドである。

「簞、大丈夫か？」

「あ、ああ……何なんだコレは？」

「ソレは影宮さんの発明品だよ。使用者のサポートをする為に開発したみたい」

## 【GORILLA KAN】

『ウホッ！ウホッ！ウホッ！』

そう言いながら、竜馬は黒い缶……ゴリラ・カンドロイドを起動させた。

「そうか。……なあ、竜馬。来週の試合だが……」「箒、頼みがあるんだ」「な、なんだ?」

話の途中、竜馬は真剣な顔で箒を見ながら告げた。

「付き合つてほしい」

「え?」

この時、箒は世界が止まる音を聞いた。

（翌日）

「いのん、遅くなつた……よ~。」

「…………」

授業を終えた2人は、胴着姿で道場にいた。尚、竜馬の胴着は影宮に届けて貰つた。

「どうしたの、筈?」

「……何でもない」

「?」

筈は頬を膨らませて不機嫌だが、竜馬は首を傾げるしかなかつた。

(何が「付き合つてほし」「だ!特訓の相手ではないか!私はてつきり、その……)

筈は不機嫌の理由を心の声で叫んでいたが、後になるにつれて心の声は小さくなつていた。

「…………筈……」

「はつ……」

筈は我に返ると、竜馬は心配そうに見ていた。

「体調が悪いの?やつぱつ、止めた方が……」

「だだだ、大丈夫だ……ほら、さつさと防具を着けろ……」

「あ、ああ……」

竇の態度を気にしたが、竜馬は自分の黒い防具を着けた。竇も赤い防具を着け、2人は向き合った。

「竇と打ち合つのは、本当に久しぶりだな」

竜馬は親友と一緒に、剣道をした頃を懐かしく思い目を閉じ……。

「そうだな。私はもう、昔の私とは違つた」

竇は片思いの人と、また打ち合つ事が出来て小さく微笑んだ。

「それじゃ……」

竜馬は目を開いたが、いつもと違い、真剣な眼差しをしていた。そして……

「お願いするよ、全国大会優勝者さん！」

「よし、じこー！」

特訓が開始された。

「…………」

同時刻、セシリアは教室の窓から空を見上げていた。

（あの男も専用機を持つているなんて……）

男……竜馬の発言した専用機の所持を聞いて、セシリアは考えていた。

「…………（フルフル）」

だがセシリアはその考えを消して、自分の勝利した事を考えだした。

（まあ……例え専用機でも、わたくしの勝利は見えますわ。このわたくし、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』が……）

そう思いながら、セシリアは左耳のイヤーカフスを優しく撫でた。

「ねえねえ、道場で篠ノ之さんと竜馬君が剣道で打ち合つてゐたいよー！」

すると、廊下から話し声が聞こえてきた。

「ホントー篠ノ之さんって、去年の剣道全国大会で優勝したんでしょ。竜馬君、勝ち田ないんじゃないの？」

「そりゃそりだけど、面白くないじゃない。はやく行きましょー！」

話していた女子達は道場へと向かった。

(篠ノえさんがねえ……。面白やうですわね。あの男がボロボロで泣いているのが目に浮かびますわ)

その話を聞いたセシリアは意地悪な笑みをして、教室を出でいった。  
竜馬と筈が特訓している道場へと……。

## 道場

セシリアは道場に来ると中を見た。すると、剣道は終盤に差し掛かっていた。

「はああああつ！」

筈は竹刀を上段に構えて走り込み、竜馬に迫る。だが竜馬は一步も動かずにいた。そして…

「バシイイイン！」

竹刀の音が、勢いよく響いた。

「なつ……」

セシリ亞は一瞬の出来事に驚いた。

筈が竜馬の面を打ち圧しつとした瞬間、竜馬が急に筈の懷に飛び込み胴を打ち込んだ。

「　　おおおー！」

ギャラリーは2人に拍手を送ると、2人は面を外した。互いの顔にはうつすらと汗をかいていた。

「ふう……。コレで8勝2敗。腕を上げたね、筈」

「むう……。これでは竜馬の特訓と言つより、私の特訓ではないか」

「そうかな？僕も最初取られた時は焦つたけど……」

「だが、そこから5連勝したではないか……」

そう言つと、筈はシュンツと小さく落ち込んだ。

「まあまあ、落ち込まないの……ん？」

ふと、竜馬はギャラリーの中にいたセシリ亞を見つけると、声を掛けた。

「オルゴットさん。来週、良い試合をしよう」

「…………ふんっ」

竜馬は微笑みながら言つたが、セシリアはそっぽを向いて道場を後にした。

「…まだ怒つてゐるのか 「竜馬、何を見ていーるー」 エ?」

筈は不機嫌そうな顔をして竜馬を呼んだ。

「どうしたの筈?」

「休憩は終わりだ。続きをするだ

「分かった。そうしようか」

そして、試合が再会された。

その約1時間後、訓練は終了した。ちなみに、竜馬の結果は総合で  
24勝6敗だった。

夕方 食堂

「「いただきます」」

訓練後、竜馬と筈は一度部屋に戻つて用事を済ませ、食堂へ行つて夕食を取つていた。ちなみに、筈は焼き魚定食を取つており、竜馬  
は……

「まさかHIS学園でコレが食べれるなんて……」

竜馬の前にあるのは、うどんの上にライス、さらにカレーが掛けられておりトンカツがトッピングされていた。コレが、巷で人気急上昇の定食……カツカレーうどん定食である。

「美味しいなあ。特に衣の湿つた感が凄く好みだ……」

「よく食べれるな、その量を……」

「いっぴい動いたからね。よく食べれるよ」

竜馬は笑みを浮かべたが、箸を置いて箸を見た。

「箒、また時間があつたら剣道に付き合つてくれるかい?」

「ああ、いいぞ」

「ありがと。頼りにしてるよ」

竜馬は微笑みながら箒に話した。

「ああ……。（竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている竜馬が頼ってくれている……）」

平然と答えたが、頭の中では幸福に満ちていた。

（翌週 月曜）

放課後 第3アリーナ・アピット

代表決定戦当日、竜馬はTシャツを着てアピットで待機していた。

「もうすぐか……」

「龍東、準備はいいか？」

竜馬は後ろを振り返ると、そこには千冬、真耶、篠がいた。

「織斑先生、どうして此処に？」

竜馬は質問すると、真耶が答えた。

「龍東くんのHSのデータがまだありませんので、実物を見させてもらっていますね」

「なんですか。篠は何で来たの？」

「わ、私は竜馬に激励をだな……」

篠は顔を赤くしながら言った。

「そつか。ありがと」

「龍東、HSを展開しろ」

「はい。（……行くよ、オーバーズ）」

千冬の言葉に、竜馬は目を閉じて心中で相棒を呼んだ。すると、メダルが輝いて竜馬を包み込んだ。光が消えるとそこには、両肩と背中に浮かんでいる甲冑のようなスラスターと、ベルトの正面と上に何かを入れる溝がある黒いHSを装着した竜馬がいた。

「コレが龍東くんの…」「《オーバーズ》…え？」

ふと、真耶は後ろを振り向いた。そこにいたのは、白衣を羽織った男だった。

「……影宮」

「あの時ぶりだな千冬さん。いや、ここでは先生かな？」

「どうして此処にきた」

「俺が開発したHSのお披露目だしさ、映像よりも生で見たいんだよねー。はいコレ」

そう言いながら、影宮は真耶にオーバーズの資料を渡した。

「竜馬、頑張って勝てよ」

「はい。」

影宮の言葉に答へ、竜馬はピット・ゲートに進もうとするが、幕にて話し掛けた。

「幕」

「な、なんだ?..」

「行つてくる」

「あ……ああ。勝つてこい」

竜馬はその言葉に笑顔で応え、ゲートを出た。

アリーナ・ステージ

「あら、逃げずに来ましたのね」

ステージには、セシリ亞が腰に手を当てて待っていた。

彼女は専用機・ブルー・ティアーズに身を包み、手には2mを超す長大なレーザーライフル『スター・ライトmk?』が握られていた。

試合は既に始まっているので、いつ撃つてもおかしくない状態だった。

「最後のチャンスをあげますわ

すると、セシリアは腰に当たる手を竜馬の方に、びつと人差し指を突き出した状態で向けた。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなれば、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言つたセシリアは田を笑みに細めた。すると、オーバーズの情報から、セシリアが射撃モードに移行し、セーフティのロック解除を確認した。

「……親友と約束したんだ。この勝負、負けるわけにはいかないよ

竜馬が言い終わると、右手に展開されたエネルギー刀<sup>(ラズライト)</sup>を構えた。

「そう? 残念ですか。それなら……お別れですわね!」

キュインッ!

言い終わる直後、セシリアはスタートライト<sup>(マーク)</sup>を竜馬を撃ち抜こうとした。

「よつと」

だが竜馬は弾丸を回避すると、スラスターの出力を上げてセシリシアに近づいた。

「甘いですわー。」

やつぱりと、ブルー・ティアーズのフイン・アーマーから自立起動兵器《ブルー・ティアーズ（別名『ジット』）》を開いた。

「ひちー。」

竜馬は近づくのを止め、ビットの回避に集中した。

「ああ、踊りなさい。わたくし、セシリ亞・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲でー！」

そして、ライフルビットによる射撃の嵐が、竜馬に襲い掛かる。

「だつたら…！」

竜馬はラズライトでゲームを弾きながら、左手にマシンガン《カービンM55》を開いた。そして、一つのビットに弾丸を放った。

「本体よりも先に叩くー。」

だがビットはカービンM55を回避し、落ち落とせなかつた。

「そこだー。」

「なつー。」

だが、龍馬はビジットの回避予測軌道にラズライトを投擲し一つ破壊するとい、セシリ亞は驚いた。

「なかなかやりますわねー。」

「ハツヤゼウス……。ヒー。」

セシリ亞は更に残りのビジットを全て展開すると、龍馬は回避に専念した。

アリーナ・アピッチ

「はああ……。すいこですねえ、龍東くん」

Aピッチでは、リアルタイムモニターを見ていた真耶がため息混じりにつぶやいていた。

「武装の展開が速いな。だいたい500時間の稼働で身についたみたいだな」

「正確には、503時間19分だけどな」

千尋の言葉に答えた影響は、ビックリ楽しんでいた。

「…………」

篝はモニターにつづる竜馬を見つめていた。

（私はまだ、お前と並ぶことが出来ないのか……竜馬……）

アリーナ・ステージ

「2機目貰い！」

一方、竜馬は2機目のビットの破壊に成功していた。

「そんな……！」

セシリ亞は驚いてるなか竜馬はラズライトを構え、セシリ亞の懷に飛び込もうとしてスピードを上げた。

「これで、終わりだ……「かかりましたわ！」……何？」

セシリ亞はニヤリと笑うと、腰部から広がるスカート状のアーマー

が展開した。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機ありますよ！」

しかも、先程のレーザー射撃を行ひビームではなく、ミサイル弾道型を放つた。

「くそつー！」

竜馬は咄嗟に両手の武器をミサイルに投げて直撃を免れたが、爆風により引きはがされた。

「初見でこいつまで耐えたのは、貴方が初めてですわね」

煙が晴れると、セシリ亞はビットを自分の周りに浮かべさせていた。

「ですが、貴方は武器も無く丸腰同然。わたくしに勝つ事は不可能ですわ」

「…………フツ」

セシリ亞の言葉に、竜馬は笑っていた。その瞳は、まだ勝負を諦めていなかつた。

「何が可笑しいですか？」

「いや、凄いなと思つてね。それに、本氣を出さないと失礼だと思つて……ね」

すると、竜馬の左手に一枚のセルメダルを出していった。

「だから、ちょっと本気をだすよ！」

そしてセルメダルをベルトの上にある投入口に入れ、右手をベルトの前にスライドさせた。すると……

カボーン！

ベルトから音が鳴り響き、白と緑が混ざった光の球体に身を包まれた。そして光が収まるとき、そこにいた。

黒いヘッドギアはH字型カメラアイとカプセル状のヘルメットが合体したバイザーに変化。

両手、両足、背中、胸と、合計10個のオープが付いた装甲。そう、オーバーズは姿を変えていた。

アリーナ・Aピット

Aピットでは、影宮以外が竜馬の変化に驚いていた。

「こ、これは！」

真耶はディスプレイを見て驚いた。そこにはオーバーズの情報が載

つてあると同時に、『《バース・モード》起動』と載っていた。

### アリーナ・ステージ

「な、ISの姿が変わった！？」

セシリ亞は目の前の事実に驚愕していた。ISの姿が変わるのは1  
フースト・シフト  
次移行しか知らなかつた。だが、竜馬のオーバーズはそれを済んで  
いる。

「さて…。行こうか、バース！！」

竜馬は相棒オーバーズ・バースモード（別名バース）の右手に展  
開した携行型火器を撃ちながらセシリ亞に突っ込んだ。

「くつ、ブルー・ティアーズ！」

セシリ亞はミサイルを発射するが、バースバスターによつて全て撃  
ち落とされた。そこにすかさず、ビットを2機多角的な直線起動で  
竜馬に接近させた。

「！」の距離なら、コレがいいかな…」

竜馬はバースバスターを収納すると、またメダルをベルトに挿入した。すると……

## 【CRANE ARM】

音声と共に、右腕にはクレーン状の武器が展開された。

「あらよつとー！」

竜馬はクレーンアームを降ると、先端のワイヤークレーンが発射され、2機のビットのスラスターを破壊した。

「なんですかー！」

セシリ亞が驚くなか、竜馬はクレーンアームをセシリ亞に向けて放つた。

「イ、インター セプターー！」

だがそこは代表候補生。クレーンが当たる直前、ショートブレード『インター セプター』で受け流した。

「あやつー！」

だが竜馬のパワーが高く、セシリ亞はインター セプターを落としてしまった。

「よしつー！」

竜馬は攻撃を当てたことに、ガッシュポーズを取った。

「迂闊でしたわ……。わたくし、貴方を侮っていましたわ」

「そりやどうも」

すると、竜馬はクレーンアームを収納してバースバスターを展開させた。

「僕には、もう失いたくないものがいる。守りたい友がいる。いまはまだ自分の手が届く程しか守れないけど、それでも…命に変えて守つてみせる！」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した

「……そうですか」

セシリ亞は目を閉じた。自分よりも大きな負けられない理由を聞き、彼の勝負に賭けた覚悟を聞き、セシリ亞は思った。  
強くなりたい……竜馬のようになろう。

「…………なれますか？」

「ん？」

「わたくしも、貴方のように強くなれますか？」

すると、竜馬は笑顔で答えた。

「ああ、強くなれるぞ。だけど、今はこの勝負が終わってからだね！」

「！？……そうでしたね。なら、わたくしの全力を、貴方にぶつけます！」

そう言つたセシリアはシールドエネルギーを僅かに残し、全てをスター・ライトモードに注いだ。

「そりゃ、だつたら僕も、応えないとね！」

### 【CELESTIAL BURST】

竜馬はバースバスターのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射された。

「コレが、わたくしの全力ですわ！」

同じく、セシリアも最大出力のレーザーを発射した。

ドカアアアアアン！

2つの弾丸は巨大な爆発をして2人を巻き込んだ。

「ピィイイイイイ！」

そして終了のブザーが鳴り響くと、煙は晴れて2人は浮かんでいた。  
そして……

『勝者、龍東 竜馬！』

勝負が決まった。

アリーナ・アピット

「ふう。なんとか勝てた……」

竜馬がピットに着くと、影宮は竜馬に近づいた。

「よつしゃーよくやつたぞ竜馬ー。」「

「影宮やん。どうでしたか？」

「ワンオフ・アビリティー

「初陣としては上々かな。バースC L A W sの单一仕様能力も出来てたみたいだし。まあ強いて言つなら、他のC L A W sも披露してほしかつたなー」

「ははは…、頑張つてみます」

竜馬は苦笑いをすると、オーバーズを待機状態のメダルにした。ちなみに、バースのワンオフ・アビリティーは『エネルギー・ドレイン・アタック』（略してE・D・A）と言い、C L A W sの攻撃に当たつたI Sや武器のエネルギーを、バースのシールドエネルギーに変換する能力である。

「竜馬…」

「あ、第…」

竜馬は第に気付くと、ゆっくり近づいた。

「第、勝つたよ」

「ああ、よく頑張つたな」

2人は拳と拳を突き出すと、笑いあつた。

「いいお友達ですね」

「……そうですね」

真耶の返事に千冬は応えたが、別の事を考えていた。

(セカンド・シフト 2次移行無しで姿を変えるISなんて聞いた事が無い。それに、ベース・モードになる前の姿。あれではまるで……)

千冬はオーバーズが初めて展開された姿を、あるISと重ねていた。細部は若干違うが、それは自分が初めて纏つたISに酷似していた。

(まさかあれは……)

「織斑先生……、どうかしましたか?」

「ん?いや、何でもないですよ山田先生。私は先に戻りますので、これで……」

そう言つと、千冬はピットから出ていった。

（夜）

### 寮 セシリ亞の部屋

その夜、あのクラス代表決定戦が終わったセシリ亞は、シャワーを

浴びながら物思いに耽っていた。

(負けて……しまいましたね……)

負けてしまった……。だが不思議と後悔はしなかった。

(……)

セシリ亞は龍馬のことを思い出す。誰にでも向ける優しい笑顔と、強い意志の宿った瞳を。

他者に媚びることのない眼差し。それは、不意に自分の父親を逆連想させた。

(父は、母の顔色ばかり伺う人だった……)

幼少の頃からそんな父親を見て、セシリ亞は『将来は情けない男とは結婚しない』と決めていた。

しかし……

(……龍東、……龍馬……)

彼は自分に勝つた。セシリ亞は龍馬の強い瞳に、その言葉に呑まれていった。

『命に変えて守ってみせる!』

『ああ、強くなれるや』

父とは正反対のように強く勇ましい瞳が、あの優しい笑顔を忘れられなかつた。

「龍東、竜馬……」

セシリアは竜馬の名前を口にしてもみると、胸が熱くなるのを感じていた。

どうしようもなくドキドキとして、そつと自分の唇を撫でてみると、形のいい唇は触れられる」とを望んでいたかのよつと不思議な興奮を生み出した。

（わたくしは知りたい……もっと貴方のことを…………竜馬さん……  
…）

浴室には、ただただ水の流れる音だけが響いていた。

休み時間 教室

（翌日）

S H R でクラス代表が発表され、休み時間にはクラスメートが竜馬の前に来て話をしていた。

「コレでクラス対抗戦が面白くなるね」

「そうだよねー。せつかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになつた以上、持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。1粒で2度おいしけ、龍東くんは」

クラスメートの話に、龍馬は苦笑いをするしかなかつた。

「あの、龍馬さん……」

すると、龍馬の下にセシリアがやつてきた。

「やあ。先日はお疲れ様、オルコットさん」

(…龍馬…さん?)

篝はセシリアの言葉に違和感を感じた。

「は、はー。…………そのことなのですが……申し訳ありませんでした!」

セシリアは急に、深々と頭を下げた。

「わたくしが少々、冷静さが欠けていたために、のような失礼なことを……」

「ああ、気にしてないよ。あの時、僕も酷いこと言つちやつたし…

… IJF ちいさな「メン」

「…………お優しいのですね」

竜馬の謝罪に、セシリアは頬を赤くして小さく言った。

「ん？」

「な、なんでもありませんわ。それで、宜しければもう一度、自己紹介をさせていただけませんでしょうか」

「ああ、構わないよ。改めまして、龍東 竜馬だ。よろしく」

「わたくし、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットです。セシリアと呼んでください」

2人は握手をすると、竜馬は利き腕の拳握った。

「ん」

「え？」

竜馬はセシリアにも同じように拳を作らせると、竜馬はセシリアの拳を自分の拳に突き当てる。

「これで今日から親友だね。よろしく、セシリア」

親友の証をした竜馬は、セシリアに笑顔を向けた。すると、セシリアは竜馬の利き手を両手でしつかり握った。

「はい！あの……そ、それでですわね、本田の放課後……ふ、ふたりつきりで特訓を」

バンッ！

いきなりの音に驚いた竜馬は、音の方に目を向けた。そこには、異様に殺氣立つた瞳をした筈だった。

「あいにくだが、竜馬の相手は足りてない。“私が”、直接頼まれたからな」

“私が”を特別強調した筈はセシリアを睨んだが、セシリアは正面から受け止めて視線を返していた。

「あら篠ノ之さん。貴女が竜馬さんに教えるより、わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が特訓に付き添えば、それはもうみるみるうちに成長を遂げますわ」

「なんだとっ！」

「なんですかー！」

竜馬は筈とセシリアの様子を見て、ヤレヤレと心で思つた。

「ねえ、りゅーくん。止めなくていいの？」

「まあ親友と親友のじゃれあいみたいだし、大丈夫だよ。いやー、仲良しひは良いことだねー」

「「私はこいつ（この人）と仲良じじゃないー（ありませんわ！）」

」

竜馬の言葉に、篝とセシリアは同時に言った。

メルダ・ファウンデーション 地下技術開発室

同時刻、メルダ・ファウンデーションの地下にあるHSの技術開発室で、ある開発をしていた。

「影富局長。全セルメダル1500枚の準備が完了しました」

1人の研究員は影富に近づき報告した。

「そうか。では、起動だ」

「はい！」

研究員は走り去ると、影富はアクリルケースに入れられた物を見た。それはセルメダルとは違い、15枚全てに色があるメダルだった。

「起動開始！」

影宮の発言により、研究員はレバーを引いた。すると、別室で用意された1500枚のセルメダルは光の粒子となり、ホースを辿って15枚のメダルに吸収されて激しく輝いた。

「…………」

光が収まると、影宮はアクリルケースにある赤いメダルを手に取つた。

「これでコアメダルの完成だ。あとは竜馬に届ければ……」  
ハハハッ

そう言つと、影宮は子供のような笑みを浮かべていた。

## オリジナルIS設定（11／17 更新）（前書き）

追加項目

・ベースCLAWS一部

## オリジナルIS設定（11／17 更新）

機体名：オーバーズ

操縦者：龍東 竜馬

開発者：黒木 影宮

待機状態：メダル

特殊機能：メダルチェンジ

基本装備  
プリセット

エネルギー刀

ラズライト

狙撃ライフル  
アーガンジャー  
双槍

後付武装  
イコライザ

ショートアックス《バーンブレイズ》

薙刀《真機鉄》

マシンガン《カービンM5S》

ショットガン《ライオットS3》

ビームガン《マグナムブラスター》

ビームマシンガン《アサルトAR4C》

ハンドガン《スカウト》

ハンドガン《レッドホーク》

ライフル《シュータースR35S》

レーザーライフル《プリズム》

ビームショットキャノン《メテオ》

ハイパー・マシンガン  
実弾機関銃

ハイパワーガトリング  
レーザー機関銃

ショットキヤノン《アース》

4連ランチャー《フォークラスター》

広範囲爆撃ランチャー《メガデス》

高電圧弾ランチャー《ブリッツ》

大斧

ブースター内蔵型斧

高電圧ハンマー《タケミカヅチ》

苦無

エネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》

打突強化鉄甲

各種グレネード

各種カンドロイド

両肩と背中に甲冑のような非固定浮遊部位型の推進機が合計3機、  
腰部にメダルチェンジツール《オーバーズ・ドライバー》を装着しているのが特徴の万能型IS。

拡張領域が第2世代ISの4.6倍だが、高いコストを持つメルダ  
製の武器のみを量子変換しているので、それほど空いてない。

特殊機能は、ドライバー上にあるセルメダル投入口と、ドライバー正面にある3つのメダルをはめ込む溝にコアメダルを入れることで、オーバーズの姿と性能が一気に変化させる。

## オーバーズ・バースモード

プリセット  
バーススター<sup>バーススター</sup>  
携行型火器

イコライザ  
バースC LAW S  
グレネード各種  
カンドロイド各種

ワンオフ・アビリティ  
『エネルギー・ドレイン・アタック（E・D・A）』

オーバーズがドライバーにセルメダルを投入して変化した姿。

背中のスラスターが無くなりスピードは落ちたが、全身に装甲が付加されて防御力が上昇している。

バースモード状態ではプリセットはバーススターのみになり、イコライザが専用武器『バースC LAW S』に変化され、グレネードとカンドロイド以外のイコライザが仕様不可能になる。

ワンオフ・アビリティー『E・D・A』は名前通り、一部のバースCLAWSを相手EISか武装に当てる事でエネルギーを自身のシリードエネルギーに変換する。

## バースCLAWS

両腕と両足、胸と背中、合計6個で構成されているバースモード専用武装。

威力が高く、一部の武装でワンオフ・アビリティーを発動させる。

### ・クレーンアーム

右腕に装着される武装。ワイヤーフックを伸ばして離れているモノに当たり、引き寄せる事が出来る。

### ・カッターウイング

背中に装着される武装。ブースターが付いているのでバースのスピードを補える他、取り外してブーメランのよう投げる事も可能。

### ・キャタピラレッグ

両足に装着される武装。悪路でも難無く走行出来る他、無限軌道の連続ヒットにより高い威力を持つ。

### ・ショベルアーム

左腕に装着される武装。バースCLAWSの中で一番の出力を持つ。ショベルはモノを掴む事も可能で、重いモノでも軽々持ち上げる。

### ・ドリルアーム

右手に装着される武装。高速回転によって相手を継続的に攻撃出来るので、ワンオフ・アビリティーとの組み合せでは最適である。クレーンアームと接続可能。

- ・ブレストキヤノン

胸部に装着される武装。BASE C L A W S 唯一の遠距離武装で、セルメダルを数枚ドライバーに投入してエネルギーを送り込むことで威力が上がる。

オーバーズ・オーズモード

プリセット

大剣  
メダジャリバ

イコライザ

ライドベンダー

可変型自販機

グレネード各種

カンドロイド各種

ワンオフ・アビリティー

各コンボによつて変化する

オーバーズが3枚のコアメダルをドライバーにはめ込んで変化した姿。

全身の装甲が、胸部の円形プレートの装甲に描かれている3種類の生物をモチーフにした装甲になっている。

オーラングサークルからIPSスースに引かれている、頭部・四肢に伸びてあるエネルギー<sup>ライントライプ</sup>流动路からエネルギーを送る事によって、各部の特徴能力が発動する。

125の形態変化の中で1色のコアメダル3枚を使用した姿を『純正コンボ』、基本コンボを除いた姿を『亞種コンボ』と言われる。

「コアメダル  
オーバーズ・オーズモードに変身する為に使用する5種類3枚組のメダル。

頭部・ハイパーセンサーの性能を上昇させる他、スラスター等のユニットを形成しているのが特徴。

### ○タ力

小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》と、背中の装甲に赤い翼状の固定型スラスター一対を形成するコアメダル。タカヘッドとスラスターにエネルギーを送り込むと、赤い空中投影ディスプレイ《ホーカーイ》を起動して、風の流れや光学迷彩をしているモノを見つけだす事が可能。

### クワガタ

クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と、両肩の後ろに垂れ下がった緑の巨大なツノのアンロック・ユニットを各1本ずつ形成するコアメダル。

クワガタヘッドにエネルギーを送り込むと、自分を中心に視野を全方位360度見る事が出来る《スタッグ・アイ》が発動する。

ツノにエネルギーを送り込むと、ツノが上を向いてクワガタの顎のような形になり電撃を中距離に放つ事が出来る。そのまま挟む事も可能。

### ○ライオン

黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いた《ライオンヘッド》と、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニット（右は外側がギザギザなリング型ユニット、左は獣の顔型ユニット）を形成するコアメダル。

リングにエネルギーを送り込むと、広範囲に放出される強烈な光熱（ライオネルフラッシュ）が発動可能で、相手の目をくらませる。

### ○サイ

白銀のヘルメットにサイのような巨大な角を1本付いている《サイヘッド》を形成するコアメダル。

角の《グラビドホーン》はゾウレッジと組み合わせることで、ソナ

ーのように相手を感知する事が出来る。

### ○シャチ

背鰭のような突起と2個のライトが付いたヘッドライト《シャチヘッド》と、背中に2本のボンベとホースを形成するコアメダル。ボンベにエネルギーを送り込むと《カムイ》と呼ばれるナノマシン入りの水を放出可能で、浴びせたISや武装に異常をもたらす。ヘッドライトにエネルギーを送り込むと《オルカエロー》を発動して、相手の熱源を探知する事が可能。

腕部：全装甲に専用武器が装備されているのが特徴。

### ○トライアーム

黄色の腕部装甲を形成するコアメダル。  
両前腕部に装備された折り畳み式鉤爪状武器は、エネルギーを送ることによって真空波を発生させる。

### カマキリ

カマキリーム

緑の腕部装甲を形成するコアメダル。

両前腕部に装着されているブレード《カマキリソード》は逆手に持つて使用される。

### ゴリラ

ゴリラーム

銀の腕部装甲を形成するコアメダル。

両前腕部に装着されているガントレット状の武器は、ロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》が可能。

### ウナギ

青い腕部装甲を形成するコアメダル。  
ウナギアーム

両肩には電気を生み出しており、武器や腕を強化出来る。  
両肩に備わっている着脱可能な鞭状の武器《電気ウナギウイップ》  
は、高圧電流を帯びた鞭を放つ事が出来る。

### ○ クジヤク クジヤクアーム

赤い腕部装甲を形成するコアメダル。  
クジヤクアーム

タジャスピナー

左腕に装備されている手甲型エネルギー解放器でのエネルギー弾を

放出出来る。

又、タジャスピナーは開閉可能。最大7枚のメダルをはめ込める事が可能で、それを右手でスキャンする事で《ギガスキヤン》を発動できる。

脚部：推進力上昇の他に、キック力等も上昇しているのが特徴。

### ○ バッタ バッタレッグ

緑の脚部装甲を形成するコアメダル。

足裏にはバー二ニアが内蔵されており、圧縮空気を噴射する《ショートバー二ニア・ブースト》が使用できる。

緊急回避や、踏み付けた瞬間に使って相手を弾き飛ばす事も可能。

### ○ チーター チーターレッグ

黄色い脚部装甲を形成するコアメダル。

エネルギーを送り込むと太腿に取り付けられたマフラーからスマッシュが吹き出し、超高速で移動出来る。

### ○ ゾウ ゾウレッグ

黒い脚部装甲を形成するコアメダル。

エネルギーを送り込むと強力な踏み付け『ズオーストンプ』を発動して、でかい振動を与える。

○タコ

水色の脚部<sup>タコレッグ</sup>装甲を形成するコアメダル。エネルギーを送り込むとその場に留まる事が出来る『オクトスパイク』を発動出来る。

○コンドル

赤い脚部<sup>コンドルレッグ</sup>装甲を形成するコアメダル。

爪先に『ストライカーネイル』と踵に『ラプタードエッジ』が付いており、ラプタードエッジからは真空波を出して切り付ける事が可能。

オーズ・タトバコンボ

使用メダル

タカ・トラ・バッタ

ワンオフ・アビリティー

無し

必殺技  
タトバキック

オーバーズ・オーズモードの基本となるコンボ。

能力のバランスが良いので、相手を選ばずに戦える。

そこから他のコアメダルに変えて戦うのが、このコンボの基本戦法。

## 〇三話【ホカヒヒペーティーとノーメダル】（前書き）

第3話ができました。

タイトル通り、曲字は変えてますが、あのキャラが出来ます。

それと、メダル関連のネタや兵器も出してこうりますので、分かつてくれたうれしいかも。

それではじりぞー！

## 〇三話【オカマとパーティーハマメダル】

6時間目 第1アリーナ・ステージ

4月の下旬、竜馬達は第1アリーナにて授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。龍東、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬の言葉に竜馬達はすかさず反応し、ISを展開させた。尚、竜馬との対戦で損傷したセシリ亞のブルー・ティアーズに装備されているビットは、完全に修復が終わっていた。

「龍東、お前はベースモードに変更しろ。その状態のスピードは見たが、ベースの状態はそんなに見てないからな」

「分かりました。では……」

竜馬はセルメダルを出すとベルトに投入して、右手をベルトの前にスライドさせた。

力ポーン！

光の球体に包まれると、オーバーズは姿を変えてベースになった。

「よし、飛べ」

千冬は確認すると、竜馬達に指示をした。2人は急上昇するが、若干竜馬は遅れていた。

『どうした。データ上の出力ではオーバーズの方が上だぞ』

千冬は通信回線から竜馬に言った。

「モードが変更して出力が減ってるんですよ。CLAWSを展開すればデータと同じぐらいになりますが……」

『そりゃ。よし、いいだろ。展開後は最高速度で飛んでみる。いいな』

竜馬は「はい」と答えると、竜馬はセルメダルをベルトに入れた。

## 【CUTTER WING】

音声と共に、背中には鋭い刃がある翼状の武器<sup>カッターウィング</sup>が展開され、ブースターを起動させた。

『お速いですわね』

飛行中、セシリ亞は個人間秘匿通信を開いた。  
プライベート・チャンネル

『まあ、ウイング自体は微調整すれば今よりも速くなるけど、僕の腕じゃあ、まだコレが精一杯かな』

言いながら竜馬は旋回飛行をしていると、セシリ亞に近づいて話し

掛けた。

「セシリアは放課後、予定あるかな？狙撃の訓練をするから指導してほし…」本当ですか！…………つ、うん

竜馬の言葉を遮る様に、セシリアは驚きと嬉しさの顔をして言った。あの試合以降、何かと理由を付けては竜馬と練習をしており仲が縮まっていた。しかし竜馬に対しても態度が柔らかくなつた分、筈に対する硬くなつていた。

「分かりましたわ。それでは放課後、第3アリーナでしましょ」

『竜馬っ！いつまでそんなところにいるー早く降りてーー』

いきなり通信回線から怒鳴り声が聞こえたので、竜馬は驚いた。すると地上では、真耶がインカムを筈に奪われてオタオタしていた。

『2人共、急降下と完全停止をやつて見せろ。目標は地表から10cmだ』

「了解です。では竜馬さん、お先に」

そう言つとセシリアは直ぐさま地上に向かい、完全停止を難無くクリアした。

「流石だね。んじゃ、僕も……」

それを確認した竜馬も急降下するために速度を上げた。

(よし、ここで停止準備)

だが、地表50cmに来たところでトラブルが起つた。

ガンツ！

「痛つ！」

ドスツ！

竜馬は急に後頭部を痛みに襲われた。そのせいで、地上に俯せて墜ちてしまった。

「らしくないぞ、竜馬」

「痛つ。何だ何だ？」

腕を組み両尻をつり上げている竜馬をよそに、竜馬は後ろを見た。

『キューイー！』

そこに飛んでいたのはタカ・カンドロイドだったが、色は赤ではなく黄色になっていた。

（黄色のタカ！まさか……）

竜馬は黄色いタカ・カンドロイドを見て、ある人物を思い出した。

「竜馬、聞いてるのか！」

簾の言葉に竜馬は我に返ると、簾は続けざまに言った。

「どうしたんだ竜馬。らしくないしつぱ……」「大丈夫ですか、竜馬さん？お怪我はなくて？」……ムツ……」

簾の言葉を遮るように竜馬の前にセシリアが立ち、竜馬に手を差し出した。

竜馬はその手を取ると、姿勢制御をして上昇した。

「ああ、あの高さぐらい大丈夫だよ……」

「そう。それは何よりですわ」

セシリアは「うふふ」と楽しそうに微笑むと、それを見た簾は不機嫌そうに言った。

「…………」を装備していく怪我などあるわけがないだろ？…………

「あら、簾ノ之さん。他人を気遣つのは当然のこと。それがEHSを装備していても、ですわ。常識でしてよ？」

「お前が言つた。この猫がぶりめ」

「鬼の皮を被つていいよつマシですわ」

バチバチバチッ

2人の視線が激しくぶつかり、火花を散らす様だった。

クラスの大半の女子はその様子を見て“、男子を取り合つよつた場面”として見ていたが……。

(うーん。ハイパー・センサーにこんな機能あつたっけ?)

しかし、その男は全く別の事を考えていた。

「あのタカは……もういなか……」

竜馬は辺りを見ると、黄色いタカ・カンドロイドはいなくなつていった。

「おい、馬鹿者共。邪魔だ。端っこでやつてい!」

すると、千冬は箒とセシリ亞の頭をぐいっと押しのけて、竜馬の前に立つた。

「龍東、その状態で武装を展開しろ」

「はい」

「よし。では始めろ」

そう言われ、竜馬は辺りに人がいない事を確認すると、相手に銃火器を向けるイメージをした。そして一瞬爆発的に光ると、その手にはベースバスターが握られていた。

「いいだろ。次は近接武装を展開しろ。確かCLAWSにしか無かつたな」

「分かりました。では…」

竜馬はバースバスターを収納すると、セルメダル2枚を取り出して、ベルトに投入した。

### 【CATERPILLAR LEG】

### 【SHOVEL ARM】

音声と共に、左腕には巨大なショベル状の武器と、両足には無限軌道型移動補助武器が展開された。

展開が完了すると、竜馬はキャタピラレッグで移動しながらショベルアームを豪快に振つて、更にキャタピラレッグによる蹴り技を披露した。

「ふむ……。基本武器の展開は悪くないがCLAWSはその倍か…。時間短縮が出来ないのは厄介だな」

「通常の展開とセルメダルによる展開ではシステムが違い過ぎますので……。すみません」

「まあいい。セシリ亞、武装を開いて」

「はい」

セシリ亞は左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出した。一瞬爆発的に光ると、その手にはスター・ライトマークが握られていた。

「流石だな、代表候補生。……ただし、そのポーズはやめる。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「で、ですがコレはわたくしのイメージをまとめるために必要な…」「直せ。いいな……っ…」

セシリ亞は反論の余地は大いにあるよつたな顔をしていたが、千冬の一睨みによつて話が終わつた。

「次は近接用の武装を展開しろ」

「は、はい…」

(…ん?)

竜馬はセシリ亞の顔色が変わつたことに気付き、試合の時にインター・セプターを開ける際、時間が掛かっていたことを思い出した。

(時間が掛かるといつことは、今まで射撃戦闘しかしてないのかな。こりゃあ、狙撃訓練のお礼に近接訓練をしてあげよつかな……)

そう思つと、ヤケクソ氣味にインターフォンを叫んだセシリ亞に気が付いた。

「…………何秒掛かっている。お前は、実戦でも相手に待つてもうう

のか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせませんーですから、問題ありませんわー！」

「ほつ…。龍東との対戦では懐に入り込まれそうな場面がいくつか見られたが？」

「あ、あれは……その……」

セシリ亞の言葉は歯切れの悪くなり、「ヒーヒーヒーヒー」と叫びついていた。

竜馬はその様子を見ていると、セシリ亞にキューと睨まれ、プライベート・チャンネルが送られた。

『貴方のせいですわよーあ、貴方が…………わたくしに飛び込もうとするから…………せ、責任を取つていただきますわー』

「？」

セシリ亞の言葉に、竜馬は頭を傾げた。

「…………時間だな」

千冬は腕時計を見ると、授業の終了間近だった。

「今日の授業はここまでだ。すぐに着替えて教室に戻るよ！」

千冬はそう言つと、女子全員は更衣室に行つた。尚、竜馬は反対方向の更衣室へ行つていた。

放課後 ゲート前

「おかえり～タカちゃん」

授業終了の1時間後、ゲート前には背中に三日月のエンブレムが付いていた黒いジャケットを着た、ガタイの良い男がいた。その男の手には、黄色のタカ・カンドロイドが置かれていた。

「竜馬ちゃんの授業は終わったみたいねつ んじや、会いに行きましょー！」

男はゲートを潜り、クネクネと歩いて行つた。

「…………」

竜馬は現在、地表約100mにあるバルーンを狙撃ライフル《ドミニオン》で狙っていた。

周りには、バルーンの破片がいくつもあり、元の数が多いのが分かる。

バンッ！

すると、ライフル特有の音が鳴り響き、少し遅れて最後のバルーンが割れた。

「ふう……」

「素晴らしいですわ、竜馬さん」

「いや、ここまで出来たのはセシリアのおかげだよ。ありがとう」

「い、いえ……それほどでも……」

竜馬の言葉に、セシリアの顔は赤くなつた。

「それじゃあ、次は近接訓練をしようか」

「あの……、わたくしは余り近接戦闘は……」

「大丈夫だよ。僕も近接武装を開拓するから同じだ」

そう言つと、両手にはエネルギーナイフ《カレッカ・エッジ》が握られていた。

「……分かりましたわ。では、お手柔らかにお願いしますわ」

セシリ亞もインター セプターを展開させた。

「それじゃ、行く……『龍東くーん！』……ん？」

竜馬は声の方に振り向くと、真耶がこちらに近づいていた。

「山田先生。どうでしたのですか？」

「あの――龍東くんにお客様が来ているのですが……」

「お密かさん？」

「でも……あまりにも怪しい動きをしていたので、警備員の方たちと一緒に応接室に待たせているんです」

(…………まさか)

竜馬は確信してしまった。1時間前に見た黄色いタカ・カンドロイド、怪しい動きの男、それらのキーワードが完全に一致する人物を知っていた。

「分かりました。今から向かいますね」

「はい。それじゃ、先生は会議があるから」

真耶の姿を見届けると、セシリアが近づいていた。

「どうかしましたか？」

「ああ……。僕にお姫さんができるって言われたから、ちよつと行ってくるね」

「でしたら、わたくしも一緒に行きますわ」

「あー……まあ、こいナビ……」

「…………？」

竜馬の態度に、セシリアは不思議そうに思った。

「えじや、ピットに戻つたら通路の自販機で待ち合せようか」

そして、2人はそれぞれのピットに戻つた。

「あれ？ 篠」

着替えた竜馬は待ち合せ場所に着くと、篠と鉢合わせた。篠は部活後なのか、胴着姿だった。

「訓練は終わったのか？」

「終わつたといつか、なんかお客さんが来たから中断したんだ」

「客？ 影面やんか？」

篠がそいつと、竜馬は憂鬱そうな表情をした。

「いや、違うと思つ。多分、予測が正しかつたらお客やんせ……」「竜馬やーん」「……」

竜馬の言葉を遮り、セシリアがやつてきた。

「あら、篠ノえさん。何かわたくし達に用ですか？」

「…………竜馬、どうこいつことだ？」

篠は竜馬に話しかけると、不機嫌オーラが垂れ流していた。

「ん？ ああ、セシリアも一緒に行くんだって。そういうえば、篠は何処に行くんだ？」

「私は職員室に用がある。それだけ……」

言いかけるが、篠は手を口に当てるて考えていた。

「……篠？」

「よし、私も一緒に行こう」

「なつー！」

篠の言葉にセシリアは驚いた。

「篠も？まあ応接室は職員室に近いから……。セシリアも良いよね？」

「え、ええ……いいですわ」

まごついたセシリアだが、心中では少し余裕だった。

（まさか篠ノえさんに出会うとは、予想外でしたわ。でも、竜馬さんとの実戦訓練はわたくしとしか一緒にできませんですし、まだまだ余裕ですわ！）

対して、篠は少し焦っていた。

（セシリアも一緒にいたことは……。早く訓練機の使用許可を貰わないと、竜馬ともっと一緒にいられなくなる！）

一方、竜馬はある人物の事を考えていた。

（ここつて女子しかいないからなー。その人、大人しくしてくれるかなあ……）

3人はそれぞれ思いながら、応接室に向かつた。

### 応接室

3人は応接室の前に来ると、竜馬はドアをノックした。ドアが開くと、そこには千冬が立っていた。

「来たか。ん？ 篠ノ之とオルコットも一緒に……」

「織斑先生。どうしてここに？ 警備員がいるつて山田先生が……」

「ああ……。アイツが担任を出せといひるさいから、私が呼ばれたんだ。そのあとで戻つて行つた」

「竜馬ちゃん！ 久しぶりねえ～」

すると、千冬の背後から声が聞こえた。そこにいたのは、ゲート前にいた男だった。

「ひ、久しぶりです、京水さん」

竜馬は男……京水の名前を呼ぶと、京水はクネクネ動きながら「ち

らに来た。その動きを見た3人は若干引いていたが、セシリアは竜馬に話し掛けた。

「あ、あの……竜馬さん。」ちらの方は……」

「あ、ああ……。」この人はメルダでIAS武器開発局の主任で……」

「須藤京水よ。よろしく あんた達は……竜馬ちゃんのお友達？」

「は、はい。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと申します。」

「……ジー……」

すると、京水はセシリアをジーっと見つめた。

「あ、あの……「いい身体してるじゃな~い」……えつー?」

京水の言葉にセシリアは数歩下がつたが、京水は同じ歩数で近づいた。

「でも……私の方が……おっぱい大きいわ……」

「あ、あ、貴方!! 初対面で失礼じやありま 「私の方が、おっぱい大きいわ!!」 ひいつー?」

京水の叫びにより、セシリアは竜馬の背中に隠れた。

「つょ、竜馬……大丈夫なのか、あの変なオッサン 「変なオッ

サン！　うわっ！…

篠の言葉により、京水は血相を変えて篠に近づいていきました。

「言つたわねつ！！あんたレディーに対して最大の侮辱をつ！！ムツキイイイイイイイイイ！」

「し、失礼しました！？」

京水の豹変ぶりに、篠は謝罪をしながら龍馬の背中に隠れた。

「あーヨシヨシ。……京水さん。僕に何か用事ですか？」

龍馬は篠とセシリ亞の頭を撫でながら、京水が学園を訪問した理由を聞いた。

「あらいけない、私つたら熱くなっちゃったわ……。はいコレ

すると京水はリュックの中から黒いホルダーと資料を取り出すると、龍馬に渡した。

「コレって……まさか！」

龍馬はホルダーの中を確認した。そこにはカラフルなメダルが15枚と、セルメダルが9枚はめ込まれていた。

「そう！コアメダルが完成したから持ってきたわ」

「そりだつたんだ。でも、完成したら影宮さんが持つてきそうだけどなあ…

「影宮ちゃんに頼まれたのよ。実際はそうしたかったみたいだけど、急な仕事が入っちゃったからね~」

京水はクネクネと動きながら言った。

「あと、明日は土曜日よね。昼頃に影宮ちゃんが来てコアメダルの性能テストするみたいだから、予定空けといてね」

「そうですか。分かりました」

「それじゃあ私は帰るわね。早く帰つて新しい武器の最終調整しないといけないから……じゃあね、竜馬ちゃん！」

京水はヌルヌルと動きながら応接室を出た。

「……大丈夫？ 2人とも」

竜馬は簫とセシリアの心配をした。

「す、凄い剣幕だった……」

「い、怖かったですわ……」

2人を見て、竜馬は苦笑いをするしかなかつた。

夕方 寮 竜馬・筈の部屋

京水と別れた後、竜馬とセシリアは寮に戻ってきて部屋にいた。筈は「どうぞ」と、職員室に用があるので今はいない。

「コレが、コアメダル……」

竜馬はメダルホルダーにある赤いコアメダルを手に取ると、じっくり見えた。

「…………」

「竜馬さん。どうしましたか?」

「ん? ああ、ゴメン。やつとオーバーズのコアメダルが届いたからじっくり見てた」

「…………一つ聞いても、いいですか?」

「何?」

「このメダルって、一体何ですか? 試合の時や、今日の授業にも使つていましたし」

セシリアはメダルホルダーのメダルを指差した。

「やつだなあ……」

竜馬はそつと、セルメダルを手に取った。

「これはセルメダル。バースモードに展開する時に使う他、C-AW'sの展開、バーススターの弾丸にも使つメダルだよ。あと他に……」

良いながら、竜馬は机に置いてある水色の缶を手に取った。

「コレを貰つのも使うかな

### 【TAKO KAN】

『タコーー』

プルタブを開けると、脚を回転しながら飛んでいるカンドロイド…タコ・カンドロイドを起動した。

「まあ！かわいらしいですわ

「よかつたらあげようか？あ、でも新しい方がいいか　　「ほ、本当ですのー。」な……ん？」

竜馬はセシリアを見ると、眼をキラキラさせて竜馬を見ていた。

「いや、いつもの物を貰つてもいいこんですのー。」

「え？ 新しい方がいいとおもすわー？」……そ、そう？」

「はい！」

「まあ……良いか。はい」

竜馬はタコ・カンドロイドを元に戻してセシリアに渡した。

「ありがとうございますーーー一生大事にしますわーーー！」

セシリアはタコ・カンドロイドを大事そうに持つた。

ガチャ

「……何をしている」

部屋の扉が開く音がすると、少々珍機嫌な篠が制服姿でいた。

「おかえり篠。用事は終わったの？」

「ああ。訓練機の使用許可を貰つたぞー！ 今度の訓練は、剣道から工Sに変更だ」

篠は許可書を竜馬に見せていると、セシリアは心中で焦っていた。

（くつ……一まさか、こんなにあつさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……。コレでは、竜馬さんとふたりっきりの時間が大幅

に減つてしまいますわー。)

「…セシリア、どうかした？」

「い、いえーなんでもありますわー。」

「アハハ…んじゃ、アメメダルにては食堂で話すよ。

やつぱりと、竜馬は立ち上がって部屋を出た。

「おー竜馬ー私は帰ってきたばかりだぞ。少し待て……ひむー。」

「う、竜馬さんーお待ちになつてー。」

竜馬を追いつき、筿とセシリアも部屋を出た。

## 食堂

竜馬達は食堂に着くと、それぞれ夕食を持って同じテーブルに座った。ちなみに筿は焼き魚定食、セシリアはパスタ、そして竜馬は和風おりしハンバーグ定食だ。

「…成る程な。つまりコアメダルはオーバーズの装甲を完全に変化するメダルなのか」

「うん。資料には確か、セルメダル100枚分の力があるコアメダルを3枚使って、オーバーズを変化させるんだ。この場合は変身つて言うのかな…」

「100枚ですか……。随分お高いですわね……」

セシリアは食堂に着く前に、セルメダルの値段について質問していた。

セルメダル1枚の価値は、日本円で約1万円と言っていた。その100枚分で作られたコアメダル15枚で1500万円……。1体のISにそれほど資金を注ぎ込むとは、セシリアはとても驚きを越えて呆れたようになってしまった。

「そういえば、2人は明日どうするの？僕は性能テストをするから特訓が出来ないけど…」

すると、篝は頬を赤くして言った。

「け、見学しても良いか？」

「ん？別に良いけど……」

「やうか…よし……部活の用事が終わったらすぐ行くぞ

「ああ、分かった…」「でしたら、わたくしも見学しますわー」…ん、セシリ亞も？」「

竜馬の言葉を遮るよつて、セシリアも若干頬を赤らめて言った。

「ああ、いこむ」

「ありがとうございます（篠ノ之さん……。竜馬さんとふたりっきりにはさせませんわー。）」

3人は約束を交わすと、夕食を食べ終えて部屋に戻った。

### 竜馬・筈の部屋

「やうだ。筈、コレを持ってて

2人は部屋に戻つてくると、竜馬は緑色のカンドロイドを筈に渡した。

「ん?このカンドロイドは何だ?」

「用事で遅くなつたりしたら、それで連絡して

「ほう。連絡手段に使うカンドロイドか?」

## 【BATTAKAN】

篠はカンドロイド……バッタ・カンドロイドを起動すると床でピヨンピヨンと跳ねた。

竜馬はバッタ・カンドロイドを手に取ると、オーバーズのメダルをバッタ・カンドロイドに当てた。

「これで僕のプライベート・チャンネルとリンクしたから、いつでも連絡ができるよ。はー」

「やうか。その……ありがと……」

「ふふ。じういたしまして

「ンンン、ンンン

「ん? 誰だろ……」

竜馬はノックの音に気付くと扉を開けた。

「ヤッホー、龍東くん」

「相川さん。じうしたの?」

扉を開けると、そこには清香がいた。

「実はね……1組全員は食堂に集合つて言われてるから、準備が終わつたら来てね。それじゃ、私は先に行くね」

清香は手を振りながら去つていつた。

「どうしたんだ？」

「なんか1組は食堂に集合だって」

「そうなのか。では、行くとするか」

「ああ。行こうか」

2人は部屋を出て、食堂に向かつた。

夜  
食  
堂

「というわけでっ！龍東くんクラス代表決定おめでとうー。」

「「「「おのぞかー。」」」

パン、パンパーン！

「…………えつ？」

食堂にやつてきた竜馬は、突然のクラッカー乱射に啞然とした。食堂には確かに1組のメンバーが揃つており、壁にはデカデカと『龍東 竜馬クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけていた。

「さあさあー主役はこっちに座つてね。あとコレね」

クラスの1人が竜馬を上座に座らすと飲み物を渡した。竜馬の両隣には筈とセシリ亞が座つていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと。ラッキーだつたよねー。同じクラスになれて」

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がりしている中、竜馬は辺りを見渡した。

(明らかにクラスの人数が多過ぎるなあ……。あつちにいるのって2組の人だし……)

「人気者だな、竜馬」

竜馬の隣にいた筈が話しかけたが、少し不機嫌そうにしていた。

「ん? どうだろ? なあ……。男がクラス代表になつたから珍しがつてるだけじゃないかな?」

そう言って竜馬はジユースを飲んだ。すると、竜馬に近づく女子がいた。制服には黄色のリボンをしていたので、2年生だと分かった。

「はいはーい、新聞部でーす。話題のイケメン新入生、龍東 竜馬君に特別インタビューをしに来ました～！」

新聞部が来た事にクラス一同は盛り上がった。

「あ、私は2年の薫 薫子。新聞部副部長やつてまーす！はいこれ名刺」

「あ、これはどうも……」

「ではではズバリ龍東君！・クラス代表になつた感想を、ビビッヂー！」

薫子はボイスレコーダーをずっとと竜馬に向けて、無邪気な子供のように瞳を輝かせた。

「えーと……な、なつたからには、優勝目指して頑張ります！」

「おーいいね～。捏造のしがいがあるよ

（本人の前でスゴイ」と叫ぶなあ……）

そつ思うなか、次に薫子はセシリアにボイスレコーダーを向けた。

「それじゃあセシリアちゃん。龍東君と試合した時のコメントすうだい

「わたくし、いつもこのコメントはあまり好きではありませんが……」

…仕方ないですわね

と言いつつ、セシリアは満更でもなかつた。

「コホン。ではまず、わたくしが　　「ああ、長そつだからいいや。  
[写真だけちょうだい」　　つて…や、最後まで聞きなさい…」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし！龍東君の強さに惚れた  
からうて」として、「ひょい

「なつ、な、ななつ……！？」

薫子の一言に、セシリアは顔をボツと赤くなつた。薫子は眞にする  
ことなく、懐からデジカメを取り出した。

「はーはー、とつあえずふたりなりんでねー。[写真撮るから

「ん？」

「えつ？」

2人は薫子の言葉に反応した。しかし、セシリアはどこか喜色を含  
んで弾んでいるようにも聞こえた。

「注目の専用機持ちだからねー。ツーショットもひつよ。あー握手  
とかしてるといいかもねー！」

そつ言いながら薫子は竜馬とセシリアの手を引いて、そのまま握手  
まで持つて行つた。

「あ…………」

握手をすると、セシリアは頬を赤くして竜馬をジロジロと見た。

「へ、どうしたの？」

「べ、別に、何でもあつませんわ」

「…………む」

それを見ている筈は、不機嫌オーラ垂れ流しだった。

「……筈？」

「何でもない」

そう言って、筈はそっぽを向いた。

「それじゃあ撮るよー。40×13÷1000はー？」

「えっと……0・「ぶー、時間切れ。0・552でしたー」

そんな……」

パシヤツ

デジカメのシャッターが切られると、竜馬は周りを見た。

「みんな凄いなあ

なんと！1組の全メンバーが撮影の瞬間に、竜馬とセシリアの周りに集結していた。ちなみに、竜馬のすぐ隣には篠が立っていた。

「あ、あなた達ねえつー！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょーー！」

「クラスの思い出になつていーじやん。ねー」

「まーまーまー」

「う、ぐ……」

クラスメートは一矢一矢とした顔で口々にセシリアを丸め込むように言つた、セシリアは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「…………？」

竜馬はその様子を見て首を傾げた。

かくして、就任パーティーは夜10時過ぎまで続くのだった。

～翌日～

## 昼 食堂

「 「 「 いただきます」 」 」

土曜日、午前中の授業が終わって竜馬達は昼食を取っていた。ちなみに、筈はうどん、セシリ亞はサンデイッシュ。そして竜馬は、洋食器に入っているラーメンだった。

「竜馬さん。何故ラーメンをフォークで食べのですか？」

「セシリ亞、コレはラーメンじゃないよ。ラ・メーンだよ」

「ラ、ラ・メーン…ですか？」

「うん。そもそもラ・メーンは

「おつ・見つけたぞ」

「？」

食堂にいた生徒は、全員その声の方を見た。そこには、影宮だつた。

「影宮さん。もう来たんですか？」

「まあな。早くオーバーズを改修したくて、早めに来た

「やつだつたんだ……」

「ああそれと、『イツ達もな

影富は寝から2個カンドロイドを取り出したが、通常とは異なっていた。

一つは、上下が赤と黒のカンドロイド。もう一つは、上下が黒と金のカンドロイドだった。

「起きなイメージ、シベラー

## 【AI KAN】

影富はフルタブを開けた。すると起動したカンドロイドは側面に小さな画面が出でくると、両横に小さな腕、底面には小さな足が出てきた。

『（～～）ふあ～…。よく寝たぜー』

すると、赤と黒のカンドロイドから声がすると、上には2本の小さな赤いツノが生えて、画面には顔文字が映つていた。

『 [ ] おはよひりやこます、マスター』

さうじ、黒と金のカンドロイドからは後ろに小さな金色の羽が生えて、画面には某爆弾男のような顔が映つっていた。

コレが、カンドロイドの中で唯一人間に近い感情を持った高性能AI搭載型カンドロイド……『AI・カンドロイド』の『イメージ』と『シベラー』である。

「イメージュにシベリーまで……」

「んじゃ、俺は先に第1整備室に行くからな。食べたら直ぐに来てくれよ」

そう告げると、影宮は食堂を出た。

「第1整備室ね……。そんじゃまあ、すぐ食べ終わらせるか!」

そう言って、ものの3分でラ・メーンを平らげた。

## 第1整備室

「…………」

竜馬が食堂に出て1時間が経つ。

現在整備室では、影宮とメルダ・ファウンデーションの研究員数名によるオーバーズの改修作業が終盤に差し掛かっていた。

作業の理由は、15枚のコアメダルをオーバーズに取り込む為にバススロットの改良、及び拡大をしている。

「…………よし!作業完了!」

影富はそう言つと、オーバーズに取り付けられていた無数のコードが取り外された。作業が終わると、竜馬はオーバーズの空中投影ディスプレイを見て驚いていた。

「凄い……武装展開時間が更に短縮されてる。おお一バースC-LA Wsの同時展開が3個から6個全部出来るよになつてるー」

「よし、早速テストだ。第4アリーナに向かおうか」

「はいー！」

すると、整備室のドアが開かれた。

「やつと終わりましたか」

「あ、セシリ亞。待たせて、ゴメンね」

整備室に入ってきたのはセシリ亞だった。整備室には立入禁止とされていたため、セシリ亞は待つ事しか出来なかつた。

「今から第4アリーナに行くからセシリ亞も『P R R R R R !』

…あつ、筈からだ

竜馬はプライベート・チャンネルを開いた。

『竜馬か。用事が済んだから今からそちらに行く。何処に行けばよい』

「今から第4アリーナに向かうところだよ。改修作業が終わったか

ら、そこで性能テストを

『分かった。私もすぐに行くからな』

そう告げると、竜馬は第のバッタ・カンドロイドの電源を切った事を確認して、プライベート・チャンネルを閉じた。

「んじゃ、行くか」

影宮はそう言つと、第4アリーナへと向かつた。

#### 第4アリーナ・ステージ

ステージにはオーバーズを開いた竜馬、影宮、ISスース姿の第とセシリ亞がいた。尚、ピットには千冬と真耶、メルダの研究員達がモニターを見てデータを記録していた。

「それじゃあ竜馬、ドライバーにコアメダルをセツトしてくれ

「分かりました。……」

竜馬は集中すると、ベルトの溝が輝きだした。

「オーズモードの基本となるメダルは、タカ、トラ、バッタだぞ」

「…………」

竜馬はベルトに集中すると、正面にある3つの溝に赤のコアメダル・タカメダル・黄のコアメダル・トラメダル・緑のコアメダル・バッタメダルがはめ込まれた。

「バースモードと同じ様に、右手をベルトにスライドすればOKだ」

「…………」

竜馬は右手をベルトにスライドすると、竜馬の周囲に3枚のコアメダルが回った。そして……

【タカ！トラ！バッタ！ タ・ト・バ！ タトバ タ・ト・バ！！】

不思議な歌と共に、竜馬は金色の光に包まれた。光が収まると、竜

馬はオーバースとは形状が異なる装甲を纏っていた。

身体の胸部には円形ブレートの装甲と、頭には小さな赤い羽をモチーフにしたヘッドギア《タカヘッド》が装着され、背中の装甲には赤い翼状の固定型スラスター<sup>パッタレック</sup>が一対あつた。更に腕部の黄色い装甲、脚部の緑の装甲<sup>トラーム</sup>が纏っていた。

コレが、オーバース・オーズモード（別名オーズ）の基本形態……

「な、なんだ？さっきの歌は……」

篠は先程の不思議な歌に疑問を持つが、影富は気にせずに言った。

「ああ歌は気にしないでくれ、篠ちゃん。そんじゃ、早速テスト開始だ。……………ポチッとな」

影富はポケットから取り出したスイッチを押すと、竜馬の周りに球体のターゲット・ユニットが5体出現した。

「今からユニットを動かすから全て破壊するんだ。ただし、2体は光学迷彩を機能させるからな。……………スタート！」

影富の合図に全ユニットは動き出し、そのうちの2体は上昇したのちに光学迷彩によって姿を消した。

「……………速いですね」

セシリ亞はユニットを冷静に見ていた。ユニットは不規則な起動で素早く動いていた。

「行くよ、オーズ！」

そう言つと、竜馬はスラスターを起動して飛び立つた。そのスピードはオーバースピードに比べると、段違いの速さだった。

『腕に意識を集中すれば、装甲に取り付けられてる武器が使えるぞ！』

「はーー……………つーー！」

通信回線から聞こえる影宮の言葉通りに龍馬はトラアームに意識を集中させた。

するとサークルに描かれたトラが光りだして、そこからISスースに引かれている頭部・四股に伸びているエネルギー<sup>ライアンドライブ</sup>流动路<sup>ライアム</sup>がトラアームに注ぎ込まれた。そして両前腕部にある折り畳み式鉤爪状武器<sup>トラクロ</sup>が展開された。

「ハッ！」

龍馬はトラクロをユニットに切り付けると、ユニットは爆発を起こした。

『次は脚部だ。脚部はどれも特殊だから、使いこなせば試合でも有利になるぞ』

「了解！……」

龍馬はバッタレッグに意識を集中した。すると、サークルに描かれたバッタが光りだし、ラインドライブがバッタレッグに注ぎ込まれた。

「つおつとー！」

すると、バッタレッグの足裏に内蔵されたバーニアが起動して、一気にユニットに近づいた。

「あれは瞬時<sup>イグニッシュン</sup>加速！」

篠はその行動を見て驚いた。すると、影宮は動作の説明を言った。

「いや、正確にはショートバーニア・ブーストと言つんだ。足裏のバーニアから発生した圧縮空気が噴出されて、最大3回は使用出来る。緊急回避の他に、相手を踏み付けた時に使える……」

「成る程ーその瞬間に使えば、相手を遠くに弾き飛ばせるー。」

篠はそう答えると、影宮は篠を見て微笑んだ。

「せいが～いー篠ちゃんには1ポイントあげよ。おっ、言つたそ  
ばから……」

再び竜馬を見ると、篠が言つたようにコニットがバッタレッジに踏み付けられ、遠くに飛ばされたあと爆発した。

『それじゃ次。各ヘッドはハイパーセンサーの性能を格段に上げる  
ぞ。今から隠れているコニットを探して破壊するんだ』

「分かりました。……」

竜馬は集中するとサークルのタ力が光りだし、ラインドライブがヘッドギアとスラスターに注ぎ込まれた。すると田の前に赤い空中投影ディスプレイ《ホークアイ》を出現させた。見るとそこには光学迷彩を起動しているコニットが見えていた。

「あそこかー」

竜馬はトラクロードに集中すると爪が輝きだした。

「ハアアアアツ！」

そして叫びと共に腕を大きく振ると、トラクロードから真空波が発生してコニットを真つ一つにして爆発させた。

「よつしーあと2体……」

竜馬は残りのコニットを確認した。1体は光学迷彩を起動していくともう1体は今までのコニットより装甲がデカかつた。

『次は必殺技だ。ドライバーに集中して右手をスライドさせるんだ』

「必殺技？ だつたらあの『デカイ奴』…………つー」

竜馬は意識をベルトに集中して、右手をスライドさせた。次の瞬間

……

【SCANNING CHARGE!】

ベルトから発生された音声と共に、竜馬とコニットの間を赤・黄・緑のリングが出現した。

「ハアアアアアアアアー！」

竜馬は赤・黄・緑のリングを潜り抜けると、コニットに強力な蹴りタバキック技を繰り出した。

ドッカアアアアアアン！――！

タトバキックを喰らつたユニットは巨大な爆発を起こした。

#### 第4アリーナ・ピット

「凄まじい威力ですね。コレだつたらシールドエネルギーを一気に削り取られますねえ……」

先程のタトバキックを見ていた真耶は驚いているが、千冬は冷静だった。

（確かに威力は良いが、相手の攻撃で途中中断されたりしたら意味がないな……。まあ、相手の動きを止めたら別か……）

「あ、織斑先生！次は基本武器を使用するみたいですよ」

真耶はモニターを見て言つた。すると、竜馬の右手には大剣が握られていた。

#### 第4アリーナ・ステージ

竜馬は大剣をまじまじと見ていると、鞄付近にはセルメダル投入口が備わっていた。

『そいつは《メダジャリバー》と言つて、京水が昨日完成させたオーブの基本武器だ。威力は近接ブレード並だがセルメダルを入れてから右手をスライドさせると威力が急上昇するぞ』

「了解！」

竜馬はホークアイに映つてゐるユニットを追い掛けながら、メダジヤリバーにセルメダルを2枚セットした。そしてメダジャリバーを右手でスライドせると……

【DOUBLE- SCANNING CHARGE-】

メダジャリバーから発生した音声と共に、刀身は青白い光りを発生させた。

「ハアアアアツ！」

竜馬はスラスターを最大にしてコニーチトに近づくと、メダジヤリバーを豪快に切り付けてコニーチトを撃破した。

『よし。これでターゲット全て破壊完了だな。竜馬、いつたん降りてこい』

「分かりました」

やがて、竜馬は影宮達のところに戻った。

「竜馬さん。お疲れ様です」

竜馬が戻つてみるとセシリアと篠が近づいていた。

「やはり凄いな……。違つ性能を持つたオーバーブーストを短時間で自分のモノにしてしまつとは……」

「いや。これも影宮さんや京水さん、EIS開発局の皆さんが改良したからだよ。ありがとうございます、影宮さん」

竜馬は笑顔を見せて、影宮に感謝を述べた。

「いいでことよ。……次は2対2の実戦テストをしてもらひ。第ちゃん、竜馬と組んで貰えるかい？」

「わ、私でいい」「ちゅうとお待あへだせ…… ムツ

セシリニアに話しが遮断されて、篠は頬を少しひらませました。

「何故わたくしではダメなのですか！イギリス代表候補生のセシリ  
ア 「あ……篠ちゃんは、1ポイント持っているから選んだんだ  
よ。ただそれだけ」「え？」

セシリニアは思い出した。確かに、篠にはポイントを持つていた。

「で、では……相手には誰を？？」

「それは……コマイシ達さつ。」

【AH-KAN】

そつ言いながら、篠はマージュとシベラーを起動させた。

「2人共、実戦テストを行なから手伝ってくれ

『（><）了解だぜ。』

『〔><〕かしこまつました、マスター』

「そんじゅまあ、お前達のゴーリーを出すか……

パチンッ！

影富は指を鳴らすと両隣に2体のコニットが出現したが、ターゲット・コニットとは全く違った。

1体は紅い装甲をしていて、頭部は白いラインの入ったカブトのような角が特徴で、両腕にはセシリ亞のスター・ライトMK?並の長大な砲身が右に2本、左に1本装備された射撃型のコニット。もう1体は蒼い装甲をしていて、頭部はクワガタの顎のようなバイザーが特徴で、右腕にはソード、左腕にはハンマーが装備された格闘型のコニットだった。

そして影富はイメージを紅いコニット、シベラーを蒼いコニットの背中にセットした。

「2人にはコイツ達……KBT NF・カイゼルと、KWG NF・ルミナスの2体と戦つてもらひづか!」

「分かりました。篠、がんばろつか!」

「ああ!」

竜馬と篠はカイゼルとルミナスを見て、闘志を沸かせていた。

## 04話【ドロイドとベストヒュンケ連携】

### 第4アリーナ・Bピット

現在、竜馬と篝はBピットにて待機していた。尚、セシリシアはルームメイトと約束していたのを思い出して寮に戻っている。

「…まさか、竜馬が学園に来るまでに訓練していた相手が《ハーフ・ドロイド》だつたとはな…」

「まあ、元々メルダは《ドロイド》を発明した会社だからね。訓練相手にはよかつたよ」

そう聞いた篝は、ステージで出会ったカイゼルヒルミナスを思い浮かんだ。

ドロイド……メルダ・ファウンテーション会長、白黒が開発した無人AIロボットの事であり、医療機関・工場産業・軍事企業等に提供されている。

特に人間と生物を掛け合わした姿をしているハーフ・ドロイドは軍事企業で訓練機として採用されており、最近ではEISとの訓練において最適なユニットである。

「しかしステージに仕掛けを施すと言っていたが、まだなのか？」

「んー…。まだ連絡が来てないから『おーい！』……あつ、  
来た」

するとピットのモニターが起動して、影宮から連絡が入った。

『準備完了だ。そつちばどうだ』

「はい、こっちも準備OKです」

竜馬は簫を見てみると、簫は既に打鉄を装着していた。それを確認した竜馬も、オーバーズを開いた。

「行こうか、簫！」

「ああ！」

2人はピット・ゲートに進み、ステージに出撃した。

#### 第4アリーナ・ステージ

ピットから飛び出した竜馬達の前に紅と蒼のユニット……カイゼルとルミナスを動かしているイメージュヒベラーが浮かんでいた。

『お久しぶりですね、竜馬殿……』

「ああ。今日も特訓、よろしくたのむよ

『御意』

竜馬の言葉にシベラーは口クリと頷いた。

『久々だからって遠慮はしねえぜ！オレは最初っから全開だ！』

一方、イメージュは戦う事で興奮していた。

「筹、作戦の確認だよ。筹にはカイゼルを任せると。あのロングライフルは威力は高いけど……」

「分かっている。懷に飛び込めばライフルは使えないしな……」

筹はカイゼルの両腕に装備された長大な砲身を見た。2mを超す銃火器は、懷に入ればその威力を發揮されない……。故に、竜馬は剣術が得意な筹にカイゼルを当てさせたのだ。

『んつ？何みてんだ侍オンナ！』

「相変わらず好戦的だ……」

イメージュは筹の視線に気付くと、左腕のロングライフルを向けた。

イメージュの様子を見ていると、通信回線から竜馬の声が聞こえた。

『今回のルールだ。“タトバコンボと純正コンボ以外を使って闇つてみる”。あ、ドライバーにコアメダルをはめ込むんだ…』

「（亞種コンボのみか……）了解しました」

竜馬はベルトに集中すると、タカメダル・バッタメダル・そして緑のコアメダル…カマキリメダルをセットして、右手をベルトにスライドした。

「いくぞ！」

【タカ！カマキリ！バッタ！】

音声と共に光りに包まれると、竜馬はオーズの姿になつた。だが、先程とは決定に違つ箇所があつた。タカヘッド、バッタレッグは同じだが、両腕部が緑の装甲カマキリームになつっていた。

「今度は歌が流れないと…」

篝はタトバコンボに発声していた不思議な歌を聞いていたが、今は流れていないので不思議と思つた。

「タトバと純正のコンボ以外は、あの歌は流れないんだ」

「そうなのか…」

「さあ、もうすぐ開始だよ」

2人は話し終えると、イメージュヒゲラーに再び向き合つた。

『では…………始めつー!』

影富が宣言するとシベラーは前進し、イマージュは上昇した。

『シベラー・ルミナス……参つまますー。』

『イマージュ・カイゼル……撃ちまくるぜー。』

イマージュは右腕のツインロングライフルを竜馬に撃つたが、竜馬はショートバーーナで加速してシベラーに迫った。

「まぢは……カマキリだ！」

両腕のラインドライブが輝き、竜馬はそれを注ぎ込んだ。すると、両前腕部に装備されているブレード《カマキリソード》を展開して逆手持ちでシベラーに切り掛かった。

『なんのつー。』

シベラーも右腕のソードでカマキリソードを受け流すと、左腕のハンマーで殴り掛けた。

「よつとー。」

だが竜馬は右足でハンマーを蹴り飛ばすと、左足でシベラーを踏み付けた。

『ぐあつー。』

踏み付けた瞬間バーーナを発動させて、シベラーを弾き飛ばした。

『何やつてんだシベラーー。』

イメージュは再び龍馬を狙おうとした。

「やせるかあつー」

『なつーいつのまにつー』

しかし簫がそれを阻止しようと、刀型近接ブレードで切り掛かつた。

「（懷に入った！）これで…………つーー！」

懷に入らうとした瞬間、簫は左から来た衝撃によつて真横に飛ばされた。

『残念だつたな侍オンナ！長大な銃火器が懷に弱いのは、大昔のことだ！』

そつ……イメージュは懷に入られそうになつた瞬間、左腕のロングキヤノンの砲身を横に振つて簫を飛ばしたのだ。

「これでは迂闊に入り込めないか……」

『では、ワタクシがお相手しましょー』

「ツー！」

飛ばされたシベラーは簫に目標を変えると、イグニッショーン・ブーストを起動して一気に距離を詰めた。

「逃がすかー！」

竜馬はバッタメダルとカマキリメダルを、青いコアメダル・ウナギメダル・黄色のコアメダル・チーターメダルに変更して右手をスライドした。

### 【タカ！ウナギ！チーター！】

すると、カマキリアームとバッタレッグが変化した。  
両腕部は青い装甲<sup>ウナギアーム</sup>、脚部は黄色の装甲<sup>チーターレッグ</sup>に変更された。

竜馬は脚部にエネルギーを送り込むと、太腿部分に付けられているマフラーからスチームが吹出し、ものすごいスピードでシベラーに追いついた。

「待てっ！」

『なんという推進力！これがコアメダルの力ですか……』

シベラーが関心するなか、竜馬は両肩に装着された武器《電気ウナギウイップ》を取り出してシベラーに巻き付けた。

『なんとっ！』

「捕まえた！ウオオオツ！」

竜馬は力いっぱいに電気ウナギウイップを振り回すと、シベラーをイメージに向けて投げ飛ばした。

『ちよちよちよ、二つちくんぐはつ！』

2体はぶつかって下降していくが、地表スレスレのところまで姿勢制御をして地面に着地した。

「よし、こまならー。」

簞はシベラー達を追撃しようと地表に降り立った。

「ジカアアアアアン！」

「なつ……わつー。」

地表に降り立つた瞬間、爆発が起つた。

「簞ー。」

竜馬は簞と同じ場所に降り立つと、イメージュ達に向かって叫んだ。

『掛かりましたね。このステージー達には、エラしか反応しない』『ランドマイイン』を仕掛けますよー。』

『オレ達はドロイドだからランドマイインは反応しねえ仕掛けよー。』

イメージュはさつ言つて、両腕による乱射を行つた。

「へつーー、一度離れよう。」

「あ、ああ……。」

2人はその場から急上昇して、弾丸の雨を避けた。

「厄介な仕掛けだなあ…」

竜馬はホークアイでステージを見渡すが、ランドマインは探知出来なかつた。

「どうする？地表に降りると、また爆発を喰らうぞ…」

「…………おひーーの組み合せなら…」

竜馬はコアメダルの情報をディスプレイで見てみると、銀のコアメダル…サイメダルとゾウメダルの情報に目を向けた。

『おいシベラー。追い掛けなくていいのか？』

『追い掛けたところで2対1になるのがオチです。こじは、相手が接近したら仕掛けましょつ…』

『分かつたよ。お、噂をすればだ…』

イメージュは見ると、竜馬達が再度接近していた。

『では、ワタクシは篠ノ之殿を……。イメージュは竜馬殿を頼みます』

シベラーは簾に向かつて飛び立った。

「それじゃあ簾、足止めの方を頼むね」

「ああ……しかしそれで爆弾を把握出来るのか?」

「ああ、僕を信じて!」

竜馬はタカメダルとチーターメダルを変更すると、サイメダルとゾウメダルに変更して右手をベルトにスライドした。

【サイー!ウナギ!ゾウー】

竜馬は頭部と脚部を変更した。

頭部は白銀のヘルメットにサイのような巨大な角が一本付いている  
『サイヘッド』に、脚部は黒い装甲に変わっていた。

「ハアアアアツー!」

竜馬はサイヘッドとゾウレッグにエネルギーを送り込みながら、そのまま地表に急降下した。

ズドオオオオオン！！

その瞬間、ゾウレッグによつて巨大な地響きがステージに起つた。

『わっ…とっ…とっ…』

ステージに立つていたイメージは大きな揺れによつて体制を崩した。

「……見つけた、ランドマインの位置！」

竜馬はオーブから送られた地形情報を見ると、十数個の光り……ランドマインがあつた。

ゾウレッグによる踏み付け技ズーストompによつて振動波を起こし、サイヘッドの角グラビッドボーンが跳ね返つた振動波をソナーのように感知して、ランドマインの場所を見つけだしたのだ。

「危ないモノは先に潰す！」

竜馬はサイメダルとウナギメダルを、縁のコアメダル…クワガタメダル・赤いコアメダル…クジャクメダルに変えてスライドした。

【クワガタ！クジャク！ゾウ！】

すると、サイヘッドとウナギアームは変化した。

頭部には、クワガタの顎をモチーフにしたアンテナ《クワガタヘッド》と両肩の後ろに垂れ下がった縁の巨大なツノのアンロック・コニットを各1本ずつ形成しており、両腕の装甲は赤く左腕に手甲型エネルギー解放器タジヤスピナーが装備された《クジャクアーム》に変更された。

「ハアツ！」

竜馬はタジヤスピナーをランドマインが埋まつてある方に向けると、タジヤスピナーはエネルギー弾を発射してランドマインを爆発させた。

『喰らいやがれっ！』

イメージュは銃口を向けて撃つてきたが、竜馬は急上昇しつつ巨大なツノにエネルギーを送り込んだ。するとツノは展開して、ツノの先が上を向いた事によってクワガタの顎のようになつた。

「お返しだつ！」

『アバババババババツ……』

イメージュは電撃をもひこらめきでしまい、一時的に行動が停止してしまつた。

「また動くようだけど……」

竜馬は上を見上げると、筹とシベラーが激しい戦いをしていた。

「でえええい！」

『ハアアアアアツ！』

筈の刀とシベラーのソードが互いにぶつかり合い、火花を散らしていた。

『流石は篠ノ之流……なかなかの腕ですね』

シベラーは一度間合いを取ると、筈は息を整えて再び構えた。

「いや、私はまだまだ修行が足りない。もっと強くなつて……」

すると筈は、ちらつと竜馬の方に目を向けた。その時、若干頬は赤く染めているのをシベラーは見ていた。

『……成る程。しかし、竜馬殿は鈍感ですよ……。それも超のつく程の方です』

「つーそ……それは……」

筈は一瞬驚くが一度目を閉じて直ぐ開くと、その瞳には決意が宿っていた。

「それでも、竜馬の隣に立ちたい！これからも……その先も…」

言い終わると、幕はシベラーに突っ込んで行った。

『フフフ…。応援しますよ、篠ノ之殿！』

同じく、幕を迎える為シベラーも突っ込んで行く……その時だつた。

「はあつー。」

『ピュンッ！

「何つ！消えた！」

幕は確かにシベラーを切り付けた。だがその感触は無く、シベラーは消えていた。

「いつたい何処に……………つー。」

その時、幕は後ろに気配を感じると刀を横に薙ぎ払った。

『ガギンッ！

「…光学迷彩か」

ぶつけた音が響くと、幕の目の前にシベラーが徐々に姿を現した。

『ほう……ルミナスのオールオーバーを見破るとは……』

「オール……オーバー？」

『御意』

シベラーはまた離れると姿を消した。

「ちつ……また消えた」

篝が言い終わると、何処からかシベラーの声が聞こえた。

『このルミナスが持つ機能です。ハイパーセンサーに反応しない完全隠蔽機能……』

篝はハイパーセンサーを最大にするが、シベラーを見つけられなかつた。

『参りますっ！』

「つー」

その言葉を開始に、篝はいくつもの攻撃を加えられた。

『これで……最後ですー。』

オールオーバーを起動しているシベラーは、篝の後ろに回り込み突つ込んできた。

「 わせなーつ ！」

『 何…… つおつー まぶしー 』

シベラーは声の方を見ると強烈な閃光が目に入ってしまった、オールオーバーが解除してしまった。

「 今だ…… 篦！」

「 龍馬…… ーいおおおおおー 」

篠は姿を現しているシベラーに刀で切り付けると、シベラーの推進部に当たって徐々に下降していった。

「 ナイス、 篦！」

「 龍馬……。その装甲はなんだ？」

篠は龍馬を見ると、頭部の装甲とユニットが変化していた。頭部には黄色いヘッドホンに水色のサングラスが付いている《ライオンヘッド》に、両肩横に浮かんでいる左右非対称のアンロック・ユニットが形成されていた。ちなみに、右は外側がギザギザな形のリング型ユニット、左は獣の顔型のユニットになっている。

「 ああ…… オールオーバーは確かに強力なステルスだけど、強烈なエネルギーを浴びせると機能を止めるんだ。だから、このコアメダルならいけると思つて…… 」

竜馬は黄色いコアメダル…ライオンメダルを指差した。

「……」それでテストは終了だな。2体は戦闘の続行が「いや、まだよ」……え？」

竜馬は簾の言葉を遮ると、下に田線をやつた。簾は竜馬が見ている方を見ると、シベラーラーがイメージジューに近寄っていた。

『大丈夫ですか、イメージジュー』

シベラーラーは若干電気を帯びているイメージジューに近づくと、イメージジューはゆっくりと言った。

『……まだ……痺れるけど……何とかな……』

『ワタクシは推進部をやられました……』

『……んじゅ、こっぢょ、アレ、でもすつか?』

『“アレ”ですか……。良いでしょ!』

シベラーラーの言葉にイメージジューはカイゼルの背中から出て、AI・カンドロイドに変形した。

『（・・・・）もつと暴れたかつたけど、仕方ねえ……。オレは一足先に戻るぜ……』

そう言いながら、イメージジューはその場から転送されて戻った。

『……来ましたか』

シベラーが振り向くと、竜馬と篠がすぐ近くに停滞していた。

「シベラー……、次はどうするの？」

竜馬は次に来る事を知っていたが、あえてシベラーに向かつて聞いた。

『今のワタクシは速く飛べません。しかし……』

シベラーは指を弾くと、カイゼル、カイゼルから音声が聞こえた。

【認証信号確認。カイゼル、変形展開を開始】

「来るー。」

「なつー竜馬ー。」

竜馬は篠の前に回ると、篠の腕を掴んで抱き寄せた。そして、そのままゾウメダルを青いコアメダル…タコメダルに変えてスライドした。

【ライオンークジャクー！】

すると、ゾウレッグは青い装甲の脚部に変わり、エネルギーを注入した。その時だった……

「飛ばされないで！」

「あ、ああ！」

シベラーはカイゼルと共に光りに包まれると、強烈な暴風が発生して竜馬達を襲つた。

しかし竜馬がタコレックにエネルギーを注ぎ込んだ事で、地表でも空中でもその場所に留まる事が出来る《オクトスパイク》が発動していた。

「……おさまったようだね」

竜馬は暴風がおさまった事を確認すると、篝に話し掛けた。

「……篝？」

竜馬は返事をしない篝を見ると、篝は顔を真っ赤にしていた。

(り、竜馬……せ、積極的過ぎるぜー。まあ、まあ、まだこじ心の準備がががが……)

「……大丈夫？」

「つーあ、ああ。助かったぞ、竜馬」

「これくらい……ね。でも、もうすぐ終盤だ……」

竜馬はシベラーの方に目をやると、シベラー……もとてルミナスはカイゼルの装甲を身に纏い空中に停滞していた。

『ルミナス、カイゼル・アームズとの合体を確認しました。……お待たせ致しましたね、竜馬殿』

「いや、何となくそれをすると思つたよ。それに、僕が使ってないコアメダルも残り3枚だしね……」

そう言つと、竜馬はベルトのコアメダルを全て変更した。ライオンメダルを青いコアメダル・シャチメダルに、クジヤクメダルを白銀のコアメダル・ゴリラメダルに、タコメダルを赤いコアメダル・コンドルメダルに変更してスライドした。

【シャチ!ゴリラ!コンドル!】

ベルトから音声が鳴り終わると、全ての装甲が変更された。

頭部は背鱗のような突起と2個のライトが付いているヘッドライト『シャチヘッド』と背中に2本のボンベとホースが形成していく。更に両腕は巨大なガントレット状の武器<sup>ゴリバーン</sup>が装着された銀色の装甲<sup>ゴリラーム</sup>に、脚部の装甲には爪先と踵に金色の爪と『ラブタードエッジ』が備わっている『コンドルレッグ』に変更されていた。

『おーい竜馬!』

『影宮さん?』

すると、プライベート・チャンネルから影宮が話し掛けってきた。

『今、使つてゐるコアメダルが最後だな。わざと京水から送られた武器をオーバーズにインストールしたから、使ってみな……』

言い終わると、竜馬の田の前に送られた武器情報が送られた。だがそれを見て、竜馬は知っていた。

「《ライドベンダー》！」

そう……可変型自販機ライドベンダーだった。

『自動操縦可能だつてよ。まあ使ってみてくれ

「分かりました」

影宮は通信を切ると、次に篠に通信回線を開いた。

『篠ちゃん。もつすぐ終わるとこで申し訳ないけど……、篠ちゃんはその場で待機してくれ』

「何故ですか？まだ私は戦えます……」

『今から高速戦闘に入るからな。その打鉄じゃあ無理だろつねー』

やつ言られて、篠はしょんぼつとした。

「や、やつですか……」

『……お話を済みましたか？』

一方、シベラーは竜馬達が影宮との通信を終わらせるのを待っていた。

「ああ。待たせたね

竜馬はすぐ横にベンダーを呼び出すと、セルメダルを投入してバイク形態にした。

『では……行きます！』

シベラーはカイゼルの大型ブースターを起動すると、ものすごい速さで飛び立った。

「いっちはん……行くかな！」

竜馬もライドベンダーに乗ると自動操縦にしてシベラーを追い掛けた。

(竜馬……)

竜はその様子を見て、空を見上げていた。

## 第4アリーナ・Aピット

「いい具合だな……」

一方、Aピットにいる影宮はオーバーズのデータを取っていた。

「…………」

しかし、千冬はモニターに映る龍馬を見て考えていた。

（あれほど装甲を変えるIS……聞いた事がないな。さらにメダルの組み合わせで戦況を有利に進める技術と戦い方……。龍馬、お前は……）

すると、千冬は2年前を思い出していた。…龍馬と数年ぶりに会つた懐かしさと、龍馬に起こつた暗い過去を……。

「…織斑先生？」

「……！ああ、どうしましたか？山田先生……」

千冬は真耶の言葉に気付くと、真耶は話し続けた。

「大丈夫ですか？何か考え方をしていたみたいですねけど……」

「大丈夫だ。それより、何か動きがあるようだ」

千冬は再びモニターを見ると、シベラーが高速で龍馬に突進していた。だが龍馬は回避すると、後ろに回り込んだ。

「あのスピードを何とかしたこと、竜馬は勝てんな」

千冬はコーラーを飲みながら、モーターの竜馬を見た。

#### 第4アリーナ・ステージ

「ぐつ……やつぱり速いな……」

現在竜馬はシベラーの後ろにいたが、シベラーのスピードに対するのがやつじだった。

「何かないか……」

竜馬は装着しているコアメダルの情報を調べてみると、シベラーのスピードが上がつて竜馬を引き離した。

『1Jの距離なり……』

シベラーは直ぐさま反転し、両腕の銃口を竜馬に向けて撃つてきた。

「つかつー。」

だが竜馬は回避すると、一寸距離を取った。

「ふう……危なかつたなあ…………ん？」

すると、竜馬はディスプレイに映っている情報を見た。

「シャチメダル……。成る程、やつてみる価値はあるか……」  
情報を読み終えた瞬間、竜馬は反転してシベラーに突っ込んで行った。

『何か仕掛けますか……だつたら、返り討ちにするまでです！』

それを見たシベラーも、竜馬を迎え撃つため突っ込んだ。

『ハアアアアアアツー！』

「……今だ！」

ぶつかる間際、竜馬はシベラーのすぐ横を通り過ぎるその時だった。

直ぐさま竜馬はボンベにエネルギーを送り込むと、ホースから水が噴出してシベラーに浴びせた。

『水？ そのような攻撃でワタクシがやられるとでも……』

「…………フツ

『……なにを……。ツー！』

竜馬は笑みを見せた瞬間、シベラーは異変を感じた。

『何つ！全システムが機能低下！ブースター、オールオーバー、更にライフルが使用不可！…………あの水か！』

シベラーは急な事態に慌てたが、異常の原因をすぐに見つけた。

「凄い効き田だな、この《カムイ》って……」

竜馬はホースを握りながら、シャチメダルに載っていた情報を思い出す。

カムイ……ボンベに入っているナノマシン入りの水で、相手に浴びせるとシステム障害を起こしたり、武器や特殊武装等を使用不可能にする特殊機能である。

「今がチャンス！」

竜馬はライドベンダーから飛び降りると、シベラーの懷に向かつて行つた。

『ツー甘いですよツー！』

シベラーは懷に入れられそつなどこりで、右腕の砲身を横に降つて竜馬にぶつけようとした。

「それは効かないよ！」

だが竜馬はコンドルレッグにエネルギーを送り込むと、左足を蹴り上げて爪先にあるストライカーネイルで砲身を真つ一つに切り落とした。

『へへへ……』

「まだまだあー！」

更に、右足を踵落としの要領でラプタードエッジから真空波を放ち、シベラーの左腕の砲身を根元から切り落とした。

『ぐあつー..』

「これで最後ー！」

竜馬はシベラーを踏み付けて落下一せると、ベルトに集中してからスライドした。

## 【SCANNING CHARGE】

音声の後、竜馬は輝きを放つて両腕をシベラーに向けて前にだすと、装着されていた「リバーコーン」はロケットパンチのように射出する《バゴーンプレッシャー》を繰り出した。

『ぐああああつー..』

シベラーはバゴーンプレッシャーに直撃すると、ルミナスの背中からシベラーは出てきた。

「よつと…」

竜馬はシベラーをキヤツチすると、ルミナスは機能を停止して地表に落ちる瞬間転送された。

『「トト」参りました…』

「……ふう。影面さん、終了しました」

『「」咲乃さん。ピットに戻つて来てくれ』

竜馬は指示を受けると、篠のもとに向かつた。

夕方 寮

第4アリーナでの性能テストを終えて、竜馬と篠は部屋に向かつていた。

「ふう……やつと終わつたあー」

竜馬は背伸びをしていると、結果を思い出していた。  
性能テストの結果……。

「コアメダルの機能がある程度使い熟してたな。もつと戦つて、デ

一夕をたくさん取ってくれ！」

……と、影宮が言っていた。

「筈、今日は一緒に戦えて楽しかつたよ」

「そ、そうか。それはなによりだ」

「……筈、顔が赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だ！ほら、部屋に入るぞ……」

真っ赤な顔をした筈は、自分達の部屋に入った。すると……

『「――」お帰りなさいませ、竜馬殿、篠ノ之殿』

竜馬の机の上に、シベラーがいた。

「シベラー……どうしてここに？」

『「――」今田から竜馬殿と共にこようと、マスターから任務を与えられました。ですので……』

『「――」今日から、よろしくお願ひします』

シベラーは竜馬達に頭を下げるが、竜馬は近づいていった。

「そうだったんだ。いやいや、今日からよろしく

『「――」はい！』

竜馬はシベラーと握手すると、親友の証をした。

「私も、今日からよろしくだな」

『　　』　　「はい、篠ノ之殿もよろしくお願いします

『　　』　　「竜馬殿の事、頑張つて下さいね」

「なつ..」

シベラーはワインクをしてから言つた、竜馬は顔を赤くした。

「ななな、何を言つんだ！」

バシツ！

『　　』　　「ひでふつ..」

アコーン..

「.....あ」

竜馬は恥ずかしきのあまり、シベラーピンタをして壁に減り込ませてしまった。

「シ、シベラー！」

そして、竜馬の叫びが寮内に響いた。

## 04話【ゾロイドヒートベストヒート種連発】（後書き）

とつあえず「アメダル15枚を一気にだしました。

「アメダルの詳しい性能は、 RCS設定で記載しておきます。

## 〇五話【田舎ヒルパートと竜馬の過去】（前編）

出来ましたーけじぐたぐたです……

## 〇五話【田舎ヒートパートと龍馬の過去】

夕方 龍馬・筈の部屋

「それでさあ……その時影面さんがあなが…………」

「ふふふう……それは面白っこなあ……」

夕日が差し込む部屋で、龍馬と筈は互いの身体を寄せ合って談笑していた。

「しかし良かつたのか？今日は影面さんと約束をしていたのだろう？」

「いいんだよ、それはまた今度で……。今日は筈と一緒に遊びしたんだ……。これからも……こつまでも……」

そう言つた龍馬の頬は、わずかに赤く染まっていた。それは……夕日の色だけではないよつに見えてくる。

「龍馬……」

「筈……」

2人しかいない部屋で、お互いに相手だけを映した瞳……。そこには言葉はいらなかつた。

「ん……」

篝は目を閉じると、やや唇を上向きに突き出した。竜馬もそれを確認すると、ゆっくりと顔を近づけた。

オレンジ色の光景の中、2人の影が徐々に重なつて……

早朝 竜馬・篝の部屋

「…………？」

篝は目を覚ますと、天井を見ていた。

現在日曜の早朝6時40分。普段は朝練をしている篝だが、昨日のオーバーズの性能テストに参加したので今日は休んだ。

「…………」

篝はまだ半分寝ているが、数回瞬きをしたところで意識が戻つてきた。

「夢…………か…………」

夢だと分かつてがくじと頭を下げるとい、篝は隣のベッドを見た。

「…………竜馬?」

しかし、竜馬の姿は無かつた。

「…何処に行つたんだ？」

筠はベッドに起き上がりると、竜馬の机にシベラーが缶モードで置かれていた。

「……」

## 【AI KAN】

少し考えた後、筠はシベラーを起動した。

『「――」おはよい!』といいます、竜……』

『「? ?」……篠ノ之殿。何故、篠ノ之殿がワタクシを起動したのですか?』

「……起きたら竜馬がいなかつたのだが、何処にいるか知つてるか?」

『「」あ~…。おそらく早朝トレーニングに行かれていますね?』

「やうなのが?」

意外な言葉に、筠は少し驚いた。

『 [ ] まあ、田羅早朝の口課になつてますね。陰ながら努力  
しているのですよ……』

うとうとシベラーレは納得しているが、籌はこの情報を聞いて閃いていた。

(なるほど。龍馬も頑張っているん……はつーこれは好機ではな  
いかー私も起されば、龍馬とふたりきりで朝トレが出来るー)

『 [ ] ……』

シベラーレ[口]で筹を見ていたし、筹はそれに気付いた。

「……せつーな、何だその囁き……」

『 [ ] いえいえ、何もありませんよ』

シベラーレ窓から空を見ると、徐々に朝日は輝きだしていた。

一方、竜馬は学園内をランニングしていた。

「…あと少し…」

竜馬はスピードを上げ、寮の裏に到着した。

「ふう……。これで…終わり……」

竜馬は首に掛けっていたタオルで汗を拭うと、水道が目に入った。

「あー…冷たくていいねえー…」

タオルを水で濡らすと、シャツを脱いで身体を拭いていた。

「朝から自主トレか…」

「えつ？」

突然声を掛けられ竜馬は後ろに振り向くと、そこには千冬がいた。

「おはようございます、織斑先生」

「おはよう。日曜なのに早いな」

「まあ日課ですから。それにオーバーズも強くなったから、僕ももつと強くならないと…」

そう言つと、竜馬はグッと背筋を伸ばした。

「 せつか。 ..... 」

すると、千冬は竜馬をまじまじと見ていた。  
15歳の男子よりも身体は鍛えられているが筋肉質ではなく、程よく筋肉が付いていた。

「 … 先生？」

「 ん？ ああ、すまない…。 それより、もうそろそろ戻れよ」

そう言つと、千冬はその場から離れていった。

「 …… 変な千冬さん。 …… ああっ！」

竜馬は腕時計を見ると、7時まであと6分だった。

「 早く戻らないと…」

竜馬はシャツを着ると、急いで寮に戻つて行つた。

「ただいまー」

『「——竜馬殿、お帰りなさい』

竜馬は部屋に戻ると、シベラーが迎えてくれた。

「あれ、簞は?」

『「——簞ノ之殿はシャワーですよ』

「そつか。そりだーもうすぐ始まるんだつた!」

竜馬は机の上P adを起動すると、テレビを開いた。

（10数分後）

「ふう……。竜馬、帰つていたのか」

「ああ、ただいま……」

シャワールームから簞が出てきたが、竜馬は上P adで何か見ていた。

「…何を見ているんだ？」

篇も画面を覗くと、特撮ヒーロー番組を放送していた。

『みんな、行くぞ！……変身！』

『『『『変身！』』』』

5人の俳優が敵に囲まれると、カーデザッキのような物を手に取つて言つと、5人はヒーローになつた。

『レッドリュウキ！』

『ブルータイガ！』

『グリーンゾルダー！』

『ブラックナイト！』

『ホワイトファーム！』

『鏡界戦隊！』

『『『『『ラーレンジャー！』』』』』』

『親衛隊長シザース！お前達、時界帝国の好きにさせない！』

赤い仮面のヒーロー…レッドリュウキは黄色い敵…親衛隊長シザースに指を差して宣言すると、5人はそれぞれカードを出して機械に入れた。ちなみに、レッドリュウキ、ブラックナイト、ホワイトファムは剣のカード、グリーンゾルダは銃のカード、ブルータイガは巨大な爪のカードだった。

【【ソードベント】】

【ショートベント】

【ストライクベント】

5人の機械から音声が流れると、それぞれカードに描かれた武器を持つていた。

『はああああああ…』

そして、5人は敵をどんどん薙ぎ倒していく。

「…何だコレは」

「何つて、“鏡界戦隊ミラーレンジャー”だよ…」

鏡界戦隊ミラーレンジャーとは、スーパー戦隊シリーズ23隊目の作品。鏡の世界ミラーワールドから来たミラーレンジャー達が、地球侵略をたくらむ時界帝国の大帝オーデイン達と戦う、子供や女性に大人気の特撮ヒーロー番組である。

「…………まだそんな物を見ていたのか」

「見始めたのは最近だよ。前のシリーズはE.Sの訓練とかで見てないよ……。お、リュウキの十八番だ！」

「そうか…………」

篠はテレビを見てはしゃいでいる竜馬を見て頬が若干赤かった。明るく笑う竜馬を見て、胸がキュンとなっていた。

(か、かわいい……普段の竜馬も良いが、コレはなかなか……)

「…………篠、どうしたの？」

「いや、何でもない……それより、食堂に行くぞ」

篠は竜馬の手を掴むと、そのまま扉まで引っ張った。

「ちょ、篠……もう少しで終わるから待つ…………『駄目だ』…………ええつーし、シベラー！録画は？」

「…………大丈夫、出来てますよ。こいつてらっしゃこませ竜馬殿、

「ああー。」

篠は龍馬を連れて食堂に向かつた。

『「——」やで……ワタクシは続きを貰ますか……』

食堂

「はあ～…、も「H」ンティングかな…」

竜馬は番組を気にしながら朝食を取つていた。ちなみに、2人共和食セットである。

「録画をしているのだろう。それを見れば良いだろ?」

「それはやうだけど……「おはようございます、竜馬さん、篠ノ之さん」……ん?」

竜馬は挨拶された方に向くと、セシリ亞が朝食のトレーを持って立つていた。

「おはようセシリ亞」

「えせよい?...」

「隣り、 よりしごですか?」

「ああ、 いいよ」

龍馬は了承すると、 セシリアは龍馬の隣に座った。 ちなみに、 セシリアの朝食は洋食セットである。

「龍馬さん。 今日はお暇ですか?」

「まあ午前中は勉強をするけど……午後は今の所、 暇だね」

龍馬はせつまうと、 焼鮭を頬張った。

尚、 龍馬が言った勉強とは、 一般教科の事である。 ハル学園生とはいえる高校生なので、 勉強は必須だ。

「だったら午後は、 わたくしと一緒に出掛けませんか?」

「ぶつー!」

「……簫?」

セシリアの言葉に簫は飲んでいた緑茶を吹いてしまい、 食堂にいた女子が一斉に振り向いた。

「…で、 何処に行くの?」

龍馬は濡らしてしまったテーブルを拭きながらセシリアに言った。

「実は、駅前のデパートでショッピングをしたいのですけど、他の人達は用事がありまして一緒に行けなかつたですわ」

言い終わると、セシリアは小さくため息をついた。

「わかった、いいよ」

「本当にですかー!？」

「僕も寄りたい」というがあるしね……って、セシリア?」

竜馬はセシリアを見ると、セシリアは嬉しくて頬を真っ赤にしていた。

(ま、まさか夢と同じ事が起つてしまつなんて……！今日はいい日になつそですわ！)

セシリアは今日見た夢を思い出した。それは、竜馬とふたりつきりで出掛け、最後に竜馬が告白してキスをしようとした夢だった。

「……セシリア、顔が赤いよ？熱があるんじや……」

「……つー、いえ！大丈夫ですわ！で、では……何時に待ち合わせをしま」「んつんん！」……篠ノ花さん？

セシリアの話しが遮るまつて、篠はわざとうりこく咳込んだ。

「篠、どうしたの？」

「い、いや……。おおそりだ！私も買いたい物があったのだった。  
だから、私も行つても良いか？」

「なつ……」

その言葉を聞き、セシリ亞は驚いた。

「そりなんだ？それじゃあ眞で行こうか、セシリ亞」

「え、ええ……。良いですわよ。（し、篠ノ之さん……。わたくし  
と竜馬さんの『デート』を邪魔するなんて…）」

「あー、いたいた」

セシリ亞が心の中で不満を言つていると、1人のロングヘアの女子が近づいて来た。

「え、部長！」

「ん？ 知つてる人？」

「ああ。剣道部部長の白鳥先輩だ」

「白鳥 真也よ。よろしくね」  
しづかよ

真也は竜馬とセシリ亞に挨拶すると、筆に言つた。

「そりだ篠ノ之くん。今日の筆は、ちょっと遅いけど新入部員の歓  
迎会をするからね。何処にも行っちゃダメよ」

「えーあ、あの部長 「い・い・わ・ね・…」 …はい……」

「よしつ それじゃ、私は戻るわね」

真也の笑顔によつて篝は渋々了承すると、真也は食堂を出た。

「…………」

「篝?」

竜馬は篝に声を掛けたが返事はなく、真っ白になつていた……。

### 竜馬・篝の部屋

朝食後、竜馬と篝は部屋に戻るとそれぞれの机で勉強をしていた。

(…や…最悪だ…)

だが篝は勉強に手付かずで、先程の出来事に嘆いていた。

(私もまだ竜馬とふたりつきりで買い物も行つた事がないのだぞ！  
くつ、セシリアめ……！それに竜馬もだ！何故こんな日に限つて暇

なんだー。)

篠は心の中で叫ぶが、肝心の竜馬は……。

「シベリー、これってどうするの?」

『「——そりですね。」の文に鍵がありますね』

「あつ、やうか! ありがとうシベリー」

『「——」いえいえ』

……真面目に勉強していた。すると、竜馬は立ち上がった。

「シベリー。ちょっとトイレに行っちゃへるよ

『「——」分かりました』

そして、竜馬は部屋を出た。

『「——」……篠ノ之殿、どうかしましたか?』

『……』

『「? ? 篠ノ之殿?』

『……』

シベリーは何度も篠に話しかけるが、返事はなかつた。

『「 」 「 」 「 」 ……』

『「 ^ ” ^ 】 篠ノ之殿！』

「つーわ、私はいつたい！」

『「 」 「 」 「 」 どうしました？勉強も手付かずなんて…』

「……………実は」

筈は食堂で起こった事を話した。

『「 」 「 」 成る程、オルコット殿が……』

「あ…………。竜馬としては友人の付き合い程度に思っているが、相手はあのセシリ亞だ。恐らく積極的に竜馬を誘惑するに違いない！」

筈は机を叩くと、シベラーを持ち上げた。

『「 」 「 」 し、篠ノ之殿！』

「頼むシベラー！2人の様子を偵察してくれ！」

『「 」 「 」 「 」 て、偵察ですか…』

「邪魔をするんじゃないんだ。ただ、このままだったら私が落ち着かんのだ…。だから頼む！」

筈はそう言しながら、シベラーを強く揺すつた。

『「××」わわ、分かりましたから、そんなに揺り下ろさないで下さい篠ノ之殿へ!』

シベラーは了承するが、竜馬が戻つて来るまで揺り振られるのだった。

（数時間後）

昼 ゲート前

「…まだ来てないか

あれから数時間後、食堂で昼食を取った竜馬は私服に着替えてゲート前にやって来た。

「お待たせ致しましたわ、竜馬さん」

すると、すぐにセシリ亞がやって来た。勿論、彼女も私服だ。

「いや、僕も今来たところだよ」

「やつでしたか。それでは、行きましょうか」

すると、セシリアは龍馬の腕を握り取つ、そのまま歩き出つた。

「……なあセシリア」

「何ですか？」

「…………こや」

セシリアの喜んでいる顔を見て、龍馬は何も言えなかつた。

（ふふつ 龍馬さん、わたくしの積極的なアピールに恥ずかしがつてますわね。）（でも篠ノ瀬との差を一気に離しますわー！）

セシリアは心の中で燃えてくると、龍馬は……

（「へん……。」）の姿勢じゃあ歩き難いなあ……。でもセシリアは喜んでるみたいだし……）

……二つの事だった。

『「——竜馬殿、オルゴン殿と腕を組んで出発いたしました』

『「う、腕だと……』

『——〇——』

同時刻、上空75mにてシベラーはタカ・カンドロイドに乗っていた。数時間前、筈に頼まれて竜馬達の様子を見て筈に報告していたのだ。

『——し、篠ノ之殿。声を抑えて下さ……』

『うつ……すまん……』

『——ふむ……。どうやらバスに乗る見たいですね』

『さうか……。では、引き続き様子を探つてくれ』

『——御意……』

すると、筈は通信を切つた。

『——「まつたく……。竜馬殿の鈍感には参りますねえ……』

シベラーは不満を言いながら、竜馬達の後を追つた。

竜馬・篠は部屋

同じ頃、篠はバッタ・カンドロイドの電源を切ると溜め息をついていた。

(……私は何をやつてこるんだ…。しかしするのは私には似合わん!)

すると、篠は部屋を出た。

「いりなつたり、白鳥部長に話を　　「おーい、篠ノズベーン！」  
つて、部長…？」

部屋を出た瞬間、真也が篠に向かつて来た。

「どうしたのですか？」

「いやー。食堂を使つ為の申請が下りなくて、歓迎会の場所が変更したんだよ。場所は駅前デパート近くのカラオケボックスになったから、一緒に行こうと思つてね

真也はウインクすると、篠は心の中で喜んでいた。

(その場所つて、竜馬達の近くだな。これで竜馬に近づく事が出来る…それで、帰りには買い物に付き合つてもうらじょつかー)

「……おーい、篠ノズベーン」

「はー、はー…」

「ボーッとしてたけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫です！それでは、すぐ着替えますので先に行つて下さい！」

そう言つと、筈は部屋に戻つて服を着替えに行つた。

「……んじゃ、先に行きま 「お待たせしました！」 つて、  
早っ！」

バス停 駅前デパート前

その頃、竜馬達はバスを降りたところだった。

「そついえば、竜馬さんは何処に寄りますの？」

「ああ、僕は 「イーちゃん、遊びに行こうよ」 …ん？」

竜馬は声のする方を向くと、セシリ亞もそこを見た。すると、モニコメントの前で2人の遊び人といった風体の男が、1人の女の子に声を掛けていた。

「まあ、なんて品の無い方たちな感じでしょ?」

「…………セシコア、ちよつと待ってて」

「えい、竜馬さん!」

やつらが、竜馬はモードメントの前まで歩いて行った。

「俺、向ひつに車あるからね。ビックパーシュと遠く行くつまー..」

「…………(はあ…………)」

眼鏡を掛けたヤリロングの女の子は無言だったが、心の中で溜め息をついた。

(新作のDVDを観に来ただけなのに……なんでもこなめに……)

(…)

「なあ、行こ」「おお、行こうんだー!…………え?」

チャラ男Aは声の方に振り向くと、竜馬が女の子の前までやつてきた。

「こやあ、ちよつと用事が長引いてね。ゴメン!」

「え……」

竜馬は手を合わせて謝ると、小声で言つた。

「（僕に会わせて）」「

「あ……。うー。」

女の子は竜馬の言葉を聞いた瞬間、右手を竜馬に掴まれた。

「行こうか、向こうで友達が待ってるよ

竜馬は女の子に笑顔で言い、セシリアの方を指差した。

「は、はい……」「

女の子は頬を赤く染めるなか、竜馬はチャラ男達に青い缶を渡した。

「いやーゴメンね。連れが退屈しないように話題に相手になってくれて。コレは御礼だから、それじゃー！」

「え……」

「ど、どうも……」

そして、竜馬は女の子を連れてセシリアのところに戻った。

「……もつこいかな」

竜馬は戻つてくると、女の子の手を離した。

「大丈夫でしたか？」

「あの……えつと……はい…。あ、ありがとうございます……」

セシリアは声を掛けると、女の子は戸惑いながらも竜馬に御礼を言った。

「いや、当然の事をしたまでだよ」

そう言つと、竜馬は先程のチャラ男達を見ていた。すると、チャラ男達は竜馬に渡された缶を開けようとしていた。

「竜馬さん、あの方達に何を渡したのですか？」

「ああ、あれは　　「ギヤアアアアアアアーーー」　　おつと」

竜馬の言葉を遮るように、チャラ男達は叫んでいた。よく見ると、チャラ男達の腕に何かが巻き付いていた。

「な、なんですか？」

「あいつらにあげたのは……コレだよ」

竜馬はセシリアに、先程チャラ男達に渡した青い缶を見せてブルタブを開けた。

## 【UNAGI KAN】

『ウナギーー』

あると、青に缶…ウナギ・カンドロイドが龍馬の手の平に乗った。  
「捕縄用のカンドロイドで、粗手に巻き付いて電撃をおみまいする  
んだ」

「やうなんですの…。まあ、の方達には当然の報いですわね」

「……ふふつ」

2人の会話を聞いて、女の子は小ちく笑った。

「それじゃあ、僕達は行くね」

「うわざんよう」

龍馬達は女の子と別れると、デパートの中に入つて行つた。

「…………かっこいい」

しづらく女の子は、頬を赤く染めながら龍馬の背中を見ていた。

デパート 5階

「あの、竜馬さん……どうですか？」

現在、5階のレディースでセシリアが持つている服を、竜馬に見せていた。

「うーん……。僕的には」しちかな

「や、そりなんですか。では、」おひらじゅう

セシリアは竜馬に選んでもらつた服をレジに持つて行つた。

（楽しそうでなによりだな。それ……）

竜馬は考えながら携帯をこじりこじると、あるサイトを見ていた。

（今月発売の《G3マイルド》。コレは買わないとねえ……）

竜馬は今月発売の模型……ロボットアニメの《機動警察G3》に出で来る量産機、G3マイルドの情報を見て小さく微笑んだ。

「お待たせしましたわ」

セシリ亞は紙袋を持つて戻つて來た。

「それじゃあ、行こうか」

2人は店を出ると、下に降りていった。

『「――」ふむ……。オルコット殿も中々やりますねえ……』

一方シベラーは物影に隠れて様子を見ると、簾から通信が入った。

『私だ。今はどうなつているんだ?』

『「? ?」おや? 篠ノ之殿、前より電波が強いのですが……』

『ああ。それがだな……』

簾は歓迎会の事をシベラーに言った。

『「――」カラオケボックスって、デパートの隣にある場所ですよね?』

『ああ。今はトイレで通信しているが、もう戻らなくては』

『「――」分かりました。引き続き様子を伺います』

言い終わると通信は切れて、シベラーは再び2人を見張っていた。

2階

「なつー！今日は臨時休業……だと……！」

2階にやつてきた2人は模型店の前にいたが、生憎臨時休業だった。

「……竜馬さんが寄りたい所つて、ここですの？」

「……まあ、ね。でも今日は諦めるかあ……。セシリア、次はどこ行く？」

「でしたら、生活雑貨を見に行きましょうか」

「ああ、いい」「おい、あれって！」「ん？」

近くにいた人が窓の外を見て驚いていた。竜馬達も外の騒ぎを見てみると、デパート近くにあるアニメショップから火が見えていた。

「どうやら火事の様ですね……」

「…………」

「……竜馬さん？」

セシリ亞は竜馬を見ると、竜馬は目を細めて火事現場を見ていた。

「……人だ」

「え！」

「いま、2階の窓から人影を見たんだ！」

そう言いながら竜馬はオーバーズのドライバーを部分展開し、シャチメダル・トラメダル・バッタメダルをはめ込んで右手をスライドした。

【シャチ！トラ！バッタ！】

音声と共に竜馬はシャチヘッドのみ部分展開をすると、ヘッドドライトにエネルギーを送り込んだ。すると、目の前に青い空中投影ディスプレイが浮かんでいた。

「…やつぱり、逃げ遅れた人がいる…」

ディスプレイに映っているのは、建物を透かして反響<sup>定位</sup>定位の様に熱源体が映っていた。これがシャチヘッドのもう一つの能力である。

「セシリ亞、ここで待つて……」

「えつ、竜馬さん！」

竜馬は直ぐさま火事現場に向かつた。

### 火事現場前

一方、現場の前には人集りがあつた。その中には、騒ぎを聞き付けてIS学園剣道部の姿もあつた。

「火事の原因つて何だらう？」

「話によると、1階にある古い配線から発火したみたいよ……」

「……竜馬」

人集りの話を聞いて、筈はシベラーに連絡をした。

『篠ノ之殿！現在どちらに』

「今は火事現場の前にいるのだが……どうしたんだ？」

『先程、竜馬殿が火事の中に人が取り残されていると言つて、そち

らに向かつてます。見かけ次第、止めて下さい。』

「何つ！」

それを聞き、筈は2階を見た。1階は完全に火が回り、入る事さえ難しかつた。

「まだ人がいるなん　　「おい、あれ！」　　…つー竜馬つ！」

筈はギャラリーの1人が指差す方を見てみると、そこにはバケツに水を入れた竜馬が走つてきた。そして竜馬は水を被ると燃えている店内に入つていつた。

「竜馬！…」

『「――篠ノ之殿！…』

「篠ノ之さん！…どうして貴女が…」

「セシリ亞、シベラー…竜馬が、あの中！…」

「何ですつて…」

『「〇〇】ええつー』

## アニメショップ

竜馬は入っすぐヘッドライトとボンベを部分展開すると、カムイを放水して炎を鎮火していた。

(ある程度消さないと2階に行けない！)

すると2階の階段の火が鎮火されるのを確認して、竜馬は上がつて行つた。

「誰かいないか！」

2階に上ると、竜馬は大きく叫んだ。

「……ゴホッ、ゴホッ……」

「つ！」

竜馬は音がした方をオルカエコーで見た。すると、そこに人がいた。

「大丈夫か……つて、君はさつきの！」

竜馬が見たのは、少し前に助けた女の子だった。女の子は煙を吸っていたので、大分弱っていた。

「……あなたは……」

「助けに来た。今からこじを……つー。」

竜馬は階段を見ると、火が上がってきた。

「ちつ……。だつたら……」

竜馬は近くの窓を開けると手に一本、回りに数十本のタコ・カンドロイドを転送した。

「……ちうつー。」

### 【TAKO KAN】

『タコーー。』

竜馬は変形したタコ・カンドロイドを窓に投げると、残りのタコ・カンドロイド達も変形して外に飛び出た。

「しつかり捕まつてよ……つー。」

竜馬は女の子を抱えると、窓から飛び出た。

火事現場前

「何か来たぞ！」

ギヤラリーの一人が、窓から放り出された物を指差した。

「あれは…」

『「　○】タコ・カンドロイドー.』

すると、タコ・カンドロイド達が集まつてなだらかな坂になつた。  
そして、窓から竜馬が飛び出て來た。

「「「キヤアアアアア！」」「

ギヤラリーが叫ぶなか、竜馬はタコ・カンドロイド達に着地してゆ  
っくり滑つた。

「……ふう」

「「竜馬っ！」」「

筈とセシリ亞は竜馬に駆け寄ると同時に、消防車と救急車が到着し  
た。

（数十分後）

### 火事現場跡

あれから數十分後、炎は無事鎮火されたが、竜馬と女の子は念のため病院に搬送された。

「セシリア、何故止めなかつたんだ！」

現場跡では篭がセシリアに、何故竜馬を止めなかつたのかを問い合わせていた。

「止めていたら、竜馬はあんな無茶をしなかつたんだぞ！」

「ですからー、わたくしも最初は戸惑つて……」

『「：—」2人共、少し落ち着いて下さい……』

シベラーは2人に割つて入つた。

『「：—」竜馬殿が無茶するのも無理がありません。あの事件が原因で……』

「あの事件？」

篝はシベラーの言葉を聞くと、シベラーは話し続けた。

『「 - - 」あれは3年前……竜馬殿がマスターと白黒会長の仕事に付いて行つた時です。小さな村で数ヶ月住んで、その時にも親友と呼べる人ができました……』

『「 - - 」しかし、偶然にもその村でテロに巻き込まれたんです……』

「テロ……」

『「 - - 」はい。……お世話になつてた村の人達と協力して何週間かもちました。でも、テロは激しくなり、食料もなくなり、竜馬殿達はボロボロになりました……』

「 「 …… 」 「 …… 」 「 …… 」

2人はシベラーの言葉を聞き、いつも優しい笑顔をする想い人の壮絶な過去に驚愕していた。

『「 - - 」そして起こりました。その村で最初の親友が、竜馬殿の田の前で亡くなつてしましました……』

「 「 …… 」 「 …… 」

『「 - - 」その後のテロを収めたのがドイツ軍モンド・グローブンと、当時決勝戦まで進んでいた千冬殿でした……』

「織斑先生が……」

『――千冬殿は白黒会長やマスターと知り合いですからね。しかも、弟のように仲が良かつた竜馬殿もいたとしたら、真っ先に来る理由になりますね……』

筈は驚くと、セシリ亞はある事を思い出した。

「では、あの決勝戦棄権の理由は―？」

『――はい』

シベラーは小さく頷いた。

当時、第1回IS世界大会優勝者の千冬は大会2連覇も夢じやないと誰もが思っていた。しかし決勝戦棄権という誰も思えなかつた行為が、大きな騒ぎになつていた。

『――その時から、竜馬殿は自分の無力差に悔やんでいました。自分のせいで織斑千冬殿の経験に傷を付けてしまった……あの時ああしていれば、こんな事にならなかつたのではないかと……、束殿に出会いうまではいつもそんな風でした…』

あれから1年後、竜馬は束と出会いISを扱う事が出来ると言われ、メルダに置いてあつたISを動かした。

「……そうだったのか…」

「竜馬さん……」

すると、シベラーは空を見上げた。

『――ISを手にしてからも、目の前で危険にさらされてい

るモノがいれば、竜馬殿は命を危険にさらしてまでその手で護るでしょう。それは、決して戻る事は無い過去の悔しさを償つよう

に

』

寮 竜馬・筈の部屋

「.....」

筈達は寮に戻ると、部屋のベッドには竜馬が寝ていた。とくに外傷は無かつたようで、早く病院に戻れたようだ。

「よく寝てますね.....」

「やうだな.....」

2人はそれぞれ、竜馬の隣に腰掛けると寝顔を見ていた。

「.....ねえ、篠ノ介さん」

「.....なんだ」

「今からする事は、他言無用でよいじへて

「そりゃ。なら、私のする事も他言無用だぞ」

「ええ……」

セシリ亞がそう言つと、2人は竜馬の左右の頬にキスをした。

「…………」

しばらく2人は顔を赤く染めて沈黙すると、篠が口を開いて竜馬の頭を優しく撫でた。

「竜馬……。お前が危険な目に会つたら、私が力を貸すぞ……」

「ふふっ……。篠ノ介さん……それを言つなら、わたくし達が……  
でしょ」

「……ああ。そうだな」

2人は顔を合わせると小さく微笑んだ。新たな決意……無茶をする竜馬を守るために……。

夕方 病院前

「…………」

夕方、女の子は病院を出て診察カードをカバンに直していると、見知った顔を見つけた。

「かーんちゃーん♪」

「…………つ」

女の子は声を掛けられて診察カードを落とした。カードには、更識簪と書かれていた。

「本音…………」

「学園から連絡が来たからー、お迎えに来たよー」

「…………ありがとう」

2人は一緒に歩いていると、本音は声を掛けた。

「かんちゃん、何かいい事でもあつたのー？」

「…………（コクツ）」

簪は小さく頷くと、助けてくれた人物を思い出した。

「そーなんだー！良かつたねー」

「…………うん

表情は変わらないが、簪の頬は赤くなっていた。

(…………ありがとう、龍東さん)

夜 IS学園 ゲート前

「ふうん、じじがそうなんだ……」

その夜、ゲート前にはツインテールの少女が立っていた。

「ここに竜馬が…………ふふつ」

そして少女は小さく微笑むと、ゲートをぐぐった。

## 〇五話【口羅ヒカルパートと竜馬の過去】（後書き）

今回でてきた剣道部部長の名前は、オーブ17話の剣道少女とその役者さんから取つました。

いつ原作に無い話を書くと時間がかかります……

まあ、ほつまつと頑張つてこきあますので……よろしくお願いします。

〇六話【中國と機械式と翻訳王の著】（前書き）

原作を見ながら書くのって、やっぱ早いですねえ……。

あ、6話できましたー。

## 〇六話【中国と挑戦状と勧め出す者】

朝 1年1組

「龍東くん、おはよー！ねえ、転校生の噂聞いた？」

デパートから翌日の朝、龍馬は席で簞と話しているとクラスメイトに話し掛けられた。

「転校生？今の時期に珍しいなあ……」

竜馬は少し珍しく思った。今はまだ4月、しかもEHS学園の転入はかなり条件が厳しかった。試験は勿論、国の推薦がないと出来ない仕組みなので、つまり……

「やべ、なんでも中国の代表候補生なんだってぞ」

「へえ……（中国があ…。懐かしいなあ…）」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしぃ！」

竜馬は中国と聞いて懐かしむと、セシリアが腰に手を当てながら近づいていた。

「EJのクラスに転入していくわけではないのだりうへ騒ぐ程の事でもあるまこ」

「ふつ…、そうですね。簞さんの言ひ通りですね」

篝の言葉にセシリ亞は小さく微笑みながら言った。先日のアレをしてから、2人は少し仲良くなつていた。

「だが、どんな奴だらうか……竜馬？」

「ん？」

篝は話し掛けると、竜馬は考え込んでいた。

「どうしたんだ。もしかして……その奴が気になるのか？」

「まあ、少しあ……」

「…………ふん」

竜馬は篝の話に答えたが、篝はむくれてしまつた。

「でも、中国は懐かしいかなあ。1年前に3ヶ月程滞在してたからね」

「へー。龍東くん中国に住んでたんだあ」

「うん。その時、小学校の時に仲良くなつた親友とも久しぶりに会つてね……。もしかして、その子が代表候補生かも」

「し、親友だと…」

「や、それはどういふ事ですの…」

クラスメイトと話していくと、篝とセシリ亞が話し掛けた。

「転校した小学校の5年の時に知り合ったんだ。短かかつたけど、直ぐに仲良くなつてね……」

「そうか……だが、来月にはクラス対抗戦があるので。その親友を気にしている余裕があるのか？」

「そう！ そうですわ竜馬さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましよう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリ亞・オルコットが務めさせ……」「待て、私が竜馬の訓練を務める。訓練機なら私も使えるからな……むつ」

セシリ亞の言葉を遮るように、筈も竜馬の訓練に付き合える事を主張した。

ちなみに、クラス対抗戦とはクラス代表同士によるリーグマッチであり、本格的なIJS学習が始まる前のスタート時点での実力指標を作るためにやるイベントである。これにより、クラス単位での交流及び団結が取れる。

「ハハッ……、2人共ありがとう。頼りにしてるよ

「ああ！」

「ええ！」

竜馬の言葉に、2人は笑顔で答えた。

「龍東くん、頑張つてねー」

「フリーパスの為にもね！」

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って、1組と4組だけだから余裕だよ」

「ああ。任せて!」

竜馬は親指を立てながら返事をした。ちなみにフリー・パスとは、1位クラスの優勝賞品で学食、ザーテーの半年フリー・パスが配られるのだ。

「 その情報、古いよ

「ん? (この声は...)」

教室の入口からふと声が聞こえると、竜馬はその声を知っていた。すると腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているツインテールの女子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

すると、竜馬は席を立ち上るとその女子に近づいた。

「鈴……? もしかして、鈴なの?」

「さうよ。中国代表候補生、鳳 鈴音。ファン・リンイン今日は宣戦布告に来たつてわけ!」

その女子……鈴音はふつと小さく笑みを漏らすと、竜馬は嬉しく思いい良い笑顔をして言った。

「鈴ー本当に久しぶりだね。まさかと思つたが、やつぱり鈴だつたんだ！」

龍馬は拳を出すと、鈴音も拳を出してパンとぶつかった。ビックリ、先程言つていた親友とは鈴音の事だった。  
ちなみに名前は鈴音だが、龍馬は略して鈴と呼んでいる。

「でも鈴。やつさの氣取つた喋り方は無こと思ひよ」

「んなひ…………！？」なにか言つたが、アンタは…」

「…………うそさん。やつぱり鈴こは、その方が合ひでねよ」

やつぱりした龍馬は、鈴の頭を撫でだした。そしてそれを見たクラス全員は驚いていた。

「うふ、うふうと……。もう、子供扱いしないでよー。」

鈴はやつぱりが、頬を赤くして目を開じ、気持が良からひしてこうた。

「おひどい、メン」

「あ……」

龍馬は謝ると鈴の頭から手を離すと、鈴は名残惜しそうに泣いた。

( もへー・龍馬、まさか分かつてほしてゐわけー もつと撫でながこよー )

鈴はそう思つてゐると、後ろから声を掛けられた。

「おー」

「なこよー。」

バシンッ！

鈴は返事を聞き返した瞬間、頭に痛烈な打撃が入った。

「つーーーー！ いつたいだれ……よ……」

鈴は振り向くと、そこには鬼教官……もとい、千冬が立っていた。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。やつとと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません……」

鈴はすぐさまドアからびくが、その態度は完全に千冬にビビりていた。すると、鈴は龍馬を指差して言つた。

「また後で来るからねー逃げないでよ、龍馬ー。」

「せつせと戻れ

「は、はーっ！」

そう言つて、鈴は2組に向かつて猛ダッシュで戻つて行つた。すると、龍馬は千冬に話し掛けた。

「えつと……織斑先生は鈴を知つてゐるんですか？」

「…………少し前、中国に行つた時出会つてな……、軽くじいじでやつた」

「…………」

それを聞いて龍馬は納得した。誰にでも厳しい千冬の特訓は、それは軽いトライウマになるだろつ……。

「……龍馬、今のが先程言つていた友か？しかも、頭を撫でるなど羨まう……」「ホンッ！」

「つ、龍馬さん！？あの子とは本当に親友というだけなのですか！？どのよつな関係で、頭を撫でていらっしゃるので――」

龍馬は筹達を筆頭に、クラスメイト達からの質問が集中砲火で襲つてきた……その時――

バシンバシンバシンバシン――

「席に着け、馬鹿共……」

千冬の出席簿が火を噴き、それぞれ席に戻った。

（うーん……。しかし何でまたこう親友と再会するんだろつか……  
意外と世界つて狭いなあ……）

竜馬は心中で考えるなか、今日も授業が始まった。だが2人の親友は授業中、様々な事を思っていた……。

2時間目 教室

第 Side

（何なのだ、あの女子は……）

私は先程の一件が気になつて、なかなか授業に集中出来なかつた。

（竜馬も竜馬だ……。何故、あの女子には頭を撫でるんだー私には  
撫でてくれないではないか……ー）

私は込み上げてくる怒りをビビリとか抑えながら、ちらりと後ろにい

る龍馬を窺つた。

「…………

流石は龍馬、眞面目に授業内容をノートに取つてゐるな……って！

(違つ違つー私は授業に集中できることこの上、お前はつ……)

……ますます腹が立つた。少しふりふり、私を気にしたうじだ！私はけを……

「…………

しかし……まあ、冷静に考えてみればたいした事ではないな。何せ、私は龍馬と同じ部屋だ。ふたりきりの時間は何時でも作れるからな。

(…………ふふふ　しようがない奴だ。また一緒に特訓をするか )

そうだ。私のアドバンテージは揺るがない。わざわざの凰と面つて女子にしてわざわざだし、セシリアやクラスメイトにしてもだ！

「　　の、答えは？」

(やうだ！何も焦る必要は無い。私の方が1歩……いや10歩はり一歩してくるんだ！もつと龍馬と特訓して……ん？今、私を呼んだこの声は……)

「篠ノ井、答へば？」

「は、はこつー？」

し、しまった！今は授業中で、しかも織斑先生の時間だ！

「……もう一度言ひ。答えは？」

「……き、聞いていませんでした……」

バシーン！

……い、痛い……。竜馬、お前のせいだぞ……

第 Side End

3時間目 教室

セシリ亞 Side

(なんなんですか、わたくしの方はー。)

あの方……鳳さんは龍馬さんとのよつなかじら。あんな親密に振る舞うなんて……あー気になつて集中出来ませんわ！

ただえええ、篠さんとこつ最大のライバルがおりますのこ……これ以上競争相手が増えたら、わたくしはピンチですわ！

しかも……、龍馬さんはあの方とお友達と言つていましたわ。それも、篠さんのように長じぬき合ひ……

（これじゃあ……一生懸命にマラソンをしていたら、いきなり中間地点から走り出したランナーですわ……。それはズルー・ズルですわ！ 正々堂々と勝負なさい！）

もしそれがマラソンなら、わたくしは負ける気がしません。ですが、これは愛しの殿方を取り合ひの競争……、なにせ初めてですから思うように状況が進みませんわ……。

（しかも、代表候補生の専用機持つ　）

確か学園に在籍している代表候補生は20数名……。1年では4名で、専用機は龍馬さんを抜かせば……わたくしを入れて2人。

（……最悪ですね。これでは、わたくしのリードポイントが全て無効になってしまいますわ！いい、インチキですわ！）

わたくしは内心焦っています。なんとかして主導権を取らなくては！しかも、篠さんと鳳さんを大きく突き放す程のモノを……！

（模擬戦だけでは篠さんと大差無いですわ。もつとこいつ……決定打になるような　）

「オルゴナ」

(例えば「トート」「……」いえ、もっと効果的な……ハッ…そういうで  
すわー！竜馬さんとの既成事実を……)

「…………」

バーン！

「あひーーー！」

「馬鹿者。きちんと授業に集中しろ」

「うう……まさか織斑先生が近づいていたなんて……。竜馬さん、  
貴方のせいですわよ！」

セシリア Side End

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわ！」

昼休み、開口一番篠とセシリアが竜馬に文句を言っていた。

「え？？」

だが、竜馬は訳が分からず首を傾げた。ちなみに2人共、午前中だけで真耶に注意5回、千冬に3回叩かれている。

「うーん……。まあ話なら昼食を取りながら聞くから、とりあえず学食に行こうよ」

「む……。まあお前がそう言つのなら、良いだろ？」

「や、そりですわね。行つて差し上げないこともなくつてよ」

竜馬の言葉に、2人は若干頬を赤くして言つた。

「それじゃ、行こうか」

竜馬は教室から出ると、そのほかクラスメイトも数名付いてきて、ぞろぞろと学食に移動した。

## 学食

学食に到着した竜馬は券売機で日替わりランチを買つた。ちなみに  
鈴はきつねうどん、セシリ亞は洋食ランチを買つていた。

「待つていたわよ、竜馬ー！」

すると、竜馬達の前に鈴が立ち塞がつた。その手にはお盆を持って  
おり、ラーメンが鎮座している。

「やあ鈴。とりあえず、そこじでくれるかな？ 食券出せないし、  
通行の邪魔だよ」

「ひ、ひみさいわねー！ 分かつてるわよー！」

鈴はその場を少しぐるぐると、竜馬は食券を学食のおばちゃんに渡した。  
「それにしても、9ヶ月ぶりになるかな。元氣にした？」

「元氣にしてたわよ。アンタこや、たまに我病氣しなさことよ

「ハハッ。ビツツ希望、それ…」

竜馬は鈴との会話に笑つた。

「あー、『ホン』『ホン』。」

「ンンンンッ！ 龍馬さん？ 注文の品、出来てしまひよっ。」

すると、大袈裟に咳き込んだ簞笥とセシリヤによつて会話が中断された。

「ああ、コメン。それじゃあ向ひのテーブルが空いてるから、行こ。」

そして龍馬は3人に並つと、鈴と一緒に空いてるテーブルについた。しまじくして、簞笥とセシリヤもテーブルについた。

「鈴、こつ日本に帰つてきたの？ おばさん達は元氣？ 麗々さんとはどうなの？」

「質問ばっかしないでよ。アンタ、もう専用機を持つてるの？」

「ああ、これがオーバーズだよ」

龍馬は待機状態のメダルを鈴に見せた。

「龍馬、そろそろどう関係か説明してほしきのだが

「やつですかー……ま、まさか龍馬さん、いらっしゃの方とさき合つたりしゃるのー？」

「わ……

「わ……

セシリ亞の言葉に、他のクラスメイトも興味津々ばかりにしゃわついていた。

「べ、べべ、別に私は付き合つてゐる訳じや……」

「だから……朝に言つた通り、転校した小学校で5年の時に仲良くなつた親友だよ。それに、僕みたいな男がモテる訳がないよ」

「……ハア～……」

「…? どうしたの?」

竜馬の言葉に3人は深い溜め息をしたが、竜馬は理解出来なくて首を傾げた。

「まあとりあえず。鈴、紹介するよ。こいつが筈。前に話した転校する前にいた学校の親友で、僕の通つてた剣術道場の娘だよ」

「ふうん…、そななんだ…」

鈴はじるじりと筈を見ると、筈も負けじと鈴を見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。」

鈴と筈は挨拶を交わすが、2人の間では火花が散っていた。

「ンンンンン… わたくしの存在を忘れてもうりつては困りますわ。中国代表候補生、鳳 鈴音さん？」

「……誰？」

「なつー?」

セシリアは驚くと、言葉を続けた。

「わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよー? まさか御存じないの?」

「うふ。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なつ……! ?」

セシリアは言葉に詰まりながらも、怒りで顔を赤くしていった。  
「い、い、畜生! おきますけど、わたくし貴女のような方には負けませんわー!」

「ん。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

(相変わらずの自信だなあ……)

竜馬は心中で懐かしく思った。

(前もそつだつたなあ……。妙に確信じみてるし、しかも嫌味じゃない言い方をする。一緒に訓練した時もそつだつたし……)

竜馬は中国に滞在してた頃、鈴と一緒に訓練機の打鉄で戦つ時も同じように言われた。

「い、言ってくれますわね……」

「…………」

鈴の言葉に、セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめ、箸は無言で箸を止めていた。それに対して鈴は、何食わぬ顔でラーメンをすすっていた。

「竜馬。アンタ、クラス代表なんだって？」

「ん？ そうだけど……」

「ふーん……」

そう言いながら、鈴はどんぶりを持つて「ゴクゴク」とスープを飲んだ。そしてどんぶりを置くと、顔を竜馬から逸らして視線だけを向けて言った。

「あ、あのさあ……」

「……なに？」

「久しぶりに、あたしとHISの訓練しない？」

「おお！ いいや」

ダンツ！ダンツ！

「つー……簫？セシリ亞？」

竜馬は音のした方に目を向けると、簫とセシリ亞がテーブルを叩いて、その勢いのまま立ち上がっていた。

「竜馬と訓練するのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「貴女は2組でしょー！？敵の施しは受けませんわ」

2人は怖い顔で鈴を見た。

「あたしは竜馬に言つてんの。関係ない人は引つ込んでよ」

鈴の言葉に直ぐさまセシリ亞は言った。

「1組の代表ですから、1組の人間が教えるのは当然ですわ。貴女こそ、後から出てきて何を図々し 「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合には長いんだし」 ……むつ！」

セシリ亞は話しが遮られるが、続けて簫が言った。

「そ、それを言つなら私が早いぞ！それに、竜馬は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「つうで食事？それならあたしもそうだけど？」

「「なつー？」

鈴の言葉に2人は言葉を失い、鈴は余裕の表情を見せた。

「まあね。鈴の家は中華料理屋でね、よく影富わん達と行ってたんだ」

だが竜馬の発言により、余裕だった表情が途端にむすつとふて腐れた。そして対照的に、篠とセシリアはホッとした表情をしていた。

「な、何? 店なのか?」

「お店なら、別に不自然な事は何一つありませんわね……」

2人同様、クラスメイト達も同じように緊張と緩和を繰り返している。すると、鈴が話し掛けてきた。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある? あるよね。久しぶりだし、どこか」「生憎だが、竜馬は私と一緒にSの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」…

鈴の言葉を遮るように篠が言いつと、続けてセシリアも言つた。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの」

「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、竜馬!」

鈴はラーメンのスープを飲み干すと、竜馬の答えを待たずに片付けに行ってしまい、そのまま学食を出て行つた。

「…………」つやあ、待つてないとなあ……

竜馬は鈴が出て行った方に目を向けて、鯖の塩焼きを頬張った。

### 放課後 第3アリーナ・ステージ

放課後、竜馬は筈と共に特訓するためにオーバーズを展開していた  
が……

「はああああっー！」

「甘いですわー！」

何故か筈はセシリ亞と戦っていた。

「…………」

竜馬は数分前の事を思った。

（数分前）

「では龍馬、始めよう」といふ。

「ああ」

筈は打鉄を展開しており、刀型近接ブレードを装備して龍馬と対峙していた。同じく龍馬も、アウェンジャー双槍を装備していた。

「では……参「お待ちなさい!」……っ!」

「ん?」

2人はつるぎく声に気付くと、龍馬の前にセシリ亞がIASを展開した状態で割つて入つて來た。

「竜馬さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリ亞・オルコットでしょー?」

「ええい、邪魔な!ならば斬る!」

そう言つと筈はセシリ亞に向かつて行つた。

「訓練機」ときに後れを取る程、優しくはなくつてよー。」

そして戦闘が開始された。

（現在）

「…………ファ～…」

竜馬は2人の戦いを見ていたが、暇で軽く欠伸をしていた。

（僕の特訓はどうするんだね？）

そう思つていると、簞とセシリアが話し掛けってきた。

「竜馬！」

「何を黙つて見ていますの！？」

「ウホッ！？」

竜馬は突然の言葉に驚いた。

「何を黙つてつて……どちらに味方したら怒るで

！（ですわ！）」「……」

「「当然だ

竜馬は2人の息ぴったりの言葉に少し沈黙したが、それがいけなかつた。

「ええいっ！」

「はつきりしなさいっ！」

筈とセシリアはしひれを切らして、竜馬に向かつて攻撃を仕掛けてきた。

「おつとー！」

竜馬はセシリアのスター・ライトmk?による弾丸を避けて、筈の袈裟斬りをアヴェンジャーで受け流した。

「2対1は卑怯でしょ！」

すると竜馬はアヴェンジャーを収納すると、セルメダルをベルトに投入して右手をスライドさせた。

カボーン！

オーバーズはバースになると、バースバスターを筈に向けて放った。

「くつー！」

筈はバースバスターの弾丸を避けながら竜馬に近づくが、竜馬はす

かさずセルメダルをベルトに投入した。

## 【D R I L L A R M】

右手にはドリル状の武器ドリルアームが展開されて、簎の刀を受け止めた。

「はああああつ！」

「うおおおつ！」

ドリルと刀の鎧ぜり合いが続くが、簎に異常が生じた。

「なつ、エネルギーが！」

そう……。バースのE・D・Aが発動して、簎の打鉄のシールドエネルギーが吸収されていたのだ。

「まずは1人……」

竜馬は言ひ終わると、簎はその場で停止した。

「くそつ……」

「次はセシリアか……」

竜馬は、またセルメダルをベルトに投入した。

## 【B R E A S T C A N N O N】

すると、胸部にはエネルギー砲が展開された。  
ブレストキャノン

「ブルー・ティアーズ！」

「だつたら！」

【T A K O K A N】

『 『 『 『 『 タ 』 』 』 』 』

セシリアはビットを展開するが、竜馬はタコ・カンドロイドを6体展開させてセシリアに放った。

「ああもうっ！これでは集中出来ませんわ！」

タコ・カンドロイド達はセシリアの周りを飛んで、セシリアの集中を搔き乱していた。それにより、ビットは浮かんだまま攻撃をしてこなかつた。

「これでえつ！」

竜馬はベルトにセルメダルを3枚投入すると、エネルギーをブレストキヤノンに送り込んだ。

【CUE】 BURST】

「ブレストキヤノンショート、発射！」

「キャアアアアアッ！」

竜馬はブレストキヤノンのトリガーを引くと、強力なエネルギー弾が発射されてセシリ亞に直撃した。

「ふう……これで終わり……」「まだだつー（ですわつー）」「えつー？？」

竜馬の言葉を遮るよつて、篠とセシリ亞が立ち上がった。

「まだ勝負は……」

「終わつていませんわつー！」

そして2人は再度竜馬に挑んで行つた。

その頃、メルダ・ファウンテーンはある事が起っていた。

「……おかしい」

前に映し出しているディスプレイを見ながら「一ヒーを飲んでいる銀髪の男がいた。

だが男の両腕は肩から指先まで異形であり、まるで機械のような腕だった。

「どうした、金剛 黄金A-I開発部主任…」

「あつ、影宮司長…」

男……黄金は影宮に気付いたが、影宮はディスプレイを見ていた。

「何があつたのか?」

「はい。何者かが開発中のヒューマン・ドロイドを一本、持ち出してこるんです」

「まつ…」

「しかもさつると開発費用分の金を口座に振り込んでいまして、さらて置き手紙まで…」

「置き手紙?」

黄金は顎くじ、その手紙を影宮に見せた。

「影ちゃんのドロイド買ったよーん。ちゃんとお金は払っておいたからね～。それじゃ、バイバイ」

「……………ハア～」

影富は手紙の見終わると、深い溜め息を吐いた。

「影町局長っ？」

「大丈夫だ。この件については問題ないから、引き続きA-Eの開発を頼む」

「分かりました。では……」

黄金は小さく額ぐとドロイド開発室を出た。

「…………全く。相変わらずだな、束は…」

影富は手紙を見ながら、書いた人物の名前を言いながら「一ヒーを飲んだ。

夕方 寮 竜馬・筈の部屋

「ふう……」

竜馬は現在部屋に戻っていた。あれから2対1の模擬戦をしていたが、何とかこなしていた。尚、筈とセシリアは更衣室でシャワーを浴びている。

『「——」そうですか。鳳殿が転入を……』

「ああ。久しぶりに会ったよ。それに、あの事にも大分乗り越えてる様子だし……」

「onsoonso—」

竜馬は鈴に聞するあの事を思い出さうとする、ノックの音に気がついた。

「はーい！」

「遊びに来たよ、竜馬ー。」

竜馬は扉を開けるとそこには鈴がいて、ずかずかと部屋に入ってきた。

「鈴！まだ部屋の番号教えて無いの、どうして分かったの？」

「あたしはコレを使ったのよ。だから竜馬の居場所が分かったの」  
鈴の手には「コリラ・カンドロイドが握られていた。なお、「コリラ・  
カンドロイドの能力は探しモノを探知すると反応する仕組みになっ  
て」るので、竜馬は納得した。

「じゃあ、何か飲む？」

「それじゃあ、烏龍茶ある？」

「ちょっと待つて、確認してみる」

竜馬は冷蔵庫の中身を確認するなか、鈴は竜馬のベッドに腰掛けた。  
すると鈴は、机にいたシベラーに気がついた。

「久しぶりね、シベラー」

『「 お久しぶりです、鳳殿』

「アンタ、相変わらず堅いわねえ……

鈴はシベラーと話していると、竜馬が烏龍茶を持ってやってきた。

「お待たせ。はい

「ありがと」

鈴は渡された烏龍茶を飲むと、竜馬は椅子に掛けた。

「……鈴、親父さんはどうなの？」

「あ……。うん、たまに連絡はしてるよ」

「……そつか

竜馬は烏龍茶を飲むと、鈴のあの事……鈴の両親が離婚した事を思い浮かべた。

聞いたのは中国で再会して少し経つ頃だった。その頃の鈴は暗い陰を落としていたが、竜馬が積極的に鈴と一緒にいて大分明るくなつた。

「そういえば、この部屋つて竜馬だけなの？」

「いや、もう1人い 「ただいま」 ……あ、おかえり鈴」

鈴の答えを返そうとするとい、鈴が帰ってきた。

「ふ、凰一貴様、何故ここにいるんだー!?」

「それはこいつのセリフよ…………って、竜馬。まさかそのルームメイトって……」

鈴は鈴を指差すと、竜馬は頷いた。

「うん。鈴だよ」

「なな、何でよー何でアンタが女子とルームシェアしてんのー。」

「いや、急な事で部屋割りになつたんだ。まあ筈が同じ部屋で良かつたよ」

「えつ、それつて……」

竜馬の言葉を聞いて、筈は何かを期待して頬を赤くした。

「知らない子より、親友の方が断然いうしね」

「……はあ……」

だが期待虚しく、筈は溜め息をついた。

「……筈？どつしたの」

「ふーん……親友だつたら良い訳ね……」

「え？」

竜馬は鈴の方を見ると、鈴は立ち上がり筈に近づいた。

「ところ訳だから、部屋代わつて」

「なつ！？」

「ぶつ！」

鈴の突然の発言に、筈は驚き、竜馬は烏龍茶を軽く吹いた。

「さつあ言つたわよね。親友ならいにつて……」

「ふざけるなつー。」

「何よー。」

筈と鈴は睨み合い、今にも取つ組み合ひが始まりそうだった。

「シベリー、どうしようか……」

『〔 〕 無理ですね。第一、龍馬殿の発言が原因ですかからね』

「…まあ、確かに……」

しばりく竜馬は傍観していると、急に鈴が竜馬を指差した。

「だったら竜馬ー今度のクラス対抗戦で、あたしが勝つたら同じ部屋になりなさいー。」

「はーーー?」

「なつー?」

『〔 〕 ハハッー?』

鈴の一言で2人と1体は驚くと、筈が突つ掛かってきた。

「待てー!何故そななるんだー!? 大体そんな事、私は認めないぞ!」

「なによ、アンタは竜馬が勝つと思わないの?まあ、あたしが負け  
る訳ないけどね」

ふふんと鈴は余裕をこへと、簞はその態度が気にならなかつた。

「ふんーお前のよつた奴に、竜馬が負ける筈がない！」

「アッ。なら文句はないわね。竜馬ー対抗戦、楽しみにしてるわねー！」

「あ、ああ…」

鈴は竜馬が頷くのを確認すると、そのまま部屋を出て行つた。

「……僕の意志は？」

竜馬は小さく呟くと、簞が振り向いた。

「竜馬ー！」

「ん？」

「絶つて勝つんだぞーーー！」

「う、うん…」

簞の剣幕に、竜馬はただただ頷くしか出来なかつた。

？？？

「むーん……」

同じ頃、奇妙な部屋には誰かがいた。  
淀んだツリ目と、童話に出て来るような服装を着ている女性……篠ノ之 束が何やら作業をしていた。

「流石は影っちゃんだねえ。こんなに興味を持ったのは久しぶりだねえ……」

束は目の前に仰向けになっている人……いや、人の形をしたロボット、ヒューマン・ドロイドに手を加えており、束は楽しそうにしていた。

こんなに楽しく興味を持つのは、千冬と影宮を入れて4人しかいなかつた。だが影宮の作ったドロイドは、TOSや他の企業が作ったドロイドとは違う何かを感じていた。

「さて……学園の方はクラス対抗戦まで後少し。束さん頑張っちゃうぞー！」

束はそう言つて、作業を続けるのだった。

## 第07話【対抗戦と謎のIISと重力コンボ】

朝 生徒玄関前廊下

あれから翌日、掲示板の前には人だかりが出来ていた。

「何だろ？」

「あれではないのか？クラス対抗戦の…」

竜馬と篠は人を避けながら掲示板の前に来た。すると、掲示板には大きく張り出された紙があつた。

「なにになに？クラス対抗戦日程表……」

表には以下の通りになつてている。

|    |   |    |   |   |   |
|----|---|----|---|---|---|
| 組六 | 対 | 組三 | 戦 | 回 | 四 |
| 組八 | 対 | 組一 | 戦 | 回 | 三 |
| 組五 | 対 | 組四 | 戦 | 回 | 二 |
| 組七 | 対 | 組二 | 戦 | 回 | 一 |

「なるほど……。流れが良かつたら決勝戦で鈴と当たるか……」

「そうみたいだな……」

竜馬と筈は納得すると、その場から離れて行つた。

「竜馬。鳳の対策はあるのか？」

「対策があ……。中国にいた頃はまだ訓練機だったから分からぬいなあ。それでも……」

竜馬は一度廊下の天井を見上げると、真っ直ぐ前に向き直つた。

「全力で戦う。ただそれだけ、かな……」

「そうか……。なら、今日も特訓だな！」

「ああっー！」

竜馬は笑顔で答えた。そして、対抗戦1週間前まで訓練を行うのだった。

（数週間後）

放課後 廊下 第4アリーナ前

「竜馬、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

5月。あれから数週間が経ち、竜馬は更に戦闘技術が上がっていた。微かに空が橙色に染まりはじめながら、竜馬は箒とセシリ亞と一緒に特訓をするため第4アリーナに向かっていた。

「ISの技術も、格段に上がったな」

「そうかな？ 自覚は無いんだけど、箒が言つなりやうなんだらうな

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですけど。このくらいは当然、上がらない方が不自然というものですね」

「ハハッ。確かに、代表候補生の意見にはいつも助かってるよ」

竜馬は立ち止まると、じきなり箒とセシリ亞の頭を優しく撫でた。

「お、おーっ！」

「あの、竜馬さんっ！」

2人はいきなりの事で驚くなか、竜馬は御礼を言った。

「2人には感謝しているよ。ありがとう」

「あ、ああ……（竜馬の手つき、何だか気持ちいいな……）」

幕は気持ち良くて目を細めると、同じく気持ち良くなつていてるセシリアが言つた。

「竜馬さん、初めて撫でてくれましたわね……」

「……いや、多分2回目だと想つけど……」

「「えつ？」」

「ほら、京水さんが来た時に……」

「「京水？……………っ……」」

だが京水の名前を言われて、2人はみるみる内に血の気が引いていつた。

「私の方が、おっぱい大きいわ……！」

「あんたレディーに対しても最大の侮辱をつ……ムッキィイイイイイイイイイイ！」

「「……………」」

2人は京水トウカイを思い出してしまい、ガクガクと震えてしまつた。

「……だ、大丈夫？」

竜馬は頭を撫でるのを止めて、心配した

「つーあ、ああ……大丈夫だ…」

「…………わたくしはちよつと……気分が……」

すると、セシリアは上田使いで言葉を続けた。

「でも……竜馬さんが撫でてくれるなら、大丈夫ですわ」

「わうなの？それじゃあ…」

そういわれて、竜馬はセシリアの頭を優しく撫でた。

「…………むつ」

すると、それを見た筈は膨れてしまった。

「………… 筈」

「あつ…………」

だが竜馬は筈の機嫌が悪くなつたのを感じ取り、セシリアと同じように頭を撫でた。

「それじゃあ、行こうか」

しばらくして、3人は第4アリーナに向かつた。

#### 第4アリーナ・Aピット

「待つてたわよ、竜馬！」

竜馬はドアセンサーに触れて中に入ると、腕組みをして不敵な笑みを浮かべた鈴がいた。

あれから鈴は竜馬に会いに来る（廊下や学食では普通に接している）、対抗戦に向けて特訓していた。

「貴様、どうやつてここに入った！」

「ここは関係者以外立入禁止ですわよー！」

篝とセシリアが顔をしかめながら言つて、鈴は「はんつ」と挑発的な笑いとともに、自信満々に言い切る。

「あたしは関係者よ。竜馬関係者。だから問題無しね

「ほほほ、どうこう関係がじっくり聞きたいものだな……」

「盗つ人猛々しことは、まあこの事ですわねー！」

鈴の発言により、篝はびくびくと口元が引き攣り、セシリアはキレてしまつた。

「まあまあ……」

「竜馬は2人を宥めていると、鈴が言った。

「竜馬！勝負の約束、忘れてないわよね！」

「ああ。鈴が勝つたら一緒に部屋になるんだろう？」

「ええ。もちろん、決勝戦まで来れなくともあたしの勝ちよ。」

「分かった。でもね鈴、ちょっと納得出来ない所があるんだ……」

「……何よ？」

鈴は首を傾げると竜馬は言った。

「鈴は自分が勝った事しか言つてないけど、負けたら何かしてくれるのかい？」

「……へつ？」

「……ちは負けたら同じ部屋になるけど、勝つても何も無いのは不公平だと思つんだ。だから僕が勝つたら奢つて欲しい物がある！」「

「なつ、何よ……」

鈴はたじろぐと、竜馬は言った。

「@クルーズの……」

(@クルーズつて、美味しいパフェがある喫茶店よね。まさか、1番高いパフェを奢れつて言つのー。)

鈴はそう考え込むが、竜馬は以外な事を言つた。

「……隣にあるウサオちゃん喫茶で販売している“ウサオちゃんスペシャル”を齧つてもらつよ」

「やつぱ……つて、何?」

「ウサオちゃん…」

「喫茶?」

竜馬の発言により、3人は頭にハテナを浮かべた。

「前アパートに来た時に見つけたんだ。そこにあつた“甘辛い初恋の味”つてのが気になつたからね…」

「ま、まあそれぐらいなら……」

鈴は戸惑いながら言つた。

「とにかく、決勝は楽しみにしてるわーそれじゃあー。」

鈴は戸惑いつつて、Aピットを出た。

「よしー。それじゃあ、特訓に取り掛かりつかー。」

竜馬はやる気が出て、特訓に取り掛かった。

（対抗戦前日）

夜 竜馬・筈の部屋

「うーん……」

竜馬はベッドに座り込み、コアメダルを見て悩んでいた。あれから数日経つが、竜馬は特訓を欠かしていなかった。筈には剣術を、セシリ亞には技術を教わっていた。

「どうしたんだ？」

筈は竜馬が氣になり、机から離れて近づいた。

「ん？ 実は影富さんから連絡が来てね…」

「影富さんか？」

『「——」 そうなんですよ』

その時、シベラーが話し掛けってきた。

『「・・・」マスターは明日の試合に条件を付けたのですよ』

シベラーは影宮が送つてきたデータを紙に書いて箋に見せた。

「何々?」

条件は以下の通りだつた。

?1回戦ではオーバースのままで戦つこと。

?準決勝ではバースモードで戦つこと。

?決勝戦ではオーズモードで戦つこと。純正コンボの使用も許可。

「成る程。で、竜馬は何で悩んでいるんだ?」

「……純正コンボは何にしようか迷つてゐるんだ」

「純正コンボ?」

竜馬は小さく頷き、15枚のコアメダルを並べて見せた。

「同じ系統のコアメダルを使用した姿の事を言つんだ。資料による  
と…各純正コンボが成立した場合エネルギーは完全回復して、オー  
バーズ・オーズモードの性能が上昇及び各コンボによつてワンオフ・

アビリティーが発動される……らしいんだ

「聞くだけで凄いな……」

「ただ、その能力が何なのか分からなくてね……。それで悩んでたんだ」「ん

そう言いながら、竜馬はコアメダルをメダルホールダーに直し始めた。

「どうしたんだ?」

「もう寝ようと思つてね。明日から対抗戦だし」「ま、待て!」

「……ん?」

竜馬の言葉を遮り、筈は顔を赤くして言つた。

「い、今から寝間着に着替えるのだから、むこうに向いてくれ!」

「あ、ああ……。ゴメン……」

『…………』「…………」では、ワタクシも就寝いたします。おやすみなさいませ

竜馬はそう言つと体の向きを変えて、シベラーは待機状態になつた。

「…………（むう……。着替えは僕がいない時にじてほしいなあ……）」

「…………」

「…………」

「い、いこや

竜馬は体の向きを戻すと、筈は寝間着浴衣を着用していた。だが竜馬はある事に気が付いた。

「あれ？ 帯が新しいね」

「よ、よく見てこるな

竜馬は新品の帯に気が付いて筈に指摘すると、筈はちよつと上機嫌に言った。

「色も模様も違つたから。それに、筈を毎日見てるしね

「や、そつか。私を毎日見ている……か。そつかそつか……」

「？」

竜馬は上機嫌で何度も頷いている筈を見て首を傾げた。

「よしー！ では眠るとしてよう！」

そう言いながら筈は自分の布団に入つて消灯した。

(「ーん……タイミングを逃したかなあ……）

竜馬は寝るタイミングを逃してしまつたが、筈が話しかけてきた。

「……竜馬」

「うん？」

「対抗戦、頑張れよ……」

「……ああ」

「そ、それだけだ。……で、ではなつ」

「うふ。おやすみ……」

そう言つて、竜馬は少しづつ睡魔へと落ちていつた。

（翌日）

朝 第2アーダーナ・Bパート

翌日、クラス対抗戦が始まった。現在試合は鈴と7組が行っていた。

「あれが鈴のEISか……」

竜馬は鈴が展開しているEISをリアルタイムモニターで見ながら、ハイパーセンサーで確認していた。

戦闘状態IS感知。操縦者、鳳 鈴音。ISネーム《甲龍》。

戦闘タイプ近接格闘型。特殊装備有り

「特殊装備か……おそらく、あの棘付き<sup>スパイク・アーマー</sup>装甲に何かありそうだな」

竜馬は肩の横に浮いたアンロック・ユニットを見ていたが、鈴は巨大な青龍刀《双天牙用》を使ひだけで7組の代表を倒してしまった。

『試合終了。勝者、鳳 鈴音』

ピット

一方、千冬達がいるピットでは試合のデータを取っていた。尚、現在2回戦の最中である。

「すごいですね、鳳さんのIS…」

真耶が関心していると、千冬は言った。

「だが、まだ鳳は実力を出してないな…」

『「——」確かに…。おそらく竜馬殿と戦つまでは、全力でいきませんね』

『えつ……』

真耶はいきなりの声に驚くと、パソコンのすぐ横にシベラーがいた。すると、千冬はシベラーに言った

「…何故お前がここにいる」

『「――」竜馬殿の戦闘データを取る為です。ワタクシは情報解析に長けてますので、ここにいます。勿論、申請許可は出しました』

シベラーは千冬に敬礼して言った。

「そうか…」

「あ、次は龍東くんの試合ですよ!」

真耶はモニターを見る既に2回戦が終わっており、竜馬がオーバーグを展開してステージに出てきた。

#### 第4アリーナ・ステージ

竜馬はピット・ゲートからステージに出ると、対戦相手の8組代表と対峙した。

相手のHSは学園でも訓練機で使われる《ラファールリヴァイヴ》(通称リヴァイヴ)。安定した性能と高い汎用性、操縦の簡易性によって操縦者を選ばない第2世代のHSである。

「 やりしへね、龍東くん」

「 ああ。 イヤーリヤ」

8組のクラス代表は竜馬に挨拶すると、竜馬も返した。

『 それでは両者、試合を開始して下せ』

『 ピーッ！』

試合のブザーが鳴り響くと、8組代表は機関銃を竜馬に向けて連射してきた。

「 なんのつー！」

だが竜馬は撃たれる前に、展開していたブースター 内蔵型斧（ニックアックス）のブースターを起動して回転させ、機関銃の弾丸を防いだ。

「 こくよつー！」

竜馬は弾丸を防ぎながら加速して近づいて来ると、ソニックアックスを振り下げて機関銃を叩き落とした。

「 わやあつー！」

「 まだまだー！」

さうして竜馬は振り下げた勢いで、ソニックアックスを1回転するよ

ついに8組代表に叩き付けた。

ズドオオンッ！

「あいたたた……」

8組代表は地面に叩き付けられて仰向けになっていたが、竜馬はそれを見過しやなかつた。

「これで……終わり！」

竜馬は4連ランチャー『フォークラスター』を展開して、ミサイルを全弾発射した。

「キヤアアアア！」

8組代表の叫びと共に、リヴァイヴのシールドエネルギーがゼロになつた。

『試合終了。勝者、龍東 竜馬』

ピット

「龍東くんもすこいですね。オルコジトさんと戦った時より、さら

に動きが良くなっています

「当然ですわ！わたくしが直々に教えていますからねー。」

「ん？お前たちか…」

千冬は振り返ると、そこにはセシリアと篝がいた。

『「？？」オルゴット殿に篠ノ之殿。何故ここに…』

「おおかた、観客席で見るよ！」で見た方が龍東がどれほど強くなったか知りたいだけだろ？』

「…………」

「図星か…」

千冬は小さくため息をすると、第4試合が開始しているモニターを見た。

（数十分後）

#### 第4アリーナ・ステージ

あれから數十分が経ち、鈴は1回戦と同じ戦法で勝利を収めて決勝に進めていた。

(「この試合はバースで行うのか……。あれを試してみるかな）

竜馬はそう考へながら、目の前にいる6組代表と対峙していた。尚、6組代表のI.Sは打鉄である。

「手加減はしないわよ！」

「大丈夫。戦うのに手加減しないのは、僕もだよ」

竜馬は言いながらセルメダルを親指で弾いて、キャッチして言った。

「…変身」

そしてベルトにセルメダルを投入すると、右手をスライドした。

カポーン！

音と共に竜馬は光に包まれ、オーバーズはバースに変身した。

『それでは両者、試合を開始して下さい』

ビーッ！

「はああああつー！」

「まずは、『レだ！』

竜馬はバースバスターを発射するが、6組代表は刀で弾丸を弾きながら竜馬に向かつて行つた。

「ならー！」

竜馬はセルメダルを3枚ベルトに投入した。

【BREAST CANNON】

【CRANE ARM】

【CUTTER WING】

竜馬は3つのバースC LAWsを装備すると、背中に装着されたカッターウイングを取り外して投擲した。

「くつー！」

6組代表はカッターウイングを刀で弾いた瞬間、クレーンアームの

ワイヤーが右腕に巻き付かれた。

「円の動きで追い込む！」

竜馬はワイヤーで巻き付いた6組代表を軸にして、大きく時計回りで回りながらバースバスターを連射した。

「そこへ集中砲火！」

半分回った所でワイヤーを離した瞬間、ブレストキャノンを一定の間隔で撃ち込んだ。

「うわあっ！」

そして、ブレストキャノンのエネルギー弾は6組代表に当たり、周りは煙に包まれた。

（くつ…すぐここの中から出ないと…）

そう考えた6組代表は煙から出るが、竜馬はそれを待っていた。

「締めは……」

そう言いながら、竜馬はバースバスターのバレルポッドを銃口に接続した。

「出て来た所に撃ち込む！」

そして竜馬はトリガーを引き、6組代表に直撃させた。

「キヤアアアア！」

叫びと共にシールドエネルギーが無くなつたが、威力が強かつたのか6組代表はそのまま墜落してしまつた。

「やばつー！」

それに気付いた竜馬はカッターウイングのブースターを起動させて加速し、地上に激突する前にキヤッチした。

「…………あれつ？」

6組代表は目を開くと、すぐそこには竜馬の横顔が見えた。

「大丈夫？ゴメンね」

「…………っ！は、はい……」

竜馬は小さく笑みを零すと、6組代表は顔を赤くした。

『試合終了。勝者、龍東 竜馬』

『…………』おおーC-LAWSでアサルトコンバットを再現するとは、スゴイですね篠ノ…………』

「…………」「…………」

『…………』ウッ…』

シベラーは竜馬の戦法に関心して筹達を見ると、筹とセシリ亞は怒りのオーラ垂れ流しだった。

(竜馬め……。また他の女子を堕としたな…)

(またライバルが増えてしまつではありますんかっ…)

2人は怒りの視線を、モニターに映っている竜馬に送った。

「…………ふう」

その様子を見た千冬は小さくため息をして、モニターを見直すとハーフタイムに入っていた。

（数十分後）

## 昼 第4アリーナ・ステージ

ハーフタイムが終わる頃、やはり噂の新入生同士の戦いとあってアリーナの客席は満員御礼。それどころか通路まで立つて見ている生徒で埋め尽くされており、会場入りが出来なかつた生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞していた。

尚、ハーフタイムの時に客席を《指定席》として売っていた2年生があり、千冬に制裁を下された事はまだ知られてなかつた。

「…………」

「…………」

ステージでは、竜馬と鈴が試合開始の時を静かに待つていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促された2人は空中で向かい合つた。その距離約5m。  
そして2人は開放回線オープン・チャンネルで言葉を交わしていた。

「竜馬、今ここであたしと同じ部屋になるつて言つなら、少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

そう言いながら、鈴は双天牙月の刃を竜馬に向けた。

「それは雀の涙くらいでしょ。いいから、久々に全力でいくよ。」

そう言いながら、ベルトにタカメダル・トラメダル・バッタメダルを転送すると、右手をスライドした。

「変身！」

【カタ－トラ－バッタ－タ－ト－バ！ タトバ タ－ト－バ－！】

竜馬は金色の光に包まれると、オーバーズはオーズ・タトバコンボに変身した。

「ちよつ－せつきの歌は何なのよ！」

「歌は気にしないで」

「…まあいいわ。一応言つておくけど、ISの絶対防衛も完璧じゃないのよ。“シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる”」

「……」

竜馬は鈴の言葉を真剣に聞いていた。

鈴の言葉は本当のことだった。噂では、IS操縦者に直接ダメージを与える“ためだけ”の装備が存在するらしいが、それは競技規定違反であり、何より人命に危険が及んでしまう。けれど、『殺さない程度にいたぶる事は可能』という現実は、変わりようがない。

『それでは両者……』

アナウンスがすると2人は構えた。そして……

『決勝戦、開始です！』

ピーッ！

決勝戦のブザーが鳴り響き、それが切れる瞬間に竜馬と鈴は動いた。

ガギンッ！！

「くつー！」

竜馬は瞬時に展開したメダジヤリバーで双天牙月の初撃を防ぐが、鈴の甲龍のパワーがオーズより高かつたせいで弾き返された。

「パワーが違うすぎるな……」

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない

「そりゃどうせ」

そう言いながら、竜馬はトラメダルからウナギメダルに変えて右手をスライドした。

【タカ！ウナギ！バッタ！】

「いくぞっ！」

竜馬はウナギアームにエネルギーを送り込むとメダジヤリバーが青い電撃を纏い、その状態で鈴に仕掛けて行つた。

ガギィイインツ！

「くつ！パワーが上がった！」

メダジヤリバーのパワーが上がっているのを感じた鈴は、双天牙月をバトンでも扱うように回して自在に角度を変えながら斬り込むが、竜馬もメダジヤリバーを自在に扱い刃を捌いていった。

（一寸離れるか…）

竜馬は考えながら捌くと、一瞬の隙をついて双天牙月の刀身を踏み付けてショートバーニア・ブーストを起動した。

「きやつ！」

鈴は弾かれるが、クロス・グリッド・ターン三次元躍動旋回をこなして竜馬を正面に捉えた。

「なかなかやるわね……。でも、甘いわつ！…」

そう言つと、甲龍の肩アーマーがばかっとスライドして開いた。

「ん？…………！」

中心の球体が光る瞬間、竜馬は何かを感じ取りメダジャリバーで防御体勢を取った時、目に見えない衝撃に殴り飛ばされた。

「くつー！」

「今のはジャブだからね」

鈴はニヤリと不敵な笑みを浮かべると、また球体が光った。

「まさか……！」

竜馬はヘッドギアとスラスターにエネルギーを送り込んでホーカーイを起動させた。そこから見ると、肩アーマー部分の空間に歪みが生じていた。

「喰らいなさいっ！」

そう言つた鈴は何かを発射した。しかし……

「見えるー！」

竜馬はその何かを見破り、ショートバー＝ア・ブーストを駆使して多角移動で回避して地表に着地した。

「つやーまさか『衝撃砲』が見破られるなんて……」

鈴は驚きを隠せなかつた。

「完成してたのか……衝撃砲……」

ピット

「なんだあれは……？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた筈が呟く。それに答えたのはシベラーだった。

『「――」衝撃砲ですね。空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾仮して撃ち出す第3世代型兵器。近接戦闘メインのオーズでは、少々分が悪いですね』

シベラーはデータを取りながら話していたが、もう筈は聞いてはいなかつた。モニターには回避に専念している竜馬が映し出されていた。

(竜馬……)

セシリアの時よりも激しい戦闘を目の当たりにして、筈は勝利より

もただただ無事を願っていた。

#### 第4アリーナ・ステージ

「よくかわすじゃない！衝撃砲『龍咆』は砲身も砲弾も田に見えないのが特徴なのに！」

「まあね…こっちは良い眼があるから、そんな砲弾に当たらないよ！」

2人は話し掛けながら攻防を繰り返していた。鈴が衝撃砲を撃つ度に竜馬は回避し、隙をみて電気ウナギウイップで攻撃を仕掛けるが、鈴は双天牙用でそれを弾き返す繰り返しだった。

（流石に長期戦になるのはヤバイな……。だつたら…）

あることを思い付いた竜馬は、回避しながらタカメダルをサイメダルに変更して右手をスライドした。

【サイ！ウナギ！バッタ！】

だがタカヘッドからサイヘッドに変えた事で、ホールアイが無効になってしまった。

「鈴」

「なによ?」

鈴は龍馬に呼ばれると攻撃を止めると、龍馬は真剣に鈴を見つめて言った。

「本氣で行くよ」

「来なさい。返り討ちよー。」

そう言つた鈴はバトンのように双天牙月を構え直すと、肩アーマーがスライドして中心の球体が見えた。

「やこだー！」

「えつー!?.」

だが龍馬は電氣ウナギウィップを鈴ではなく、甲龍の肩アーマーに巻き付いて強制的に閉じさせた。

「しまつ　　」「つおおおおつー。　　…つー。」

鈴は動搖していると龍馬の叫びが聞こえた。すると龍馬は電氣ウナギウィップを引き、最大出力のショートバーニア・ブーストによつて頭から鈴に突つ込んできた。

ドゴォンッ！

だが鈴は間一髪、双天牙月でグラビドホーンによる頭突きを防ぐが大きく弾き飛ばされ、双天牙月が大きく刃毀れした。

(やばい！)

鈴は心中で思つと、竜馬はもう一度仕掛けた。

「これで、どうだああ！」

竜馬は鈴に再度電氣ウナギウイップを巻き付かそつと思つた…次の瞬間！

ズドオオオオンッ！！！

「「…？」」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走つた。

「な、何だ！？」

竜馬はステージ中央を見ると、そこからもくもくと煙が上がつていた。どうやら、さつきの衝撃は“それ”がアリーナの遮断シールドを貫通して入つてきただ。

「うう……」

竜馬は先程の衝撃と立ち上る煙を見て、ある出来事と重なつて見えた。まるで、あの時巻き込まれたテロのようだ……

(くそつ…収まれ…収まつてくれ…)

竜馬は身体が震えてしまい、右手で強く左腕を掴んだ。

『竜馬!』

「つー?」

突然、鈴からプライベート・チャンネルが送られると竜馬は震えが収まった。

『竜馬、試合は中止よーすべビックテ戻つてー。』

鈴が言い出すと、オーバーズのハイパー・センサーが緊急通告を行つてきた。

ステージ中央に熱源。所属不明のヒトと断定。ロックされています

「なつ　　「竜馬、早くー」　　…鈴つ！」

すると、竜馬と所属不明ヒトの間に鈴が割り込んだ。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよー。」

「逃げるつー……親友を置いてそんなこと出来ないよー。」

「馬鹿ー…さつ もあんなに震えてたでしょー…アンタにの場面を見て、あの事を思い出したんでしょうー。」

竜馬の言葉にて、鈴は思いつきつと言つた。尚、鈴は竜馬に昔の事を聞いていたので知つていたのだ。

「別に、あたしも最後までやり合つつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて、「危ないつーー！」

……

竜馬は間一髪、鈴の体を抱き抱えて掠つた。その後に、先程鈴がいた空間が熱線で砲撃された。

「ゲーム兵器…………。しかもセシリアのHJよつ出力が高いな

竜馬はハイパーセンサーの簡易解析で熱量を知ると、背中に冷たいものが伝わつた。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿ー離しなさいよー。」

「お、落ち着いて」「う、つねにこいつらをこいつらをつー…ちよつ、殴らないでつー。」

流石にシールドエネルギーで守られているが、鈴はパンチを連射砲の如く竜馬の顔に放つていた。

「だ、大体どこ触つて」「来るよー。」

竜馬は鈴の言葉を遮るとビームを回避した。だがビームは煙を晴らすかのように連射されると、その射手たるISがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

竜馬達はそのISを見て驚いた。  
姿から異形だった。深い灰色をしたそのISは、手が異常に長くて爪先よりも下まで伸びており、人間の胴程の巨大な拳を持っていた。しかも首というものが無く、肩と頭が一体化しているような形をしていった。フル・スキン そして何より特異なのが、肌を1mmも露出していない“**全身装甲**”だった。

(デカイな…)

竜馬は所属不明ISを見て、その巨大な姿に驚いた。  
腕を入れると2mを超える巨体は、姿勢維持のためか全身にスラスト一口が見て取れ、頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕には先程のビーム砲口が左右合計4つがあった。

「……何者なんだ、あなたは」

「…………」

竜馬の呼びかけに、所属不明ISは答えなかつた。

『龍東くん！鳳さん！』

すると、真耶がプライベート・チャンネルで話してきた。心なしか、

いつもより声に威厳があった。

『今すぐアリーナから脱出して下さい。すぐに先生達がIRSで制圧に』  
「いや、先生達が来るまで僕達で食い止めます……えつ……」  
「……り、龍東くん！？」

竜馬の発言に、真耶は驚いた。

「あのIRSは遮断シールドをも突破するパワーがあります。今ここで誰かが食い止めないと、観客席にいる人達に被害が及ぶ可能性があります。シベラー！」

『はいっ！』

「今から所属不明IRSのデータを取るから、解析を頼むよ」

『御意！』

「いいかい、鈴」

「だ、誰に言つてどのよ。そ、それより離しなきいってばー動けないじゃない！」

「ああ、『メソ』」

竜馬が腕を放すと、鈴は頬を赤くして自分の体を抱くような格好で離れた。

『龍東くん！？だ、ダメですよー生徒さんにもしもの事があつたら

竜馬は真耶の言葉をそこまで聞くと、敵IISが体を傾けて突進してきた。

「くつー。」

だが竜馬はそれを回避すると、鈴と横並びになつた。

「ふん、向こうにはヤル気満々みたいね」

「みたいだね」

竜馬はウナギメダルをゴリラメダルに、サイメダルをタカメダルに変更すると右手をスライドした。

【タカ！ゴリラ！バッタ！】

頭部と腕部の装甲を変更すると、竜馬はホーカアイを起動して敵IISを見つめた。

「竜馬、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。アンタの武器、近接戦闘がメインみたいだしね」

「まあね。それじゃあ……」

竜馬はゴリバゴーンを、鈴は双天牙月の切つ先をキンシと当てると竜馬は言った。

「敵IISの信号を《ジョントルハーツ》と固定！行くよ、鈴！」

「わかったわ！」

そして2人は即席コンビネーションで飛び出した。

ピット

「もしもしー？龍東くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますーー！？」

「本人達がやると言つていいのだから、やらせてみても良いだろ？」

「お、お、織斑先生！何を暢気な事を言つてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからライライラするんだ」

千冬はコーヒーに砂糖を入れてもう一度スプーンで掬うと、真耶はある事に気が付いた。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「…………」

真耶に指摘された千冬は、ぴたりと「ホールー」に運んでいたスプーンを止め、白い粒子を大きく塩と書かれた容器に戻した。

「あつ…せっぱり龍東くん達の事が心配なんですね…?だからそんなミスを…」

「…………」

「…イヤな沈黙だった。何かまずい事が起きる気がして、真耶は話を逸らそうと試みた。

「あ、あのですねつ 「山田先生、ホールーをどうぞ」 …へ?  
?あ、あの、それ塩が入ってるやつじや……」

「どうぞ」

だが真耶の努力虚しく、千冬はすこしつとホールー(微塩)を押し付け、真耶は涙目で受け取った。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むと良い」

(…あ、悪魔だ)

真耶は心の中でさつ歎くと、セシリ亞が千冬に話し掛けた。

「先生！わたくしにIIS使用許可を…すぐに出撃できますわ…」

「やつしたいといひだが……」

そつ言いながら、千冬はブック型端末の画面を数回叩いて表示される情報を切り替えた。

「これを見ろ」

千冬はそれをセシリ亞に見せた。画面に表示されているのは、この第4アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？しかも、扉が全てロックされて……あのIISの仕業ですの…？」

「そのよつだ。これでは避難する事も救援に向かうことも出来ないな」

実際に落ち着いた調子で話す千冬だったが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないばかりに忙しなく画面を叩いている。

「で、でしたら…緊急事態として政府に助勢を」「やつている。現在も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」…」

千冬は言葉を続けるが、益々募る苛立ちに眉がぴくっと動いた。すると、画面に解析中と表示しているジベラーが話し掛けた。

『「解析中」ワタクシも敵IISの解析とロック解除を進行中なのですが、なにぶんこの身体では満足に力を発揮できませんねえ……』

それを聞いたセシリ亞は、頭を押さえながらベンチに座った。

「はあ……。結局、待つている事しか出来ないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって！？」

セシリ亞は怒りながらベンチを立つた。

「お前のHISは1対多向きだ。多対1では寧ろ邪魔になる」

「そんな事ありませんわ！このわたくしが邪魔だなどと連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどうこう風に使う？味方の構成は？敵はどのレベルを想定してある？連續稼動時間

「……わ、分かりました！もう結構です！」

するとセシリ亞は、千冬の指導を両手を揺らして止めた。

「ふん。分かれば良い」

「はあ……。言ひ返せない自分が悔しいで……あら~」

先程よりも深い溜め息をしたセシリ亞はベンチに座りうとしたが、「あー」とこくこくした。

「あら~。算さんせど」「く……」

キヨロキヨロと周囲を見回すセシリ亞とは対照的に、千冬だけはさ

つきまでと違う異様に鋭い視線をしていた。しかし、現時点ではそれには誰も気がつかなかつた。

#### 第4アリーナ・ステージ

「うおおおおおつ！」

その頃、竜馬は「ゴリラーム」による連続攻撃を行つてゐるが、ジエントルハーツはそれをするりと避けていた。

「竜馬！」

鈴は竜馬に言つて衝撃砲を撃ち込むが、ジエントルハーツは全身に付けたスラスターを駆使して一気に回避行動を行つた。

（エネルギー残量80を切つたか…。鈴との対戦でメダルを変えすぎたな）

「竜馬つ、離脱！」

「ああつー。」

ジョントルハーツは回避後、でたらめに長い腕を振り回して接近してきた。

「ああもうへ、めんべくせいわねコイシー！」

鈴は焦れたように衝撃砲を展開し、砲撃を行った。だがジョントルハーツの腕はその見えない衝撃を叩き落とした。

「……鈴、後エネルギーは殿ぐらい残ってる？」

「一八〇つてところね」

鈴もだいぶ削られているが、それでも竜馬よりはマシだった。甲龍は燃費と安定性を第一に考えて作られているので、エネルギーの減りは少ないので。

「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁台つてところじゃない？」

「ゼロじゃなきゃこじよ」

竜馬の言葉に、鈴は呆れて言った。

「あつきた。確率は『カイ程いいに決まってるじゃない』。アンタつて、宝くじ買つタイプ？」

「それを買つんだったら、@クルーズのパフェを買つよ

「あつや。……で、どうすんの？」

「逃げたかったら逃げてもいいよ」

「なつー?」

竜馬の発言に、鈴は怒鳴るように言った。

「馬鹿にしないでくれるー? あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾巻いて退散なんて、笑い話にもならぬわ!」

「分かった。じゃあ、鈴の背中くらいは守ってみせるよ」

「え? あ。う、うん……。ありが」

鈴は頬を赤くした瞬間、横をビームが掠めた。

「ちつ! 厄介だな……(しかしあのIIS、こっちが会話してる時はあまり攻撃してこないな……。興味でも持っているのか? それに行動が機械じみて )」

『竜馬殿!』

竜馬が考へていると、シベラーからプライベート・チャンネルで連絡してきた。

「何だい!」

『敵IISの解析が完了しました。今からデータを送ります』

送られたデータを見ると、竜馬は驚くと同時に納得した。

「……なるほど。これで合点がいった！」

「竜馬、どうしたの？」

「鈴。敵の正体が分かつた」

「ホントに！」

鈴が驚くなか、竜馬は話し続けた。

「ホークアイから見た記録をシベラーに解析してもらつた結果、あのIS……ジエントルハーツは…………、ドロイドが操縦している事が分かつた！」

「ええっ！？ そんな、あり得ない。“ISは人が乗らないと絶対に動かない”のに……」

鈴は真剣にジエントルハーツを見つめた。

そう……ISは人が乗らないと絶対に動かないと、教科書に載っている。だが、今最先端の研究でそれが不可能かどうかは分からぬ。その事を黙れば、誰も知る事も無いのだから……。

「竜馬」

「ん？」

「どうしたらいい？」

竜馬と鈴は目が合つた。鈴は竜馬が何か策を持っていると悟り、竜馬は鈴がそのサポートをしてくれると悟つた。

「ジョントルハーツが飛び上がるのを衝撃砲で防いでほしい」

「当たなくていいの？」

「当たなくてもいいんだ。地上にいれば、いつの勝ちだ」

すると竜馬はベルトのメダルを全て変更しようとその時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「竜馬あつ！」

「キーン……

「つーほ、籌つー！」

竜馬は发声源を探ると、B.ピット・ゲートにはマイクを持った筹が立っていた。さらに数十倍に拡大して筹を見ると、はあはあと肩で息をして、怒っているような焦つているような不思議な様相をしていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

「…………」

ジョントルハーツは興味を持つたのか、竜馬たちからセンサーレンズをそらしてじっと筹の方を見た。

「まざい……」

それに気付いた竜馬は、バッタメダルをチーターメダルに変更して移動しながら右手をスライドした。

【タカ一ゴリラ一チーター一】

チーターレッグに変更した瞬間、ジェントルハーツは左腕のビーム砲口を箒に向けて撃つてきた。

「つー？」

「箒いつー！」

「竜馬つー？」

竜馬は鈴の言葉を聞かず、チーターレッグを最大速度で加速して箒の前に割り込んだ。

ズドオオオン！

「…………つー竜馬つー？」

「くつ……、今のは……効いたね……」

竜馬はなんとかビームを「リバーン」で防いだが、腕部の装甲は焦

げる他、エネルギーが一桁になってしまった。

「大丈夫かい…… 篓」

竜馬は篓を見て優しく微笑みながら囁つと、篓は小さく頷いた。

「やうか……」

そして竜馬は再びジエントルハーツに向くと、先程の表情と違い、怒りをあらわにして言った。

「許さない…。僕は、あんたを許さない…！」

そして竜馬はタカメダルをサイメダル、チーターメダルをゾウメダルに変更して右手をスライドした。すると、亞種コンボとは違つて銀色の光りに包まれると、タトバコンボの時と同じような不思議な歌が聞こえた。

【サイー・ゴリラーボウー・サツゴーザ…サツゴーザ…】

光りが收まると、竜馬の口には白銀のマスクをしており、サイヘッド・ゴリラーム・ゾウレッギの装甲を纏つた姿を現して地上に降り立つた。

そしてハイパーセンサーには、《サゴーゾコンボ》の成立を表示していた。

「…………」

ジエントルハーツは再び龍馬に興味を示しビームを撃つてきた。

「『竜馬つー!』?」

筈と鈴は叫ぶが、竜馬は1歩も動かなかつた。そして誰もがビームの直撃を逃れないとthoughtた、その時だつた。

「え？」

「ビームが…曲がった！？」

竜馬の約2m手前で、ビームが曲がったのだ。

「……ツ！ウオオオオオオオオオオ！」

すると竜馬は物凄い雄叫びを発すると、その振動でステージ全体を揺るがした。

「ウオオオオオオツ！ウオオオオツ！ウオツ！ウオツ！ウオオオオ  
オオオツ！」

そして竜馬はゴリラ特有のドランギングをジエントルハーツに見せながらした。

" " " "

「何、この音……」

鈴は竜馬が発しているドリミングとは別の音に気付いた瞬間、甲龍のハイパー・センサーから緊急通告を行っていた。

ジエントルハーツ周辺の空間に異常発生。至急退避して下さい

「退避つて……ええつ！？」

鈴は退避しながらジエントルハーツに目を向けると驚いた。その周辺の地盤は砕けて浮かび上がり、ジエントルハーツ自身も身動き取れないようにジタバタするだけで、竜馬のドリミングによる振動に成すすべが無かつた。

そう……これがサゴーゾコンボの能力。

周囲の重力場を自在に操って相手のPICOをも無効化にし、特定の対象の周囲を高重力・無重力にしてしまうワンオフ・アビリティー……『Sun goes up』である。

ドガガガンッ！

竜馬はドラミングを止めると、ジエントルハーツと砕けた地盤は地表に叩き付けられた。

「まだだつ！」

竜馬は高くジャンプしてジエントルハーツを踏み潰そうとするが、ジェントルハーツは右拳を叩き付けようとした。

グシャアッ！

だがサゴーネコンボになつた事で、オーズ自身を高重量に変えてズ  
オーストンプの威力が上がり、ジェントルハーツの右拳を完全に破  
壊した。

「おひあつーー！」

ドガアン！

そして、パコラームの一撃でジョントルハーツを約10m殴り飛ば  
した。

「鈴つー！」

「オッケーーー！」

鈴は竜馬に呼ばれると、すぐさまジョントルハーツに衝撃砲を連射  
して飛び立たせないようになつた。それを見た竜馬はベルトにエネル  
ギーを送り込むと、右手をスライドした。

【SCANNING CHARGE-】

「はあつーー！」

音声が発したその瞬間、竜馬はその場で跳躍した。

ズドオオオオンッ！

着地と共に銀色の波紋状のリングが発生してジェントルハーツに触れた瞬間、ジェントルハーツは地面に減り込みながら竜馬に引き寄せられていた。

「ハアアアアア……！」

竜馬はエネルギーをグラビドホーンに送り込むと、それは輝き出してエネルギー状の角が形成された。そしてジェントルハーツが手前1mのところで、エネルギー状の角を突き出した。

「セイヤアアアアツ！」

さうして竜馬は叫びながらその角を両拳で叩き込んだ、次の瞬間！

ドオオオ……ン”ツ！

「「あやつー」」

角が碎け散り、そこから凄まじい衝撃波が生み出された。

そして至近距離にいたジェントルハーツはその衝撃で吹っ飛ばされる同時に、左拳が吹き飛び装甲が半分以上も剥がされ、全身装甲

の中身を見せながら仰向けで地面に叩き付けられた。

これがサゴー・ゾコンボの必殺技、《サゴー・ゾインパクト》である。

「ハアツ、ハアツ…」

竜馬は荒く息をしていると、ボロボロだつた地面が元に戻つていつた。

「……やつたの？」

「……まだだつ！」

鈴と筈はジェントルハーツを見た数秒後、微かだがジェントルハーツは動いて立ち上がるつとしていた。

「「竜馬っ！」

2人は叫ぶと、竜馬は上を見上げて言った。

「……狙いは？」

『完璧ですわ！』

キュインッ！

刹那、上空から4つの光りがジェントルハーツを貫いた。その光り……ブルー・ティアーズの4機同時狙撃による攻撃だつた。

ボンツ！

ジョントルハーツの身体から小さな爆発が起こり、再度仰向かで倒れてしまった。

「アンタ、どうやつて入つて來たのよ？」

鈴はセシリアに向ひと、セシリアは高度を下げながら近付いていった。

「竜馬さんが敵IISの右手を破壊した時に、篠さんは反対側のピットから出て来ましたわ」

そして2人は一緒に竜馬の所へと行つた。

「ナイスタイミングだよセシリア。君ならやれると思つてたよ」

竜馬はぐつと親指を立てながら笑顔で答えると、セシリアは頬を赤くして言つた。

「そ、そうですの……。とつ、当然ですねー何せわたくしはセシリ亞・オルコット。イギリス代表候補生なのですからー！」

「ハハツ…。鈴もナイスフォローだったよ」

「何よ、その“も”つてーあたしはついでなのー！」

竜馬の発言に、鈴は頬を膨らませた。

「じめんじめん……」

竜馬は鈴の機嫌を治すように頭を撫でようとした、その時だった。

グラリッ

「……っ！」

竜馬は突然の眩暈に襲われるとオーバーズが強制的に解除され、竜馬は倒れてしまった。

「ちょつ！ 竜馬っ！」

「しつかりして下さい！ 竜馬さんっ！」

2人は気を失った竜馬を簾がいるピットに運ぶと、簾も気が動転するような取り乱しつぶりだった。

「…………？」

あれから気を失った龍馬は、保健室のベッドの上で目を覚ました。

「気がついたか」

「…………影宮さん？」

龍馬は体を起し、ベッドの横には影宮がいた。

「学園から連絡を貰ってな。千冬さんとシベラーから話を聞いてるだ」

「…………気を失つてたみたいですね」

「しかたないや。純正コンボを初めて使つたんだ。あれらは強力な分、精神を一気に使うから多様するなよ……」

影宮は言つ終わると、龍馬の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「……無事でよかったです。お前の関わる人もその手で守れて、良かったな」

「影宮さん」

「ん？」

「…………心配かけて、すみません」

「……ふつ

影富は竜馬の言葉にキョトンとした後、小さく微笑んだ。

「んじゃ、俺は千冬さんで呼ばれてるから行くぜ。少し休んだら部屋に戻るんだぞ」

そう言って影富は保健室から出て行った。

「あー、「ホン」「ホン」…」

すると影富との入れ違いに誰かが入ってきたが、竜馬は誰か分かつていた。

「… 篠

ジャツ！

篠は半分だけ開いていたカーテンを両手で開けた。

「やあ、篠

「へ、つむ…」

すると篠は腕組みをして言った。

「あ、あのだなつ。今日の戦いだがつ

「ん？ セツコ『えほん』はいつなつたの？ やつぱり無効試合かな？」

「あ、ああ…。あんな事が起きては当然だな」

「せつかあ……」

竜馬は小さく溜め息をすると、篠が話し掛け始めた。

「…………竜馬」

「何？…………っ…」

竜馬はいきなりの事で驚いた。話し掛けた直後、篠が竜馬に抱き着いたのだ。

「え、えっと、篠さん？」

「…ありがとうございます。お手てくれて」

「え…………うん」

篠はそれだけ言つと竜馬から離れた。竜馬は篠を見ると、恥ずかしいあまり顔を真っ赤にしていった。

「で、ではなー。」

そして篠は逃げるよくな早足で保健室を出て行つた。竜馬は見送ると急に眠気が来て眠りに落ちていった。

（十数分後）

「…………」

（……ん~）

竜馬は寝ていると、右頬に何かが触れたのを感じた。

「竜馬……」

竜馬は畠前を呼ばれると畠を開けた。すると顔の間近に鈴の顔があつた。

「鈴？」

「つーー?」

いきなり田を開けた竜馬を見て、鈴は頬を赤くしながら驚いた。

「…………何してんの?」

「おひ、お、おひ、起きあしたのー?」

「こや、呼ばれたから起きたんだよ。で、何か焦つてゐみたいだけ  
だ、じつたの？」

「あ、焦つてないわよー。勝手な事言わなこでよ、鴉鹿ー。」

「鴉鹿はヒドイなあ……」

龍馬は人差し指で右頬を搔きながら囁つて、鈴は「ふうー」と言  
ながらベッド脇の椅子に腰掛けた。

「……あ

「な、なこ?」

「勝負の決着ひじりある? 試合も無効になつたし……」

「その事なら、別にもうここわよ。あたしは我慢するわ

「やつか……。あ

龍馬は何かを呟くと鈴に話しかけた。

「ねえ、鈴

「ん、なこ?」

「次の日曜、僕が言つた喫茶店に行ひつか

その言葉に、鈴は表情をぱあっと明るくした。

「えー？ それって、その『一』

バーンッ！

だが鈴の言葉を遮るかのように保健室のドアが思いつきり開け放たれると、セシリアがつかつかと入ってきた。

「竜馬さん、具合はいかがですか？ わたくしが看護に来て　あら？」

セシリアはベッドの傍らにいる鈴を見つけると、その場で止まってしまった。

「どうして貴女が……？ 竜馬さんは1組の人間、2組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「何言つてんの？ あたしは親友だからいいに決まってるでしょ。あんたこそただの他人じゃん」

「わたくしだって親友ですわ！ それに、今は竜馬さんの“特別”コーチでしょ！ 代表候補生ですしね……」

「じゃあ明日からあたしが特別コーチになつたげる。代表候補生だし

「そ、そんなのダメですわ！」

「…………はあ」

鈴とセシリアが言い争いを始めるとい、竜馬はせつんとため息を落とした。

### 学園 地下研究室

学園の地下50㍍。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない隠された部屋に千冬と真耶がいた。

機能停止したジョントルハーツはすぐさまそこへと運び込まれ、シベラーと共にそらにて詳しく調べていた。

「…來たか」

ドアが開くと、影宮が入ってきた。

「これがIDSを動かしたドロイドか……」

影宮はジョントルハーツをまじまじと見ていると、千冬が質問をした。

「これは、お前が作ったのか？」

「外部装甲は確かに俺が開発してる物だが……内部システムは弄られてるな」

言い終ると、影宮はフツと小さく笑った。

（まさかドロイドにI-Uを操縦させるなんてな。……相変わらず凄いな、束……。まつ、俺の方が早いけどな……）

影宮は同一年の天才を思い浮かんではいるが、真耶が千冬に話し掛けた。

「龍東くんの最後の攻撃で機能中枢が完全に破壊されました。修復も、恐らく無理かと……」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「やうか。……やはりな」

どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をして言った。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、無い。今はまだ　な

そつまつて千冬はテイスプレイの映像に視線を戻すと、それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思

わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

**短編1話【甘辛なりへおきがえりあつ】（前書き）**

普段より短めです。

## 短編1話【甘辛なりへおきがえひを】

昼 デパート

「鈴、ここだよ」

対抗戦が終わった週の日曜、龍馬は鈴と一緒にデパートへとやつて來た。

「…………」

だが今の鈴は頗る機嫌が悪かった。その理由はただ一つ……。

「ほう、ここがそつか」

「外装はまあまあですわね」

(何でこの2人も來てるのよー。)

そう、龍馬の後ろに篠とセシリアがいたせいだ。  
2人と出会つたのは“偶然？”にもバス停で、龍馬がここに來た理由を言つと“偶然？”2人も龍馬と同じ用件で來たらしく。

(絶対わざとね……。せっかく龍馬とふたりつきりのデートなのにー。)

「…鈴、どうかした？」

「なつ、何でもないわよー！」

「そうかい？じゃあ、入ろうか」

そして4人はウサオちゃん喫茶へと入つて行った。

ウサオちゃん喫茶

「何だかこの店……、おかしいな」

「妙な雰囲気ですわね……」

喫茶店に入ると、篝とセシリアは店内の異様な雰囲気に違和感を持った。

店員の服装は統一されず、様々なコスチュームを身に纏っていた。

「……コスプレ喫茶なの？」

「そうみたいだね……」

竜馬は鈴の言葉を肯定すると、前から誰か歩いて來た。

「あら、可愛いお客様達ね」

「ん？」

「「「「さつー」」」

竜馬達は声を掛けられると、竜馬以外の3人は顔を引き攣りながら驚いた

その声の主は普通のエプロン姿の男の店員だったが、筋肉の塊のような体つきで綺麗に化粧をした店員だった。よく見ると、エプロンに付いている名札に店長と書かれている。

「いらっしゃい ヒカリちゃん、4名様を3番テーブルにご案内してね」

「はーい」

（（（（「うわあ……））））

店長は店員を呼び出しだが、その店員は男なのにセーラー服を着ており、竜馬達は心の中で引いていた。

「はーい。じゃあ、いらっしゃいどーぞお 」

4人はテーブルに案内されると椅子に座り、店員はメニューを置いて行ってしまった。ちなみに竜馬の隣は鈴、向かいは筈、筈の隣はセシリ亞である。

「それじゃ、いらっしゃい！」

そして店長も仕事に戻り、竜馬達はメニューを見た。

「メニューも豊富だな」

筈はメニューを見て言つた。この店の定番はパフェだが、アイスやケーキ、和風のスイーツもあった。

「決めた！あたし、イチゴのスペシャルムースパフェ」

「私は季節のフルーツあんみつにしよう」

「わたくしはチーズタルトにしますわ」

「僕はウサオちゃんスペシャルで……、店員さん。よろしくお願ひします」

「分かりました」

店員はメニューを聞くと、奥の厨房へと行ってしまった。

（うーん……。いろんなコスチュームがあるけど圧倒的にモデルがねえ……。竜馬が着ればまだけど……）

（まったく……、男が女の服を着るなど破廉恥な……。だが、竜馬なら……つーな、何を考えているんだー。）

（早くここんなお店に出て、竜馬さんとまたショッピングに行きたいですわ……）

（ウサオちゃんスペシャル……。どんな物なんだろう……）

それぞれが考えていると、店長が直々に頼んだメニューを持つて來たようだ。

「はい、どうぞ」

「……」

「い、これは……っ！」

竜馬達の前に置かれるスイーツ。だが3人は1個のパフェを見て若干引き竜馬は驚くと、店長が話し掛けってきた。

「うふ　かわいいボーヤには、特別さ・あ・び・す　アンコとプリンとチョコとキャラメルとバナナとキムチの、たゞつぱり詰まつた甘辛い初恋の味。ウサオちゃんスペシャル 召し上がりて」

（（（……キムチ？）））

竜馬以外の3人は最後のキムチに疑問を持つと、竜馬はスプーンを手に持つた。

「（はつ、初恋の味か……）い、いただきます……」

「……いただきます」

竜馬に続いて3人もそれぞれのメニューを食べた。

「おいしいわね、このパフューム」

「うむ。アンコの甘さとフルーツが合つてるな」

「「」のチーズタルトも、なかなかですわ」

「「」、「」の甘~い味にペコリとキムチが効いて……」

それぞれの言葉を聞いた店長は良い笑顔で話しかけた。

「ありがとう アタシは「」の喫茶店の店長のコキエよ よろしくね  
」

コキエはもう言いながら龍馬を見た。

「隠し味のキムチが、パフェの甘さを引き立て 「ねえ、ぼく  
……はい？」

するとコキエは、龍馬の肩に手を置いて話し掛けってきた。

「食べ終わつたら、ちょっと来てくんない?」

「何ですか? (何が嫌な予感がするのは……仮のせいかな?)」

「すぐ終わるから…ね?ね?」

「はあ……」

「ホントやったわ  
」

龍馬は返事をすると、コキエは喜びながらその場で跳ねた。

「じゃ、待つてるからね~」

「」

コキエはそう言いながら離れると、奥の花柄の扉に入つていった。

（数分後）

「…………」「やあ、やあ、やあ、やあ！」

4人は食べ終わると、鈴が竜馬に話し掛けた。

「さて。竜馬、行きなさいよ」

「ああ。じゃあ、「ちょっと待て！……」…… 篠？」

竜馬は立ち上がると、篠が立ち上がって話し掛けた。

「その…………あれだ。竜馬だけでは不安だから、私もついて行こう」

「「なつー。」「

篠の言葉に鈴とセシリアは驚くと、同じように立ち上がった。

「た、確かに。あの店長は何かありますから、わたくしも！」

緒いたしますわ」

「ま、分からぬ事も無いわね。あたしも一緒に歩いてあげるから、早く行くわよ」

「結局みんなで行くんだ……」

そして4人は奥に行くと、花柄の扉をノックしてから入つて行つた。

## 衣装室

「うわあー…。物凄い量の衣装ね…………」

4人は部屋に入ると大量の衣装がハンガーに掛けてあつた。

「あら?みんな来ちゃつたのね」

すると奥からユキエがやつてきたが、その手にはかわいらしげドレスを持っていた。

「あの……その手に持つてるのは?」

セシリ亞は質問するが、ルキルは龍馬に近づいていた。

「ほく、かわいこじやなーい ちよつとパン、着てみてよ。ね？」

「何ですか……」「……？」

「かわいこでしょ？」

「なんか、貴方ついでにこの辺にいたんだなって思つて」

シユパパパッ！

コキエはウインクをした瞬間、田上も畠山も速さで龍馬の服とズボンを脱がせた。

「ぬわっ！？（ちゅっ、こいつの間に！？）」

インナーとパンツ姿にされた龍馬を、篠、セシリ亞、鈴は顔を赤くしてジーッと見た。

（つよ、龍馬……）

（こいつがヌースーツでよく見ますナビ……）

（やっぱ、こい身体してるわね……）

「ねえっと一返してみたが……」

龍馬はコキエに脱がされた私服に手を伸ばした瞬間だつた。

シユパパパツ！

「わわ～ ゆく似合ひのわよ～」

コキエは、また田にも留まらぬ速さでドレスを龍馬に着せた。

「あ……ああ……」

コキエは喜ぶが龍馬は言葉が出ていはず、3人は龍馬のドレス姿に見とれていた。

(龍馬…意外と似合つて…つー違つ違つー男が女の服を着るのはつ！だがしかし……)

(龍馬さん……まさかドレスも似合つてしまつとは……。コレは良いものを見れましたわ)

「ね。貴女達も、そつ思ひでしょ？」

「う、うむ……」

「や、そうですね……」

竇とセシリアは頬を赤くしながら頷いた。

「うへん……」

だが鈴はふふんと笑み零すと「キエ」と言った。

「あまいわね、ウサオちゃん」

「キエよ」

すると鈴は衣装の中から一着、淡い紫のメイド服を持って来て竜馬に近づいた。

「ちよ、ちよっと鈴！？」

竜馬はたじろいだ瞬間、鈴は目を光らせた。

シユパパパッ！

その瞬間、竜馬は鈴が持っていた服に着せられてしまった。

「竜馬には、こっちの方が断然似合つわっ！」

「そ、それはっ！？」

ユキエは鈴が着せたメイド服姿を見て驚くが、また衣装の中から濃い青のメイド服を持って来た。

シユパパパッ！

「うわー。」

龍馬はまた脱がされ、また着せられた。

「これでどう?」

「やるわね……」

だが鈴もむさりに淡い緑のメイド服を持って来たが、デザインが際どかつた。

「ああ、これが切り札よー！」

「鈴、それだけは勘弁してー！」

「だいひじょーぶーあたしに任せなさい……」

「嫌だああああつ……」

シコパパパツ！

だが叫び虚しく、龍馬はまた着せられてしまった。

「わーとこなもんよー。」

「やるわね……。アタシもこまでは出来なかつたわ……」

ユキエは鈴の選んだ竜馬の姿を見て驚くが、背中から物凄いオーラを出して目を輝かせて言った。

「でも、まけない！」

# シユパパッ！

「うわああああ！」

その瞬間、竜馬は先程の服から濃い赤のメイド服に着せられた。どうやらこの2人、竜馬にはメイド服が似合うと決めているようだ。

「これぐらいしないとね

〔二〕

ユキエは勝利を確信してワインクをすると、それが鈴の闘志を燃やしてしまった。

「負けないわよっ！ウサオちゃんーー！」

だからやめてアツー！

竜馬の叫びと共に、更なる激戦が始まった。尚、簞とセシリ亞は手で顔を隠すが指の間から見ていた事は誰も知らない。

後分數

「元壁よーまさに、パーへツクツー！」

۱۰۷

ユキエの言葉に簫とセシリ亞は手を退けた。そこには黒いロングスカートのメイド服姿をした竜馬が立つており、目にはうつすら涙が浮かんでいた。

「...」  
「凄い」

「綺麗ですわ……」

「あはははっ！面白い！あんた、ずっとそのまんまでいたら？」

「…………（ひ、ひ）」

龍馬は心の中で泣くと、口キハせ鈴に近づいて言つた。

「貴女、やるわね……。アタシをここまで熱くさせたのは、海の向こうのあの男以来よ……」

「アンタもやるわね……。また勝負しましょ

」

「ええ 勿論よ」

そしてユキエと鈴は熱い握手を交わした。  
こうして、2人は友情を手に入れたのだつた。

「うう……」

そして龍馬は、ここに2度と来なさいと誓つたのだった。

**短編1話【甘辛なうへおきがえちゅつ】（後書き）**

知ってる人なら有名なあのシーンを入れました。

たまに短編を入れるので、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6059x/>

---

I・O O O・S インフィニット・オーズ・ストラトス

2011年11月26日19時00分発行